



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESDコンソーシアム 成果報告書2020



国立大学法人
信州大学

ごあいさつ

長野県はユネスコエコパーク“志賀高原”・“南アルプス”をはじめとした豊かな自然に恵まれ、学校現場では教員のみならず地域のさまざまな組織が主体となって、環境教育の取り組みが盛んに行われています。

信州大学教育学部においても、全学で取り組む「環境マインドをもつ人材育成」の理念のもと、信州の素晴らしい自然に触れ合う授業を通して、子どもに自然環境の重要性を伝えられる人間性豊かな教員の育成に努めております。

こうした中、わたしたちは長野県内に広がりつつあるユネスコスクールのさらなる拡大と、ESDの普及に向け、平成28年2月に「信州ESDコンソーシアム」を立ち上げ、活動を進めてまいりました。

ESD (Education for Sustainable Development) は、環境・貧困・人権・平和・開発といったさまざまな地球規模の課題がある現在において、地球に存在する人間を含めた命ある生物が、遠い未来までその営みを続けていくことができるよう、「持続可能な社会づくり」の担い手を育む教育です。

2015年9月の国連サミットにおいて、この「持続可能な社会づくり」に向けた国際目標である「持続可能な開発目標 (SDGs)」が定められ、世界で様々な取り組みが動き出しました。長野県は2018年6月にSDGs達成に向けて優れた取組を提案する「SDGs未来都市」に選定され、2019年6月には新たなユネスコエコパーク“甲武信”の登録が決定するなど、決定しました。2020年には誰もがコロナ禍の中にございましたが、こうした状況であるからこそ、ESDを通じた持続可能な社会と、そうした社会づくりの担い手の育成が求められているのです。

「信州ESDコンソーシアム」は、ユネスコスクールや地域のさまざまな組織、そして先行する他地域のコンソーシアムとの連携も進めながら、より大きく羽ばたこうとしております。

2020年度の活動をまとめたこの成果報告書が、今後の長野県をはじめとする我が国のESD推進の一助となれば幸いです。

令和3年8月

信州大学教育学部長
宮崎 樹夫



目次

ごあいさつ 信州大学教育学部長 宮崎 樹夫 1

I 信州 ESD コンソーシアムの概要

| | |
|------------------|----|
| 信州ESDコンソーシアムの概要 | 4 |
| 信州ESDコンソーシアム規約 | 6 |
| 構成団体名簿 | 8 |
| 役員名簿 | 9 |
| 信州ESDコンソーシアム事業実績 | 10 |

II 通常総会

| | |
|----------|----|
| 式次第 | 12 |
| 参加者名簿 | 13 |
| 当日の様子 | 14 |
| 通常総会議事抄録 | 15 |

III 成果発表 & 交流会

| | |
|----------------------|----|
| チラシ | 18 |
| <成果発表> | |
| 1 山ノ内町立西小学校 | 19 |
| 2 山ノ内町立東小学校 | 21 |
| 3 飯田市立上村小学校 | 22 |
| 4 飯田市立和田小学校 | 23 |
| 5 宮崎県綾町立綾中学校 | 25 |
| 6 岐阜県高山市立荘川中学校 | 27 |
| 講評① | 28 |
| 7 山ノ内町立南小学校 | 30 |
| 8 高山村立高山小学校 | 32 |
| 9 群馬県みなかみ町立新治小学校 | 34 |
| 10 群馬県みなかみ町立藤原小学校 | 35 |
| 11 飯田市立遠山中学校 | 36 |
| 12 山ノ内町立山ノ内中学校 | 38 |
| 講評② | 41 |
| 13 長野市立東条小学校 | 43 |
| 14 いいづな学園グリーン・ヒルズ小学校 | 44 |
| 15 長野市立信里小学校 | 46 |
| 16 茅野市立永明小学校 | 47 |
| 17 信州大学教育学部附属松本中学校 | 48 |
| 18 文化学園長野中学・高等学校 | 49 |
| 19 ユネスコスクール卒業生 | 52 |
| 講評③ | 53 |
| 20 環境カレッジ 学校講座 | 56 |

IV 長野県内のユネスコスクール年次報告

| | |
|---------------------|----|
| 1 信州大学教育学部附属幼稚園 | 58 |
| 2 茅野市立永明小学校 | 59 |
| 3 高山村立高山小学校 | 60 |
| 4 山ノ内町立東小学校 | 61 |
| 5 山ノ内町立西小学校 | 62 |
| 6 山ノ内町立南小学校 | 63 |
| 7 信州大学教育学部附属長野小学校 | 68 |
| 8 信州大学教育学部附属松本小学校 | 69 |
| 9 高山村立高山中学校 | 70 |
| 10 山ノ内町立山ノ内中学校 | 70 |
| 11 信州大学教育学部附属長野中学校 | 71 |
| 12 信州大学教育学部附属松本中学校 | 72 |
| 13 長野県中野西高等学校 | 73 |
| 14 長野県長野西高等学校 | 74 |
| 15 文化学園長野中学・高等学校 | 75 |
| 16 信州大学教育学部附属特別支援学校 | 77 |

V ESD 通信

| | |
|-------|----|
| No.34 | 80 |
| No.35 | 81 |
| No.36 | 82 |
| No.37 | 84 |
| No.38 | 86 |

I

信州 ESD コンソーシアムの概要

信州 ESD コンソーシアムの概要

1 設立の背景

信州大学教育学部は、全国の教員養成系学部単独では初めて環境マネジメントシステムに関する国際規格 ISO14001 の認証取得を受け、エコキャンパスの構築に取り組んできた。また学部での環境教育の授業の必修化に取り組み、1年生全員が環境監査資格を取得する等、環境マインドを身につけ、環境教育を指導できる卒業生を長野県内の教育現場に送り出してきた。

また、長野県は志賀高原、南アルプス、甲武信という、日本で最も多い3つのユネスコエコパークを抱え、豊かな生物多様性を有する日本でも稀な恵まれた自然環境の中にある。こうした立地から、県内の環境保護に対する意識は高く、行政のみならず、企業やNPO法人等において様々な取組が恒常的に行われている。

一方で、長野県内の学校現場でのESDの認知度は低く、その推進拠点と位置づけられているユネスコスクールの加盟校も、コンソーシアム設立前の平成28(2016)年2月時点では4校に留まっていた。また、企業や各種団体、ユネスコ協会をはじめとするNPOなどが、それぞれ個別にESDの推進に関わる意思を持ち、また活動を行っている団体もあったものの、学校とのつながりが少なく、教育現場では十分に活躍できていなかった。こうした現状から、長野県内でESDの普及・実践を推進するため、学校現場と県内でESDに携わる様々なステークホルダーを橋渡しし、ESDについての情報交換や交流、連携を促進する仕組みの構築が求められていた。

そこで本学教育学部は文部科学省「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」を活用し、平成28(2016)年4月からESD支援団体の設立準備に取り組んだ。平成29(2017)年2月に、本学教育学部を中心に、県内の各ユネスコスクール、教育委員会、NPO等各種団体などにより構成される『信州ESDコンソーシアム』を設立した。

2 コンソーシアムの機能と特徴

信州ESDコンソーシアムの目的は、長野県全域にESDを普及・定着することである。この達成に向け、多様なESD関係者と協働し、以下の取り組みを行っている。

1. ユネスコスクールなどの教育組織でのESD推進
2. ESDに関わる人たちの交流の場を創出
3. 企業・NPOなどの多様な主体が活動できる機会を創出
4. コンソーシアムや関係組織の成果の発信

5. ESD 関連情報を共有する場を提供

また近年は、SDGs未来都市となった長野県の取り組みと共鳴し、ESDとSDGsを結び付けて学校現場で実践するための普及・啓発にも取り組んでいる。第四次長野県環境基本計画(2018年-2022年)において信州ESDコンソーシアムは、長野県におけるESD普及・推進の主要な担い手と位置づけられている。

また信州ESDコンソーシアムでは、ユネスコが主導するESDと、長野県の特徴のひとつでもあるユネスコエコパークの活動を連動させ、その相乗効果を発揮する実践を目指している。このことは他のコンソーシアムにはない、特徴的な取り組みである。

3 コンソーシアムの活動

(1) ユネスコスクールに関する支援

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示された理想を実践することを目的とした学校であり、また日本ではESD推進拠点として位置づけられている。信州ESDコンソーシアムは長野県内の各種学校のユネスコスクール加盟申請を支援している。ユネスコスクールへの加盟を検討している学校や、加盟前のチャレンジ期間に入っている学校を対象に、活動実践への指導や助言を行うほか、要望に応じてコーディネーターが学校に出向いて、教職員を対象としたESD/SDGsの出前研修会を行っている。

信州ESDコンソーシアムは、ユネスコスクールに加盟済みの学校に対しても、活動実践に対する各種支援を行っている。日常的に学校訪問を行いながら活動実践に対して指導・助言を行うとともに、課題や要望をうかがい、時宜にかなった支援を提案・実施している。支援内容はESD/SDGsの出前研修会の開催や校内研究会・授業公開への参加、活動をサポートする団体等のコーディネートなど、教職員を対象とした間接的支援が中心であるが、コーディネーターがゲストティーチャーとして直接、学習支援を行う場合もある。

(2) 多様な主体間の連携促進とESDの普及啓発

信州ESDコンソーシアムには各ユネスコスクールやその加盟希望校のほか、教育委員会、民間ユネスコ協会、NGO、企業・団体など多様な主体が参加しており、県内ユネスコスクールの活動を支援するプラットフォームとして機能している。

また市町村教育委員会やユネスコ協会関係者など、学校現場でのESD実践に携わる多様な主体を対象としたESD/SDGs研修会の講師を務め、その

普及に取り組んでいる。

(3) 交流機会の創出

信州ESDコンソーシアムでは発足以降毎年、ユネスコスクールで学ぶ子どもたちが日頃のESD実践の成果を互いに発表しあい、交流を通じて学びあう「成果発表&交流会」を、信州大学を会場に開催している。

また全国のユネスコスクール等との交流を促進するため、ユネスコスクール全国大会や他地域コンソーシアムが主催するESD研修会などへの、コンソーシアム加盟校等の参加支援を行っている。

(4) ユネスコエコパークを活用したESD/SDGsの普及・推進

ユネスコエコパーク(生物圏保存地域)は、ユネスコ人間と生物圏(MAB)計画の一環として実施されている事業であり、豊かな生態系を有し、地域の自然資源を活用した持続可能な経済活動を進める地域が、自然と人の調和と共生を目指すモデルとして認定される。ユネスコエコパークにおいてESDは、地域の自然やそこに育まれた歴史文化についての地域住民の理解を深め、持続可能な地域づくりの担い手を育成する役割が期待されており、MAB戦略(2015-2025)でも主要な戦略目標のひとつと位置づけられている。またESD学習において、豊かな自然やそこに育まれた歴史文化といった学習資源を備えるユネスコエコパークは、好適なフィールド

ドということができる。

信州ESDコンソーシアムは信州大学附属志賀自然教育研究施設が立地する志賀高原ユネスコエコパークを中心に、ユネスコエコパークにおけるESD/SDGs学習支援に取り組むとともに、全国のユネスコエコパークに対する成果の発信や、学校間交流の促進を通して、ユネスコエコパークを活用したESD/SDGsの普及・推進に取り組んでいる。



信州 ESD コンソーシアム規約

第1章 総則

(名称)

第1条 この団体は、信州 ESD コンソーシアム（以下「本団体」という。）と称する。

(事務局)

第2条 本団体の事務局は、信州大学教育学部内に置くものとする。

(目的)

第3条 本団体は、様々なESD関係者が協力して長野県を中心としたESDを推進することを目的とする。

(活動)

第4条 本団体は、前条の目的を達成するために次の各号に掲げる活動を行う。

- (1) ユネスコスクールをはじめとする教育機関でのESDの推進と国内外のESD推進校との交流促進
- (2) 公民館、図書館をはじめとする社会教育施設、青少年教育施設を通じた社会教育におけるESDの推進
- (3) ウェブサイトや成果報告会等を通じたESD関連情報の共有
- (4) ESDに関するマルチステークホルダーの対話の場の構築
- (5) 企業、NGOを含む様々なステークホルダー間の協働の機会創出
- (6) その他本団体の目的を達成するために有益と考えられる活動

第2章 会員

(会員)

第5条 本団体の会員は、第3条の目的に賛同して入会する各種団体、教育関係機関及び任意団体（以下「団体等」という。）とする。

(入会及び退会)

第6条 入会を希望する団体等は、所定の入会申込書を事務局に提出しなければならない。

2 団体等の入会は、会長が許可する。

3 退会を希望する会員は、所定の退会申込書を事務局に提出し、任意に退会することができる。

(会費)

第7条 本団体の会費は、当面徴収しないものとする。

第3章 役員

(役員)

第8条 本団体に、次の役員を置く。

- (1) 会長 1名
- (2) 副会長 1名以上3名以内
- (3) 運営委員 会長が必要と認める定数

(役員の実務)

第9条 役員は、役員会を構成し、本団体の業務の執行を決定する。

2 会長は、本団体を統括し、本会を代表する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。

4 運営委員は、運営委員会を構成し、本団体の業務を執行する。

(役員の実任)

第10条 会長は、信州大学教育学部の長とする。

2 副会長は、運営委員の中から会長が選任する。

3 運営委員は、会長が指名し、総会において承認する。

(役員の実任)

第11条 役員の実任は2年とする。ただし、再任を妨げない。

第4章 会議

(会議の種類)

第12条 本団体の会議は、総会及び運営委員会とする。

(総会)

第13条 総会は、会員をもって構成する。

2 総会は、通常総会及び臨時総会とする。

(総会の権能)

第14条 総会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 規約の決定及び変更
- (2) 事業計画の承認
- (3) 事業報告の承認
- (4) 役員の実任
- (5) その他本団体の運営に関する重要事項

(総会の開催)

第15条 通常総会は、毎年1回開催する。

2 臨時総会は、次に掲げる場合に開催する。

- (1) 会長が必要と認め、招集の請求をしたとき。
- (2) 会員総数の3分の1以上から会議の目的を記載した書面又は電子メールにより招集の請求があったとき。

(総会の招集)

第16条 総会は、会長が招集する。

2 総会を招集する場合には、会議の日時、場所、目的及び審議事項を記載した書面又は電子メールにより、開催の日の少なくとも5日前までに会員に通知し、あるいはウェブサイト上で公表しなければならない。

(総会の議長)

第17条 総会の議長は、その総会に出席した役員の中から会長がこれを指名する。

(総会の議決)

第18条 総会の議事は、別段の定めがある場合を除き、出席した会員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(運営委員会)

第19条 運営委員会は、運営委員をもって構成する。

2 運営委員会に委員長1名及び副委員長1名を置く。

(運営委員会の権能)

第20条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 事業計画の立案と変更
- (2) 事務局の組織及び運営に関する事項
- (3) 総会の議決した事項の執行に関する事項
- (4) 総会に付議すべき事項
- (5) その他総会の議決を要しない業務の執行に関する事項

(運営委員会の開催)

第21条 運営委員会は、会長又は委員長が必要と認めた場合に開催する。

第5章 ESDコーディネーター

(ESDコーディネーター)

第22条 本団体に、ESDコーディネーター若干名を置く。

2 ESDコーディネーターは、本団体の目的を達成するために、長野県を中心としたESDの推進を支援する。

3 ESDコーディネーターは、長野県を中心としたESD活動に習熟した識者の中から、会長が指名する。

4 ESDコーディネーターの任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

第6章 雑則

(雑則)

第23条 この規約に定めるもののほか、本団体の運営に必要な事項は別に定める。

附 則

この規約は、平成29年2月18日から施行する。

令和2年度 信州ESDコンソーシアム構成団体名簿

令和3年3月31日現在

| No. | 団体名 | コンソーシアム区分 |
|-----|------------------------------|-----------|
| 1 | 信州大学 | 大学 / 代表団体 |
| 2 | 飯田女子短期大学環境教育ゼミ | 大学 |
| 3 | 高山村教育委員会 | 教育委員会 |
| 4 | 山ノ内町教育委員会 | 教育委員会 |
| 5 | 信州大学教育学部附属幼稚園 | ユネスコスクール |
| 6 | 茅野市立永明小学校 | ユネスコスクール |
| 7 | 高山村立高山小学校 | ユネスコスクール |
| 8 | 山ノ内町立東小学校 | ユネスコスクール |
| 9 | 山ノ内町立西小学校 | ユネスコスクール |
| 10 | 山ノ内町立南小学校 | ユネスコスクール |
| 11 | 長野市立東条小学校 | ユネスコスクール |
| 12 | 安曇野市立豊科南小学校 | ユネスコスクール |
| 13 | 飯田市立和田小学校 | ユネスコスクール |
| 14 | 飯田市立上村小学校 | ユネスコスクール |
| 15 | 信州大学教育学部附属長野小学校 | ユネスコスクール |
| 16 | いいづな学園 グリーン・ヒルズ小学校 | ユネスコスクール |
| 17 | 信州大学教育学部附属松本小学校 | ユネスコスクール |
| 18 | 高山村立高山中学校 | ユネスコスクール |
| 19 | 山ノ内町立山ノ内中学校 | ユネスコスクール |
| 20 | 信州大学教育学部附属長野中学校 | ユネスコスクール |
| 21 | 信州大学教育学部附属松本中学校 | ユネスコスクール |
| 22 | 長野県中野西高等学校 | ユネスコスクール |
| 23 | 長野県長野西高等学校 | ユネスコスクール |
| 24 | 文化学園長野中学・高等学校 | ユネスコスクール |
| 25 | 信州大学教育学部附属特別支援学校 | ユネスコスクール |
| 26 | NPO 法人みどりの市民 | 地域団体 |
| 27 | NPO 法人やまぼうし自然学校 | 地域団体 |
| 28 | 特定非営利活動法人長野県 NPO センター | 地域団体 |
| 29 | 長野市長沼交流センター | 地域団体 |
| 30 | 信更の学校を考える会 | 地域団体 |
| 31 | 一般社団法人長野県環境保全協会 | 地域団体 |
| 32 | 長野県ユネスコ連絡協議会 | 地域団体 |
| 33 | 長野ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 34 | 上田ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 35 | 松本ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 36 | 諏訪ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 37 | 飯田ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 38 | 木曾ユネスコ協会 | 地域団体 |
| 39 | 直富商事(株) | 地域団体 |
| 40 | (株)ミールケア | 地域団体 |
| 41 | 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター | 支援機関 |
| 42 | 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 | 支援機関 |
| 43 | 環境省中部環境パートナーシップオフィス (EPO 中部) | 支援機関 |

※区分「ユネスコスクール」には、申請中または申請検討中を含む

令和2年度 信州ESDコンソーシアム役員名簿

| 職名 | 氏名 | 所属 | 職名 | 備考 |
|---------|-------|--|------|----------|
| 会 長 | 宮崎 樹夫 | 信州大学教育学部 | 学部長 | |
| 副 会 長 | 柴草 隆 | 山ノ内町教育委員会 | 教育長 | |
| 副 会 長 | 宮島 和雄 | 一般社団法人 長野県環境保全協会 | 専務理事 | |
| 副 会 長 | 中野 清史 | 長野県ユネスコ連絡協議会 | 会長 | |
| 運営委員長 | 西 一夫 | 信州大学教育学部 | 教授 | コーディネーター |
| 運営副委員長 | 渡辺 隆一 | 信州大学教育学部 | 特任教授 | コーディネーター |
| 運 営 委 員 | 安達 仁美 | 信州大学教育学部 | 准教授 | コーディネーター |
| 運 営 委 員 | 水谷 瑞希 | 信州大学教育学部 | 助教 | コーディネーター |
| 運 営 委 員 | 本間 喜子 | 信州大学学術研究・産学連携推進機構 リサーチ・アドミニストレーションセンター | 助教 | |
| | 矢崎 靖雄 | 諏訪ユネスコ協会 | 会長 | コーディネーター |
| | 伊坪 百代 | 飯田ユネスコ協会 | 会長 | コーディネーター |

令和2年度 信州ESDコンソーシアム事業実績

| No. | 年月日 | 事業名 | 講師等 | 対象 | 参加者数 | 主催・共催・後援等 | 会場 |
|-----|-------------|---|--|--|------|---|-----------------|
| 1 | 2021/4/8 | ESD校内研修会(山ノ内西小学校) | 渡辺隆一 | 西小教員12名 | 12 | | |
| 2 | 2020/4/21 | 打合せ(山ノ内南小) | 水谷瑞希 | 南小学校教員2名(菅原先生, 林先生) | 2 | | Skype |
| 3 | 2020/5/1 | ESD校内研修会(信里小学校) | 渡辺隆一 | 信里小教員8名 | 8 | | |
| 4 | 2020/5/19 | ESD校内研修会(高山小学校) | 水谷瑞希 | 教員21名, 高山村役場職員2名 | 23 | 高山村立高山小学校 | ZOOM |
| 5 | 2020/5/21 | 打合せ(中野西高等学校) | 水谷瑞希 | 中野西高等学校教員(小林先生) | 1 | | 志賀施設 |
| 6 | 2020/6/16 | 打合せ(山ノ内教委等) | 水谷瑞希 | 山ノ内町教育委員会(柴本先生)ほか | 4 | | 山ノ内町教育委員会 |
| 7 | 2020/6/24 | ESD校内研修会(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小教職員 | 12 | | 山ノ内南小 |
| 8 | 2020/6/29 | 荘川中学校, 小学校(高山市)視察 | 水谷瑞希 | | | | |
| 9 | 2020/7/7 | ESD授業計画支援(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小学校教員2名(菅原先生, 林先生) | 2 | | |
| 10 | 2020/7/29 | ESD授業計画支援(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小学校教員2名(菅原先生, 林先生) | 2 | | |
| 11 | 2020/8/17 | ESD授業計画支援(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小学校教員1名(菅原先生) | | | |
| 12 | 2020/8/20 | 志賀高原体験学習打合せ(附属松本中学校) | 水谷瑞希 | 附属松本中教員2名, 志賀高原ガイド組合3名, 旅行代理店1名 | 6 | | 志賀高原観光協会(オンライン) |
| 13 | 2020/8/28 | 生活科ゲストティーチャー(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小学校児童14名, 教員2名 | 16 | | |
| 14 | 2020/9/1 | 校内学習会打合せ(中野西高等学校) | 水谷瑞希 | 教員1名 | 1 | | |
| 15 | 2020/9/3 | 出前講座「志賀高原ユネスコパーク人と自然の調和を目指して」 | 水谷瑞希 | 1,2年生100名 | 100 | 長野県中野西高等学校 | 長野県中野西高等学校 |
| 16 | 2020/9/9 | ESD授業計画支援(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 南小学校教員2名(菅原先生, 林先生) | 2 | | |
| 17 | 2020/9/26 | 「ユネスコスクール卒業生のこれまでとこれから」学習会 | 安達仁美 | 民間ユネスコ活動関係者・大学生 | 10 | 長野ユネスコ協会青年部 | オンライン開催 |
| 18 | 2020/10/3,4 | 第9回国際ユース環境会議 | 渡辺隆一 | 長野市内中高大学生 | | 国際ユース環境会議実行委員会 | 長野市青年錬成センター |
| 19 | 2020/10/12 | 志賀高原体験学習(附属松本中学校) | 水谷瑞希 | 附属松本中 | | 附属松本中 | 志賀高原 |
| 20 | 2020/10/14 | 打合せ(高社中学校) | 水谷瑞希 | 教員2名(教頭, 1年生担当) | 2 | | 中野市立高社中学校 |
| 21 | 2020/10/20 | 地域と学校の連携推進研修「持続可能な社会づくりに向けた教育の新しい在り方」 | 安達仁美 | 一般 | 90 | 長野県生涯学習推進センター | 長野県生涯学習推進センター |
| 22 | 2020/11/15 | ESDダイアログ:白山から発信! ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践を考える | 水谷瑞希 | 一般 | | 主催:中部地方ESD活動支援センター, 共催:信州ESDコンソーシアム | オンライン開催 |
| 23 | 2020/11/17 | 長野市教員研修「キャリア教育の現状とESD」 | 安達仁美 | 長野市教職員 | 34 | 長野市教育委員会 | 長野市教育センター |
| 24 | 2020/12/6 | ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会 | | | | | オンライン開催 |
| 25 | 2020/12/23 | ESD校内研修会(山ノ内西小学校) | 水谷瑞希 | 教職員 | 23 | 山ノ内町立西小学校 | 山ノ内町立西小学校 |
| 26 | 2020/12/24 | ESD校内研修会(山ノ内南小学校) | 水谷瑞希 | 教職員 | 18 | 山ノ内町立南小学校 | 山ノ内町立南小学校 |
| 27 | 2021/1/26 | ESD校内研修会(原村立原中学校) | 安達仁美 | 教職員 | 20 | 原村立原中学校 | オンライン開催 |
| 28 | 2021/2/6 | 成果発表 & 交流会 | 池端弘久 阿部 治 市瀬智紀 中澤静男 今井和愛 及川幸彦 安田昌則 | コンソーシアム構成団体、長野県内学校関係者(教員・児童・生徒・保護者)等 | 338 | 主催:信州ESDコンソーシアム 後援:信州大学教育学部、長野県教育委員会、ESD活動支援センター、長野県ユネスコ連絡協議会、長野県環境保全協会 | オンライン開催 |
| 29 | 2021/2/22 | 学校間交流(岐阜県高山市立荘川中学校, 福井県勝山市立北郷小学校, 長野県山ノ内町立西小学校) | 水谷瑞希 | 岐阜県高山市立荘川中学校(生徒), 福井県勝山市立北郷小学校(児童), 長野県山ノ内町立西小学校(教員のみ) | | 岐阜県高山市立荘川中学校, 福井県勝山市立北郷小学校 | オンライン開催 |
| 30 | 2021/2/28 | 学校支援プロジェクト会議研修会「学校支援の現場に役立つSDGsの基礎知識と利用法」 | 安達仁美 | 上田市社会教育関係者 | 22 | 上田市教育委員会 生涯学習・文化財課 | 上田市中央公民館 |
| 31 | 2021/03/26 | 学校支援 | 水谷瑞希 | 山ノ内東小学校, 西小学校 | | | |

II

通常総会

令和2年度 信州 ESD コンソーシアム通常総会

信州 ESD コンソーシアム通常総会 出席者

(令和2年 10月24日(土) 信州大学教育学部E504 オンライン開催)

敬称略、順不動

日 時 令和2年10月24日(土) 13時00分～

開催方法 オンライン (zoom)

次 第

1. 開会挨拶

信州 ESD コンソーシアム会長

信州大学教育学部学部長 宮崎 樹夫

2. 総会

(1) 議長選出

(2) 協議

・ 役員の選出について

・ 事業報告について

・ 事業計画について

・ その他

(3) 報告

・ 加盟団体活動紹介

・ その他

3. 意見交換

4. 閉会挨拶

| | |
|--------------------------|--------|
| 一般社団法人 長野県環境保全協会 | 宮島 和雄 |
| 公式社団法人 日本ユネスコ協会連盟 | 関口 広隆 |
| 公式財団法人 ユネスコ・アジア文化センター | 藤本 早恵子 |
| EPO 中部/中部地方 ESD 活動支援センター | 原 理史 |
| 信州大学教育学部附属幼稚園 | 小須田 佳奈 |
| 高山村立高山小学校 | 宮原 浩 |
| 山ノ内町立南小学校 | 菅原 勇介 |
| 山ノ内町立東小学校 | 牧野 みゆき |
| いづな学園 グリーン・ヒルズ小学校 | 尾形 望 |
| 飯田市立和田小学校 | 齊藤 圭子 |
| 長野市立信里小学校 | 立野 正之 |
| 山ノ内町立山ノ内中学校 | 本山 育人 |
| 信州大学教育学部附属松本中学校 | 宮下 哲 |
| 長野県中野西高等学校 | 小林 和成 |
| 文化学園長野中学・高等学校 | 長田 里恵 |
| 長野県 NPO センター | 小林 達矢 |
| 信州環境カレッジ運営事務局 | 中山 哲徳 |
| 直富商事 (株) | 宮沢 直志 |

信州大学

| | |
|----------|-------|
| 教育学部長 | 宮崎 樹夫 |
| コーディネーター | 西 一夫 |
| コーディネーター | 渡辺 隆一 |
| コーディネーター | 安達 仁美 |
| コーディネーター | 水谷 瑞希 |
| URA | 本間 喜子 |
| 事務長 | 若林 武 |
| ESD 事務局長 | 古澤 和孝 |
| ESD 事務局員 | 清水 英俊 |
| ESD 事務局員 | 高橋 美晴 |



令和2年度 信州ESDコンソーシアム
通常総会議事抄録

| 開催日時 | 令和2年10月24日(土) 13:00~14:00 | 開催場所 | 東校舎5F E504 及び zoom |
|---------------------|--|------|--------------------|
| 議題・報告・連絡事項等 | 審議・報告・連絡等の概要 | | |
| 【議題】 (1) 議長選出 | 宮崎会長により、議長が西委員に指名された。 | | |
| (2) 協議 | 以下、西議長の進行により協議された。 | | |
| ・議員の選出について | 西議長より、運営委員長として資料 P6 に基づいて説明があった。 ➤ 特に異議なし。原案通り承認された。 | | |
| ・事業報告について | 水谷委員より、成果報告書 2019 の P10・11 に基づき説明があった。 ● 加盟申請支援 8 校、加盟校支援 13 校、普及活動、様々な機関との橋渡しや学校間交流について報告。ESD 通信やエコパークを活用した ESD モデルの構築などについても報告を行った。 ● エコパークを活用した ESD モデルの詳細については共有資料を投影し、説明した。事業スキーム、具体的活動(学校支援、BR 間交流など)、環境学習プログラム、支援体制の拡充等について説明。 ➤ 特に異議なし。承認された。 | | |
| ・事業計画について | 水谷委員より資料に基づき説明があった。 ● 資料 P17 及び予算案 P16 に基づき全体事業計画について説明があった。 ➤ 特に異議なし。承認された。 | | |
| ・その他 | 特になし | | |
| (3) 報告 ・加盟団体活動紹介 | ● 日本ユネスコ協会 | | |

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・コロナの関係で開催が危ぶまれたものもあり。 ・企業からユネスコスクール支援の報告。UFJ より支援があり、予定通り実施。 ・東ティモールの教材作成支援。成果物は紹介する予定。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● ユネスコ・アジア文化センター ・ユネスコスクール事務局としての活動紹介。コロナ禍で例年通りの活動は難しくオンラインでの実施が多い。 ・1~2か月に1回、ユネスコスクール教員(今後高校生等も含み)オンラインで意見交換。山之内南小からも参加。他の学校も是非。次回11月24日。 ・全国大会・地方大会の事務局。12月6日(全国)11月2日(北海道)、28日(中国大会)、(大阪)。オンライン実施なので他地域からの参加も可能。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 中部地方 ESD 活動支援センター ・11月15日オンラインで、ユネスコエコパーク白山を中心としたイベントを実施予定。 ・全国の支援センターとネットワーク構築し、18の拠点と連携協力。長野県は3拠点(ESD コンソ、長野環境協会、森林組合)。 ・SDGs チェックリストを開発し、Web で公開中であり、その紹介。17ゴールとの活動の関連付けのためのチェックリストやWS用のパッケージツールもあり。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 長野県環境保全協会 ・コロナ禍で様々なイベントが中止となった。 ・信州エコ大賞を毎年実施。今年はNPOまめつと鬼無里を対象に選出。SDGs・企業も力を入れており、2企業を表彰。 ・気候変動も大きく啓発活動を実施。気候変動と生物多様性についてのパネル展を実施。200名を超える参加あり。町環境づくり条例も制定され、力を入れていく。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 長野県 NPO センター ・昨年度の成果報告会で高校生2名が参加し、発表した。ユースリーチでSDGsに結びつく活動を実施。オンラインでの活動を継続中。 ・7月24日ごみ拾いとゲーム要素を組み合わせた活動を行った。学校を借りて大きなイベントを高校生が考え、自発的に実施。 ・環境カレッジの講座にて気候変動を呼び掛ける動画をユースリーチで制作。 ・SDGs カードゲームのWS。9月以降オファー多数。密を避けながら実施中。地域のNPOを紹介し、ボランティア活動に繋がるよう実施。 |

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 長野ユネスコ協会青年部「つながる」 ・18~35歳のメンバーで活動中。現在はZoomを活用し、コミュニケーションをとるなど活動を継続し、りもつぷると命名。これまでに7回活動している。 ・長野県内ユネスコスクールを卒業した若者がどんな活動をしているかということテーマを実施。高校時代で実施してきたことと今にどう繋がっているかということも語ってもらった。多様なアクションを卒業生たちが起こしている。卒業後も学びを絶やさず大学や社会を巻き込んで活動中。卒業生に向けてどういったプラットフォームになるか模索中。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 信州環境カレッジ運営事務局 ・長野県事業から受託し、運営を担当している。地域講座、学校講座を実施。今年からWeb講座を設け、支援を継続。学校講座は35校に提供。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 信州大学教育学部附属幼稚園 ・トイレットペーパーの芯、お菓子の空き箱、牛乳パックを集め、工作・遊びに使える資料として提供。資源を大切に環境教育を実施。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 高山小学校 ・地域の環境を知ることが中心。PTA・村民館・学校の三位一体でわくわく交流会を実施。りんごの活動・ワインぶどうの活動を一緒に取り組む。地域の人は環境考慮した農薬を使っているなどの実際の現場を見たり、自分たちも使ってみたりで活動に取り組んでいる。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 山ノ内南小学校 ・4月と6月に教員研修を実施。12月も実施予定。 ・ESD・SDGsの理解が進み、ハードルが下がってきた。オンラインでの意見交換会もできるようになり、他ユネスコスクールとの交流も進んできた。 ・現在、6年生が修学旅行中であり、氷見で環境学習・日常の学習より繋がったものとなっている。 ・12月りんごの販売で、新聞エコバック子供から提案があり、作って販売をする予定。学校間の交流も実施。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● いづな学園グリーン・ヒルズ小学校 ・りんご栽培を継続して実施し、これから系列幼稚園と取組予定。 ・台風19号の被害を受け、同じ長野県での状況を見て復興 |

| |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 支援プロジェクトを実施し、りんごの売り上げを寄付。 ・昨年はコロナ禍で断念したが、今年は、学校再開後に20万ほど寄付ができそうなのでOne Nagano基金を通して寄付予定。成果報告会にて報告予定。大牟田との連携も実施。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 飯田市立和田小学校 ・お茶栽培を実施。わだっこ茶を摘み、販売活動を春に、地域・保育園の子も連と連携して実施。 ・職員のSDGs/ESDに関する意識については、まだハードルが高く、試行錯誤をしながら進んでいる。今自分たちがやっていることがSDGs/ESDに繋がっているということで、先生たちのハードルも下がりがつつある。 ・遠山地域3校連携。ESD推進会議を実施(3回実施済み) ・児童数昨年38名、今年28名。存続自体が危ぶまれる。継続を目指し、アピールをしている。わだっこ茶がその一つ。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 信里小学校 ・ユネスコスクール登録を目指している。全校児童31名。過疎化と高齢化が進んでいるが元気に活動中。 ・住みよいまちづくりのため、地域のみなさんと総合防災訓練を実施で、今年で7年目を迎える。コロナ禍で今年は合同で実施できなかったが、別々で実施。子供たちと地域のひとそれぞれ防災学習に取り組む。水資源の保全学習。トンボの生育と信里の水の美しさを実感。りんごの販売。身近な活動を積み上げながら、SDGsの種を子どもたちの心に蒔けていると感じる。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 山ノ内東小学校 ・機材トラブルのため報告なし。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 信州大学教育学部附属松本中学校 ・一つ一つの活動を丁寧に探究する。目新しいことをするという事ではなく、長いスパンで探究的な学習を行う。クラス替えもないため、クラスごとにテーマを決めて3年間探究する。 ・自分たちがどんなことを学んでいるのかということ意識しながら学習・活動を進める。SDGsを意識しながら子どもたちが自主的に進めている。学校園6校との交流を模索中。長野中との連携を進めている。子ども達がアイデアを出しながら推進。生徒会や合唱などをベースに企画している。 |
| <ul style="list-style-type: none"> ● 中野西高等学校 |

| | |
|----------------------------|---|
| <p>・その他</p> <p>3. 意見交換</p> | <p>機材トラブルのため報告なし。</p> <p>●文化学園長野中学・高等学校 中学3年カナダホームステイ・高校2年イギリス研修は、今年中止。中学では日本料理・郷土料理を学び、それをもってカナダへ行く予定であった。インバウンドに繋がればという目標を掲げていた。Zoomでカナダと交流を予定。イギリス研修は見通しが立っていない。</p> <p>・長野 SDGs プロジェクトに参加。オリジナルエコバックをつくり、販売、ユネスコスクール関係での寄付などの案が出た。コットンではプラスチック2万回の作業が必要で本当にエコなのかということも子どもたちが自分で調べてきた。新聞紙を使ったエコバックを作る。長野市9月12日ワールドフェスタにて出品をし、300個ほどが地域の人の手に渡った。活動報告会を学校でも実施予定。</p> <p>・高校生徒会「未来大人会議」の開催。コロナ禍で滞っている。信大学生と学校を使って近隣の小学生対象としてSDGsを普及しようという活動を企画中。11月に実施できる可能性あり。</p> <p>・教員の活動について。ホールスクールでの活動ができていない。ESDコーディネーターが就任したので、もう一度活動の練り直し等を図る。</p> <p>・特になし</p> <p>特になし</p> <p>総会終了</p> <p style="text-align: right;">以上</p> |
|----------------------------|---|

III

成果発表 & 交流会



令和2年度 SDGs達成の担い手育成(ESD)推進事業

信州ESDコンソーシアム 成果発表&交流会

ESD(Education of Sustainable Development)は、これから目指すべき持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。新しい学習指導要領全体の基盤となる理念として、またSDGs(持続可能な開発目標)達成の鍵として、注目が集まるESD。この成果発表&交流会では、各校でESDの学びを実践している子どもたちが、学びの成果を発表し、また交流を通じてその学びを深めます。今回は長野県内だけでなく、各地のユネスコエコパークでESDを実践している学校も、オンラインでつながります。

日時：2021年 **2月6日** ±
10:00~16:00
会場：オンライン開催

参加費 無料 / 事前申し込み必要:2月4日(木)締め切り



お申し込みは
特設HPから!

10:00~12:30 前半の部
「成果発表と講評」
12:30~13:30 休憩
13:30~16:00 後半の部
「成果発表と講評」

主催：信州ESDコンソーシアム

後援：信州大学教育学部 長野県教育委員会 ESD活動支援センター 中部地方ESD活動支援センター
長野県ユネスコ連絡協議会 一般社団法人 長野県環境保全協会 ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)
長野ユネスコ協会

お問い合わせ 信州大学教育学部 信州ESDコンソーシアム事務局(担当:高橋・清水)
〒380-8544 長野市西長野6-0 TEL:026-238-4034 E-mail:kyoesd@shinshu-u.ac.jp HP:http://esd-nagano.org/

山ノ内町立西小学校

山ノ内町立西小学校 2年生

ひつじの「ゆき」
といっしょに

ゆきがやってきた!



毎日のお世話



夜、何かが来ている!



ゆきが頭つきをした!!



ゆきの毛がり

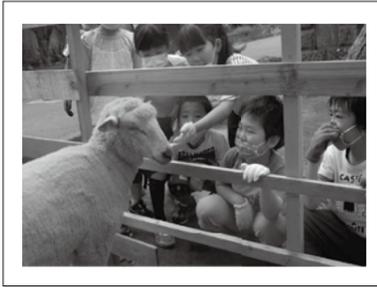


フェルトボール作り



ゆきのあそび場作り





学校へのコメント①

羊のゆきだけではなく、ほかの動物も含めた生態系まで子どもたちが学ぶ機会になっていて、山ノ内町ならではの体験を持った学びができていることが素晴らしいなと思いました。ゆきを通した子ども自身の思いと、ゆきのために行動することを通して、おもいやりなど心の成長もしているなと感じました。

学校へのコメント②

言葉のわからない羊のゆきちゃんの気持ちを精一杯、想像しゆきちゃんのために動きたいという強い気持ちを感じました。きっとゆきちゃんも嬉しかったと思います。ハクビシンなどを捕まえたあと、どうするのかの件については身近なゆきちゃんだけでなく、1つの命と自分たちの大切な日常をどう守っていくかにも思いを巡らせたのではないかと想像します。素敵なくらし、素晴らしい発表でした。ありがとうございました。

各学校へのコメント…信州大学教育学部

「持続可能な社会づくりと教育」受講生による感想です。

山ノ内町立東小学校



ビデオで故郷学習をテーマに、コカリナを練習して全校に発表、志賀の新聞をつくり広報など、町のすばらしさを知りできることを考えアートにしました。これからはふるさと学習に取り組んでいきます、と宣言しました。



学校へのコメント①

コカリナを今まで知る機会がなかったので私自身も勉強になりました。そして後半の方の発表で「ゴミを捨てないようする」という言葉がたくさんありました。これはあたり前のことのようにですが、山ノ内東小学校の皆さんは「どうして捨てないのか」というところが明確にできていたように思います。このことが自分たちの住むまちを守ることにつながるのだと実感できるのは本当に大事だと考えます。問題を自分ごとにしてできていると分かりました。聞く人が楽しめるようにクイズ形式で復習をするなど素敵な工夫でした。

学校へのコメント②

コカリナは動物ではないけれど、コカリナの気持ちを考えてその生まれた土地との関係を考える、その場で演奏するなどの経験することこそが伝統を知ることなのかなと感じました。子どもたちの首元にかかっているコカリナが本当に子どもたちが親しんだことの象徴だなとみていて思いました。楽しむ、知るだけで終わらず、自分にできることを考えられることでその地に親しんだことだと思います。それらがすべて感じられる発表でした。



ありがとうございました♪

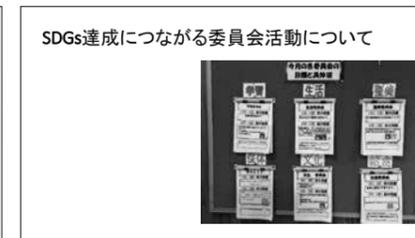
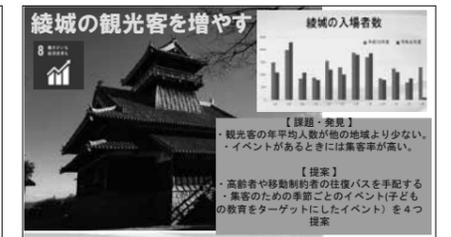
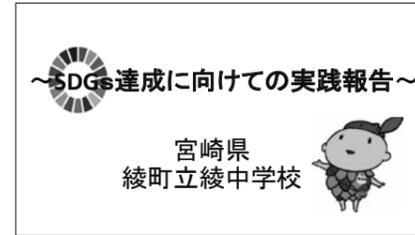
学校へのコメント①

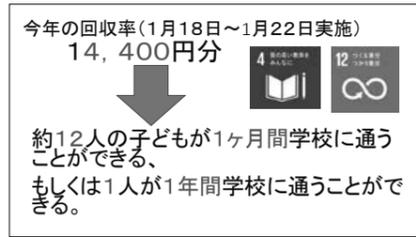
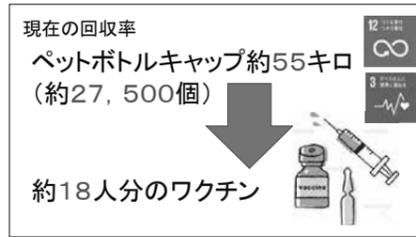
売り物になるものをつくりお金をもらうという経験ができることは良い経験だと思います。田んぼに苗を植えたら稲刈りまでそのまま放置するのではなく、その間の稲を観察しながらどれだけ成長するのか見られる時間があることが素敵だなと感じました。毎日の様子、成長した様子を見ることで、より稲に思いをかけ育てることのでき、良い経験になると思います。販売でいただいたお金を「人のためになにかできないか」考えること、自分たちが楽しむためだけでなくSDGsに関連して有効に使えないか考えること、素敵な考えだなと思います。

学校へのコメント②

まずは自分たちの身の回りから持続可能にしていきたいという考えのもと活動を行っていることが分かりました。自分たちで栽培や収穫、販売を行うことを通して、ものづくりに対する大変さやそれ以上の喜びを感じられるのではないかと思います。また、みんなで力を合わせてできたという経験や自分の力でやり遂げられた経験は必ず子どもたちの支えになるのではないかと思います。身近なことからやってみることを私も大切にしていきたいと感じました。

宮崎県綾町立綾中学校





学校へのコメント①

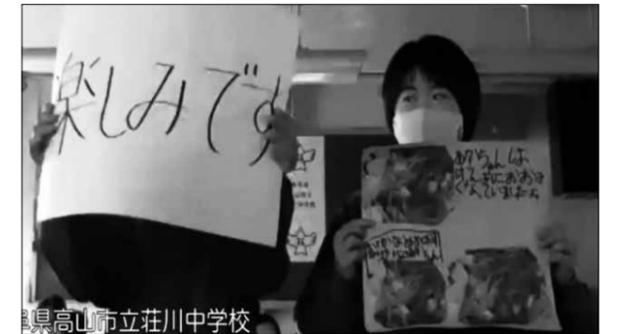
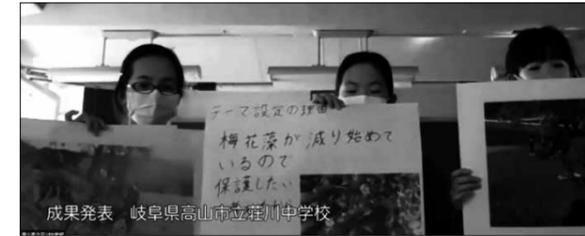
実際に自分たちでフィールドに出たの調査をすること、講義に参加することなど、活動そのものに自主性があり、そこから学んだことがなになるのかを考えているのもよかったです。今の自分達の学びややっていることがSDGsの何につながっているのかを考えていくことが大切なのだと私も実感しました。すべての項目をSDGsに当てはめ考えており、SDGsをととも身近なものに感じられたのではないかと思います。あと少しで綾町を出ていく皆さんが多い中、自分が育った大切なふるさとのか力になりたいという思いを感じました。

学校へのコメント②

JAXAとも連携してという、うらやましい経験をしていますね。そのような綾町ならではの資源(人、モノ)との連携によって、子どもたちの学びが宇宙にまで広がるということがわかり、大切なことだと思いました。また、教育活動を通してSDGsに幅広く取り組んでいることがわかりました。子どもたちが、毎年やっているからではなく、何のために活動をしているのか考えることでその質が大幅に変わるのだなということを感じました。

岐阜県高山市立荘川中学校

岐阜県高山市立庄川中学校1,2年22名「荘川を守っていく郷土教育」をテーマに、1年でバイカモ、2年うちわ作り、伝統の獅子舞などの学習し、一斉清掃などできることからSDGs、ESDを考え直しています。作文で入賞し地域の発展にもつながると知り他のユネスコスクールの活動も参考にしたい、と。



学校へのコメント①

荘川でしかできない、荘川ならではのことで、守っていき地域のことについて、まずは自分から始めることからはじめたいという気持ちがとてもよく伝わってきました。特に、梅花藻を保護したい、獅子舞を引き継いでいきたいという子どもたちの気持ちが基盤になってくるのだと思います。大きな世界ばかりではなく、まずは身近なことを、自分から少しずつという考えは私も大切にしていきたいことだと思います。荘川の魅力を今回教えてもらったので、もっと色々な人に知ってもらおう活動も行っていくと良いのではないかと感じました。

学校へのコメント②

地元のもので料理の開発を行い、レシピを広めることで、つくってみたいという思いになると思います。ふるさとドリーマーと呼ばれる方々がいらっしゃることで、地域と学校のつながりも深くなるように感じました。保護者の方も仕事を休んで町内一斉清掃を行うことが伝統となっていることで、今だけの活動ではなく、町にいればずっと大人になっても続いていくこととして取り組むことができ、未来へ向かって考えることができ素敵だと感じました。

午前部①（山ノ内西小～荘川中学校） 講評

【北陸ESD推進コンソーシアム コーディネーター 池端 弘久 先生】より

北陸ESDコンソーシアムの池端です。それでは時間も短いですが、一校一校簡単に、驚いたところ、感心したところをお話ししたいと思います。

まず、西小ですが、ゆきの心を想像しながら世話を始めて、だんだん専門家とつき合いながら、あるいはいろいろな人から学びながら、想像するだけの世話ではなく、本当の意味でヤギを理解しながら世話をしている様子が非常に良かったと思います。これからの学習がさらに発展する可能性を強く感じました。

東小は、演奏や新聞作り、オブジェを作ったりと、表現するということが出力しながら、自分を問い直している様子が見えましたし、最終的に自然を守るための行動につなげていこうということが非常によくわかる実践だったと思います。ぜひ、今後とも充実されることを祈っています。

それから上村小学校ですけれども、Webサイト作りがいかにか子どもたちの深い学び、広がっていく学びにつながっているかというのがよくわかりました。いろいろな人にインタビューしたり、自分で調べ直したり、そうしながら、伝統芸能の霜月祭りに関する情報を発信し深めていって、さらに来年はもっとこういうことを調べたいというところまでつながっていて、非常によかったと思っています。ぜひ次につなげていただければと思います。

それから和田小の方は、小規模校の良さというのが非常に出ていると思います。稲刈りの機械を運転できるなんていうことは滅多にありません。小規模校が大きくなっていくことが本当に次につながるのか、小規模校の良さが逆に見直される時期にきたのかなと思ったりもします。聞いていて、通常のお茶、あるいはお米の栽培の体験ではできない体験の量と質を感じました。誇っていい活動だと思います。さらにドネーションという寄付行為に関してしっかりと考えながら、寄付先を決定したりという場面についてももっと深く聞きたかったなと思いました。

それから綾中学校ですけれども、もう中学生になるとこまできらんだなと思いました。特に、中学生らしい、生徒会を使った自治的な活動というのを組織的にやっておられるところは見事でした。ムーブというスローガン、なかなか生きているなと感じましたし、一番すごいなと思ったのはJAXAと提携してCO2を調べ、森からのデータというものを非常に重要視していらっしゃるなと思いました。あと、職員に提案する際も、データに基づく提案をしていこうということで、やはり中学生ぐらいになると、こういったデータや情報を集めて分析して、それに基づいて考えていくということがしっかりできていて驚きました。今後も頑張ってもらいたいと思います。まさに我々の未来を計画する力が育っているのかなと思います。

それから荘川中学校ですけれども、今年はコロナということでどうしても学びが内向きになるということがあったのですが、逆に内側に向けて自分の足元からしっかりやっけていこうと、まずは自分たちの敷地に流れている小川に生える梅花藻について研究を始めていくというような形で、これを機に自分の身の回りであるところに視点を向けたというのはひとつ成功なんじゃないかなと思いました。来年度もコロナ禍は続きますので、こういった試みが示唆するものは大きいと思います。聞いておりましたら、これからをしっかりと足元から見つめていく学習の準備はできたように思いますから、さらにほかの中学校とも交流しながら、総合的な学習や、教科の中で勉強を進められるといいなと期待をしたところです。

ぜひこれらの学校の実践が、ほかの学校にもつながることを期待して講評にかえます。

【立教大学名誉教授・同ESD研究所員 阿部 治 先生】より

山ノ内町立西小学校、それから東小学校、飯田市立上村小学校、和田小学校、そして綾町立綾小学校、高山市立荘川中学校の皆さん、本当にありがとうございました。個別にお話ししようと思ったのですが、先ほど、講評していただいた池端先生とほぼ同じようことを思いましたので、全体的なお話をさせていただきたいと思います。

今回、ユネスコエコパークの地域の皆さんが発表してくださったのですが、エコパークは皆さんご存じのように、本当にその地域に素晴らしい豊かな自然があり、その自然を活かした暮らしがあるということのエコパークに認定されているところなんです。そういった中で、今回は西小学校の2年生をはじめ、荘川中学校、あるいは綾中学校という中学生まで、ほんとにその学年が児童から中学生の皆さんまでと多様です。始まりは、例えば西小学校では、地域の方から借りてきたひつじを使ってひつじと一緒に暮らし、そしてそこからさまざまな課題を見つけていながら、だんだん広がっていく。それが、ESDが持続可能な地域をつくる人、担い手、これを育てる教育活動だというふうに私は思っています。

私はこれを、ESDの地域創生力というふうに呼んでいますが、みなさんの活動はまさにそういうことで、それぞれの学校が地域、ふるさと、そこにおける人や自然や文化あるいは歴史、そういう地域にいっぱいある宝物、資源について、どんなものがあるんだろうかとそれを見出し、探究しながら、それらを「見える化」していく。そのためには、地域の様々な方々との協力が必要です。今までいろいろな活動をしてきましたが、それは地域の人と人をつなぐ活動になるのです。あるいは人と自然をつなぐ活動。で、そういうことに続いて、さらにそれらを「見える化」し、地域にあるそういった多様な資源同士をつないでいく。そうすることにより地域の魅力がどんどんどんどんアップしていきます。

そして皆さんがやってきた活動を地域の大人たちが知ることによって、大人たちも元気になります。

「あっ、そうなんだ、私たちが住んでる地域はこんなに魅力いっぱいなんだ」という、その魅力を皆さんが地域の外に発信していく。まずは地域の大人たちに発信し、さらにみなさんがやっておられるように、新聞とか、あるいはネットを通して外に発信していく。そういうことを通じながら、地域のローカルなことを、今度はグローバルの問題、世界へとつないでいき、そのことがSDGsの17目標ともつながっていく。そうして、地域の多様な課題を大きな視点でつなぎながら、その課題をどうやって解決していこうかという提案を、もう中学校の皆さんはやっておられました。課題を提案していただくだけではなくて、今度は地域の、例えば住民の方々や行政の方々と一緒にこの問題解決に参加して、人と人を、そして課題をつないで地域社会に参画していく。そんな活動をしていくと、まさに地方創生、持続可能な地域づくりにつながっていきます。

ぜひ皆さんの活動が大人の皆さんをも元気にし、大人の方々ともみなさんと共同で発展させてほしいなと思っています。ありがとうございました。素晴らしい学校です。

山ノ内町立南小学校

山ノ内町立南小学校
 6年生12名
 男子6名
 女子6名



学校へのコメント①
 小学校4年生の社会でゴミの処理と利用で、マイクロプラスチックを扱いました。海の問題だから長野県にいる自分たちは関係ないのではないよ、と子どもたちに伝えましたがそれが自分事になることは難しいなと感じました。南小学校の子どもたちの様子を見て、自分たちも関係があることを子どもたちが認識するために、ただ情報として知るだけではなく活動することが意味をもつことがわかりました。ただ社会見学で工場に行ったりするのではなく、富山までマイクロプラスチック問題を勉強する一環でいったという意図を持った活動は大事だと学ばせていただきました。

学校へのコメント②
 地獄谷、りんご、共同浴場と非常に良い地域資産がありますね。海なし県でありながら「14海の豊かさを守ろう」の活動をしていること、とてもいいですね。SDGsの活動と絡めて、14番の目標を意識して富山に修学旅行に行っているのも面白いなと感じました。SDGsを学校行事にも絡めていきながら、常に意識するものになっていますね。また、校内のあらゆる場所にSDGsのシールを貼るという活動、すごく簡単にできて、とてもいいアイデアだと思いました。町長や町議委員との意見交流は良い機会ですね。それは大人にとってもそうだと思います。



高山村立高山小学校

高山小学校5年生
「米づくりと交流活動」

米づくり


米づくり
代かき 5月15日(金)


わくわく村を調べよう
調べたいことがあまり出てこない…
トトロさんに聞いてみよう!

トトロさんに聞いてみよう
黒岩 清道さん (トトロさん)
・幼少わくわく村校長 (2019年度 前年度)
・事務局長 (わくわく村のコーディネーター)として、わくわく村を支え続けてくださっています。

トトロさんに聞いてみよう


米づくり
田植え 5月21日


米づくり
田植え 5月22日


米づくり


キッズわくわく村の計画を立てよう


キッズわくわく村の準備をしよう


キッズわくわく村の準備をしよう


米づくり
稲刈り 9月15日


交流活動
重点目標
かがやきつながる高山のわ
「つながる交流活動」

2年生との交流 (1回目)
1回目の交流で学んだこと
1 2年生にあった出し物を考える
2 指示が通るように、マイクを使う
3 説明をきちんとできるようにする

キッズわくわく村の準備をしよう


キッズわくわく村のおたよりを出そう


開村! キッズわくわく村


2年生との交流 (2回目)
2回目の交流で学んだこと
1 合わせた出し物をする事で、2年生は楽しんでくれるが、難しすぎると楽しめない
2 マイクを使うことで指示が通り、時間管理もできた

2学期の交流活動を決めよう
誰と交流をしよう?
わくわく村の講座が少なくなってさみしい
「キッズわくわく村」をやってみようか! ?
「わくわく村」を調べてみよう

わくわく村
地域・公民館・保護者・学校をつなぎ、子どもが地域でより豊かに学び合う場
わくわく村 開村式 (テレビ放送)

開村! キッズわくわく村


キッズわくわく村をふり返ろう
キッズわくわく村から学んだこと
1 みんなが楽しめるようにする
2 計画・準備が大切
3 人数・時間・会場
4 けがや事故のないよう安全面にも気を付ける。
5 時間内におさめる (時間管理)
6 協力
7 感想 気持ちに分かる→改善点→次に生かす
8 やり方や説明をていねいに
9 文句にも対応 → 笑顔になる

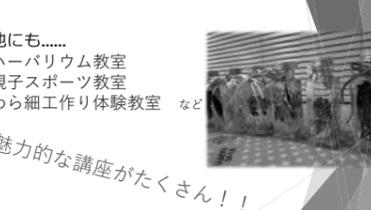
高山小学校5年生
「米づくりと交流活動」

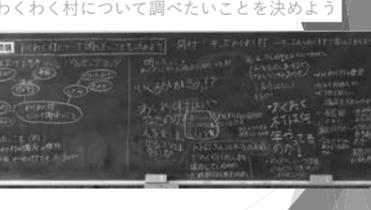
わくわく村
公民館や文化協会の講座とPTA主催の講座を一体化し、それらの中から自分がやってみたい講座を選びます。



親子木工教室


わくわく村
太極拳

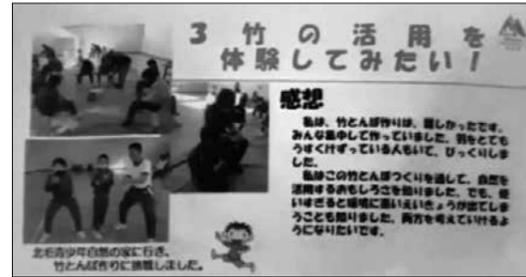
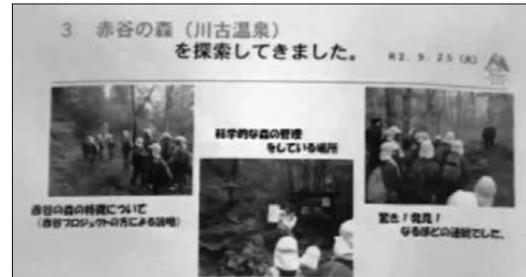
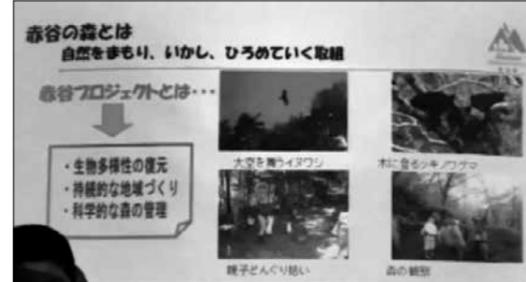
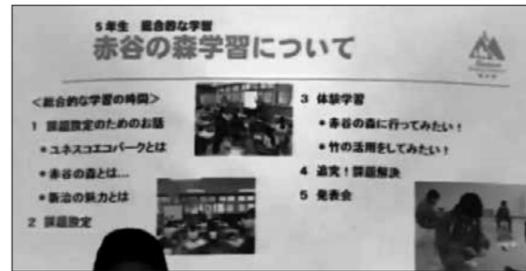
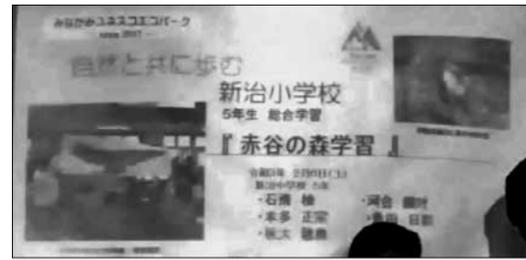

他にも.....
ハーバリウム教室
親子スポーツ教室
わら細作り体験教室 など
魅力的な講座がたくさん!!


わくわく村について調べたいことを決めよう


学校へのコメント①
自分たちで育てた稲がこんなに大きくなるんだということを感じた、という言葉が印象に残っています。お米は小さい頃から近くにあったものだと思いますが、自分たちで育ててみるとそのお米にはとても愛着が湧くし、こんなに大変だったのだと気がつけたのだと思います。学びを自分たちだけのものにとどめず、交流活動として2年生とどうするかを考えていく活動をしているのも素敵だと思いました。誰かが楽しめるように考えることでさらに自分たちの学びにも還元されることが多いです。みんなに楽しんでもらうためには自分たちも楽しむことという言葉が本当にその通りだと感じました。

学校へのコメント②
わくわく村が少なくなったら自分たちで考えてやってみる、ネットや文献で調べてわからなければ地域の人に聞きに行ってみる、そのような考えがとても素敵だなと感じました。コロナ禍でできないこともある中、できることを探す、自分たちでつくり出していくことは未来を切り拓く力になると思います。自分たちがやりたいことと同時に、来てくれる人に楽しんでもらいたいという思い、まずは自分たちが楽しみにやること、とても大切です。私も参加してみたい思いになりました。

群馬県みなかみ町立新治小学校



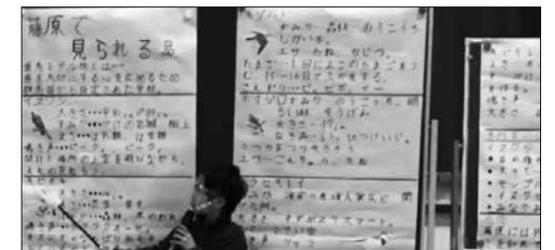
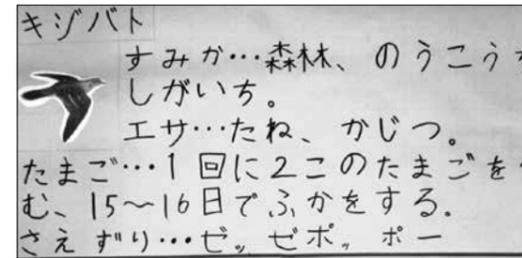
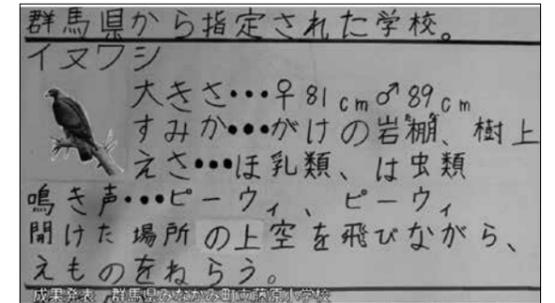
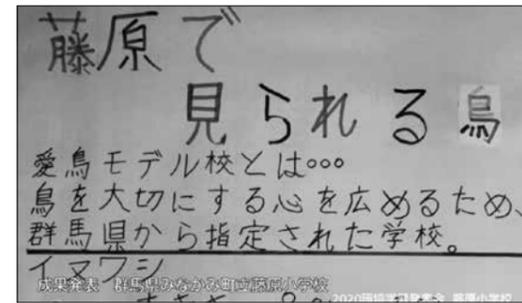
学校へのコメント①

竹細工名人のきみおさんを「きみちゃん」と紹介する姿から、きみおさんとの関係がとてもいいものであることが伝わってくるような気がしました。一生懸命に学ぼうとする皆さんの姿や取り組みは、きみおさんをはじめ地域の方にとってもきっと嬉しいものであり、素敵な地域連携のあり方だと思いました。イヌワシを見てこんな動物がいるこの地域に住んでいることに感謝という言葉からは、改めて地域の自然と向き合う中で、地域の今まで知らなかった良さにも気づいていく、そして地域を大切にしていく心につながるのだと思いました。地域への感謝の気持ちを持ち、資源や動物を守ろうと思えたのはなによりも大きなことだと思います。

学校へのコメント②

自分たちが学ぶ学校の裏手にある山を学びの場として、地域や自然を知るきっかけになっている総合学習が素晴らしいですね。またエコパークとしての立地を活かして地域を知る学習になっている点が素晴らしいですね。自分たちで積極的に考えて活動している内容を、継続的に交流を進めて共有しましょう。

群馬県みなかみ町立藤原小学校



学校へのコメント①

愛鳥モデル校という学校があるのを初めて知りました。愛鳥モデル校に指定されているから鳥のことを学習するのか？子どもたちの鳥への関心は高いのか？など考えていたのですが、皆さんが発表をする様子から鳥のことが好きで、それを発信したいという気持ちがとても伝わってきました。知識の量、イラストの内容からも自分たちの知りたい、伝えたいという思いが十分に伝わってきました。鳥という1つ、誇れるシンボルがあるのはとても素敵なことだと実感しました。

学校へのコメント②

地域の自然からたくさんの学びがあることがわかりました。これまで「鳥」としてしか見ていなかったものが「イヌワシ」「ホオジロ」などと呼べるのが確かな学びになりますね。鳴き声も紹介している点に工夫があって素晴らしいですね。

飯田市立遠山中学校



代議員会

◆ボランティア活動 1月実施、520枚

1 児童会
4 読書の森
17 パートナシップ

◆級長会…自分たちの学校をより良く！
討論会を実施！



厚生委員会

◆校内の健康面、給食面
・コロナ対策をしっかりと！！

◆食文化の紹介…郷土料理を大切に。

◆マラソン復活…体を鍛える！

生活委員会

◆あいさつ運動
・まちづくり委員の皆さんに協力を依頼する予定。

◆花を贈る活動…地域を花でいっぱい！

15 花を贈る活動
11 花を贈る活動

大切なことは…

★目的をはっきりと
★全校の意思統一をして
★地域と協力しながら
★遠山の良さを活かして
★自分たちも楽しんで活動をする



情報委員会

◆遠山Good News
・地域の出来事をお昼の放送で広める。

◆本の読み聞かせ…図書分館とつながって。

◆遠山ベストセラー

本部

◆遠山を守ろうプロジェクト
・地域のごみ拾い・施設の清掃・学習講座(公民館と連携)

◆発信・連携…生徒会だより
生徒集会

学校へのコメント①

生徒会活動として取り組んでいるところが興味深いと思いました。発表の最初で悪者が出てきた時は思わず笑ってしまいました。生徒会ということですので、一人ひとりの意識も高く、地域の方と関わるのも密になっているのでしょうか？一つひとつの委員会で、どの項目を達成しようかが明確に決まっておき、そこもとてもいいなと、思いました。チームとなって、一丸となって何かに取り組めること、それがこれからの自分の生活につながる事が素晴らしいと思いました。生徒会ということなので、自分たちの学びを生徒会の外へ広げるところまでできるのが、また他にはない良さだと感じました。発信は大変だと思いますが、とても大きな財産にもなると思います。

学校へのコメント②

遠山レンジャーから始まる発表がとても素敵でした。生徒会活動を中心に、それぞれの委員会で持続可能な遠山中にするための活動が考えられていて、自分たちの地域の現状に向き合って解決していきたい気持ちが伝わってきました。地域とのつながりの活動に加えて、地域のよさを外へ伝える活動も行えるより良いのではないかと思います。



令和3年度生徒会活動の目標

「持続可能な遠山中」「持続可能な遠山郷」を目指して！

- ①新しい生徒会
- ②世界とつながる生徒会…SDGs
- ③地域とつながる生徒会
- ④楽しめる生徒会

自分たちの学校、自分たちの地域の「良さ」と「課題」について考えました。

来年度、さらにより良い遠山中学校にしていくためにはどうするか。

山ノ内町立山ノ内中学校

ロマン美術館
地獄谷野猿公園

山ノ内中学校 1学年 小林 樹
宮崎 千穂

ロマン美術館

- ・場所 山ノ内 上林
- ・年間来場者 約2万人
- ・オープン日 平成9年
- ・建築設計 黒川紀章氏

ロマン美術館 建築設計 黒川紀章氏



<https://yahoo.jp/3fcoe> <https://yahoo.jp/y3kncv>

ロマン美術館に行った感想

- ▶ 建物がかなり大きくて、驚いた。
- ▶ 建物の形が全体的に楕円形で、面白かった。
- ▶ 期間限定の展覧会も開催されており、1つ1つの絵を見るのが楽しかったです。
- ▶ 期間によって開催されている、展覧会の種類が違うので、また行ってみたいです。

地獄谷野猿公園

- ▶ 開苑日は1964年
- ▶ 野生のニホンザルの生態を間近で観察できる
- ▶ 公園の手前に源泉がある

～始まり～

子ザルが露天風呂に入浴
↓
大人のサルが真似をした

- ・今ではサル用の露天風呂がある
- ・50頭～60頭ほどのサルが12月～3月の間に入浴している

snow monkey



<https://yahoo.jp/1111>

野猿公園のルール

- ▶ 餌付けはしない
- ▶ サルは触らない
- ▶ サルからなるべく離れて観察する
- ▶ サルの目を見つめない
- ▶ サルになれなれしくしない
- ▶ サルに話しかけない
- ▶ 自撮り棒を使わない

地獄谷野猿公園に行った感想

- ・ルールなどがたくさんあってとてもサルを大切にしていることが分かった。



<https://yahoo.jp/2222>

ご清聴ありがとうございました。



<https://yahoo.jp/pTdBf> <https://yahoo.jp/5heQTJ>

道の駅と千歳桜

山ノ内中学校 1学年
野口 美聡・児玉 紗唯

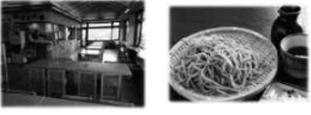
1 道の駅について



施設がたくさん！



食堂



農産物直売所



オリジナル商品



2 千歳桜(エドヒガンザクラ)



見頃は4月下旬 きのご汁のサービスも



3 学んだこと

- ・私たちが住んでいる町は素晴らしい！
- ・観光客に人気！
- ・誰でも楽しめる！
- ・町の小中学生が進んで町を良くしようとしている！

ご清聴ありがとうございました。



R2 地域自慢の旅
平和観音&金具屋
～1年2組～



金具屋は独特！？

右 現代的なホテル
左 金具屋



金具屋の構造は「千と千尋」の旅館に似てる！？



東洋一大きい観音像！



ご清聴ありがとうございました。



佐野遺跡



佐野遺跡とは？

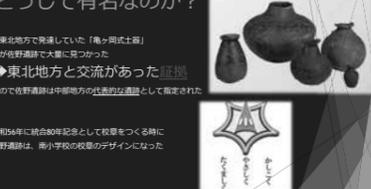
2500年前の「集落の跡」
そこで多くの土器や石器が出ました
その土器は「佐野式土器」と呼ばれる
中部地方の縄文時代の基準となった



どうして有名なのか？

東北地方で発達していた「亀ヶ岡式土器」が佐野遺跡で大集りに見つけた
→東北地方と交流があった証拠
なので佐野遺跡は中部地方の縄文時代の基準として認定された

昭和56年に統合80年記念として教室をつくる時に佐野遺跡は、南小学校の校章のデザインになった



須賀川地区の民話



須賀川とは？

山ノ内町須賀川地区は北志賀温泉として知られる。また、スキーリゾートでもあり多くの観光客が訪れます。





学校へのコメント①

小学校でSDGsの学習をしてきている子どもたちが集まって一つの中学校に通っているのでしょうか？中学生になって新しく観光をプロデュースするような力も身についたように感じました。私自身が長野県内に住んでいて、金具屋などおすすめの観光地だと他県の人に伝える割に、実は知らないことが多かったなと思います。この中学生が作った志賀高原パンフレットを作ったらもっと多くの人に魅力が伝わるのではないかなと感じました。

学校へのコメント②

山ノ内町の名所について様々なものがあるのだと改めて知りました。自分たちの町のよさについて知り、それを伝えていきたいと思う気持ちがこれからの原動力になるのではないかと思います。まだ1年生なので、発表の最後にもありましたが、これから年数を重ねていく中でより活動が深いものになっていくのではないかと思います。これからの活動がとても楽しみです。

午前の部②（山ノ内南小～山ノ内中） 講評

【宮城教育大学教員キャリア研究機構 教授 市瀬 智紀 先生】より

今日は6つの学校の生徒の皆さん、ほんとに上手に発表できたなと思います。特に緊張もしないで自信を持って発表した様子が印象的でした。では一つずつ感想をお話させていただきます。

山ノ内南小学校の皆さんのスノーモンキーについて。海外に行くといつも「スノーモンキー見に行っちゃよ」とか「これから行くよ」とか、本当に有名だなと思います。特にその中で、ゴミは川から出ているということで山中、内陸であっても海とのつながりを考えて勉強されたということが本当に素晴らしいと思ったし、いろいろなところにSDGsのシールを貼るという工夫には感動して、真似したいなというふうに思いました。いろいろ山ノ内町の中のゴミを調べられて、例えばプラゴミが0.4キログラムとか調べてくださったのですが、例えばもしこの活動を来年もやるのであれば、ゴミがどこに溜まりやすいのかとか、プラゴミの中でもどんなものが捨てられているのかとか、あるいは町の人口がどれくらいだとどれくらいゴミが出るのかとか、そんなことを調べていったりするとより具体的になって議会の大人の人にも説明しやすいのかなというふうに思いました。また今後の活動の発展をお祈りしています。

高山小学校さんは、お米作りについて発表してくださったのですが、1年間収穫のサイクルを経験して下さってほんとによかったかなと思います。それからわくわく村の活動ですね、地域と公民館と保護者と学校、これをつなぐような活動を一生懸命調べられて自分で運営されたということで、自信がつくのではないのでしょうか。ぜひ高学年になっても中学校になってもキッズわくわく村の経験を通じて、地域と関わっていくような大人になっていってくれるとありがたいなというふうに思いました。

新治小学校の6年生さん、新治小学校に一度電話させていただいたことがあります。やっぱりおもしろいですね。イヌワシとかなかなか見られないのによく見られましたね。あとクマタカとか。そして「いいなあ」と思ったのは、食物連鎖に注目して下さって、動物自体がひとつの食物連鎖で関連づいているということや、それが植物や人間とも関わっているということで全体のつながりを勉強できたということが皆さんの発表の中でよくわかりました。最後に生徒さんの代表の方が「両立させることが難しい」というふうに観光の話もちょっとだけしてくださいましたけれど、人間の暮らしと環境とどうやってバランスをとっていったらいいか、その辺について考えを深めていってくれると深い活動になっていくかなと思いました。

それから藤原小学校の2年生、3年生、4年生さん。みなかみ町の藤原小学校さん、今年は雪の被害が報道されていましたが、ほんとに雪がたくさん降るところなので、相当大変だったんじゃないでしょうか。標高も高いところにありますからね。2年生、3年生、4年生の活動で、すごく詳しく鳥の生態について調べてくださったんですね。とてもいい勉強をしてくれたと思います。私が興味を持ったのは録音なんですけど、自分たちで録音したのでしょうか、これはひとつ大きな工夫だったかなと思います。新治小学校の6年生さんが、鳥も含めて食べたり食べられたりする関係について調べたので、ぜひ新治小学校高学年の生徒さんにそういう鳥さんたちがお互いにどういう関係にあるのかとか聞いてみるとおもしろいかなと思いました。

それから飯田市遠山中学校さん、私は市瀬という姓なんですけど、実は近くの長野県下伊那郡喬木村の出身です。生徒会にSDGsの活動を取り入れるということで非常に楽しみです。宮崎県の綾中学校さんがかなり進んだ取り組みをしているので、生徒会がSDGsをやるといのがひとつのブームになるかなというふうに思いました。ゴミ拾いを中心に一生懸命自分たちで活動されているということですので、ぜひ地域の人にも発信して、「こんなゴミがでてますよ」「こんなゴミが、こういう種類のゴミがありますよ」とか、地域の人と一緒にやってくれるといいかなと思いました。

あとは遠山中学校さんも、地域の魅力というところとシラビソ高原とか日本のチロルとか有名な場所がいっぱいありますので、そういうところをぜひ、スノーモンキーみたいに世界に発信していただくとおもしろいかなというふうに思いました。

そして最後は山ノ内中学校さんですね。私は「どうしてスノーモンキーが海外で有名になったのか」というこ

とにすごく興味を持っていて、どうしたらあるものをこのように有名にしていけるのかというプロセスを、私自身がすごく知りたいなというふうに思いました。また、道の駅とか、ロマン美術館、平和観音、佐野遺跡、全部行ってみたいなと思いました。最後におっしゃっていたのですが、課題解決の提案をしてみたいということだったので、今回は皆さんさまざまな地域の特色について調べてくれましたので、今度は、人々はどんな苦勞をしているのか、地域を盛り上げていくにはどうしたらいいのかなど、ぜひ課題解決の提案に向かっていていただけるとありがたいと思います。少し長くなりましたが、これで終わりにしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

【奈良教育大学次世代教員養成センター 准教授 中澤 静男 先生】より

今、6つの小中学校の発表を見させていただきました。大きく分けて、二種類の発表があったと思うんですね。一つ目は地域の魅力を発見するという活動。二つ目が地域の課題解決に取り組むという活動でした。

まず地域の魅力を発見するという活動につきましては、地域の自然環境の良さというのかな、そういうのを見つけていくというのが、藤原小学校と新治小学校の取り組みだったと思うんですね。藤原小学校のほうは愛鳥モデル校になっていたのですかね。様々な鳥のことを教えていただき、奈良にはこういう鳥はほとんどいないのですごく感心して聞いていました。また新治小学校さんでは、イヌワシですか、すごいですね。そんなに怖くないのかなと思いつつ聞いていたのですが、最後に感想としてこういうことを言われました。「今まで、鳥について考えたり調べたりしたことがなかった。でもこの勉強を通して、鳥について詳しく勉強することができました」と。これは、我々もそうなんだけれども、そこで生まれて住んで育っていくと、身の回りの環境、特に自然環境なんかは当たり前すぎて、空気みたいな存在になっちゃってる。でもそれを先生方が授業として取り上げられたことによって、改めて気がつくことができた。それはすごく大事なことだと思います。

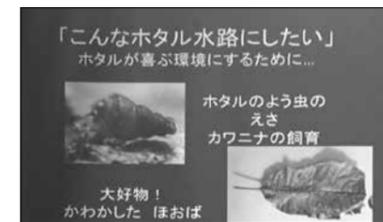
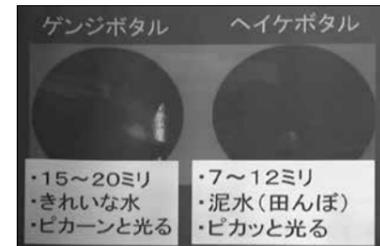
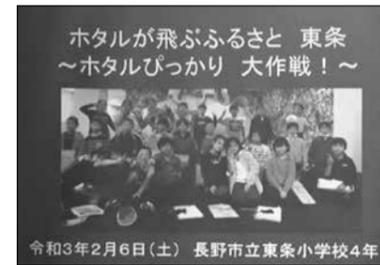
地域の魅力のもうひとつ、歴史文化について取り組んだのは山ノ内中学校だと思うんですね。奈良も歴史文化遺産はたくさんありますから、山ノ内中学校さんの縄文文化の遺跡とか、あるいは民話とかそういうものを調べていくというのもすごくいいことだと思うんですね。そういうのは人の生活の積み重ねみたいなものです。自分たちの生活と過去の人たちの生活があって、今自分たちの生活が成り立っているのだという、そういう過去に生きた先人に対する感謝の気持ち、そしてこれからの自分たちのやっていくことに対して、自分事だという意識を育てることにことになったのではないかなと思いました。

二つ目の地域の課題解決についてですけれども、これはまず山ノ内南小学校さんは、海のプラスチックゴミが自分たちと関係ないというのではなくて、まさに自分たちの生活スタイルが、海洋プラスチックゴミの問題につながっているんだということに気がつきました。特に生徒さんの感想の中に、「環境について気づくようになりました」という話がありました。やっぱり継続的にゴミ拾いなどをされたので、環境に対するアンテナというか、そういうものが育ったのだと思いますね。すごく、大事なことだと思います。

それから高山小学校さんはキッズわくわく村という取り組みをされました。みんなが楽しめるようにということと人と人のつながりを作っていく。その中で地域が活性化されていくところに意味があったんじゃないかなと思います。遠山中学校さんは生徒会がすごいですね。特に遠山レンジャーとか、遠山魂とか、そういうものがとてもおもしろいなと思いました。地域の人口減少という、あるいは持続可能な遠山郷というのをどうするのかということについて中学生がそれぞれに考えたことに取り組んでいるところがよかったなと思いました。そしてこの遠山中学校さんについては、すごくこれが光ったなというところがひとつありました。それは何かというと、自分たちも楽しんで活動するって書いていたんです。やっぱり、楽しまないと続かないのです。継続するということの中心には、やっぱり、やっておもしろいとか、やって為になるとか、そういう、自分たちがそのことに夢中になれるということがすごく大事だと思います。これからも遠山レンジャーさんに特に頑張って欲しいなと思います。

私からは以上です。ありがとうございました。

長野市立東条小学校



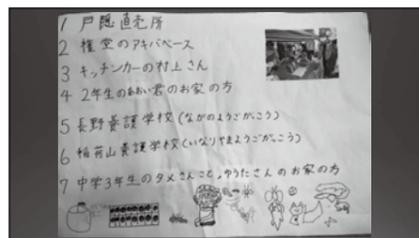
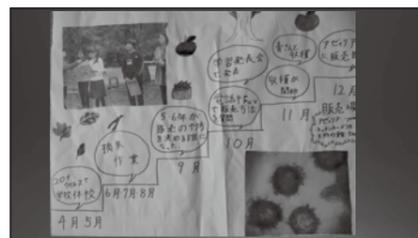
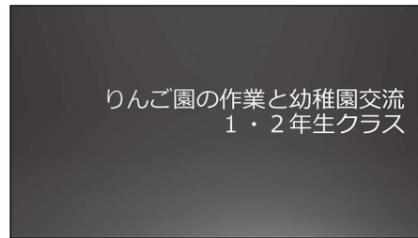
学校へのコメント①

蛍を中心に学習を進めるということ、それは蛍の住む環境を整えることにつながります。水路を整えていたように、蛍を考えることは、蛍の背景にあるものにまで思いを巡らすことにもなります。そしてその環境を守るために、SDGsが欠かせず、それは自分の身の回りの行動につながっていくのではないかと考えました。1つの題材をとことん考えていくのに、それがどんどん広がっていく学習はとても面白いなと思います。蛍がいる自然豊かな土地で今を過ごしていることは、かけがえのないことだと思います。

学校へのコメント②

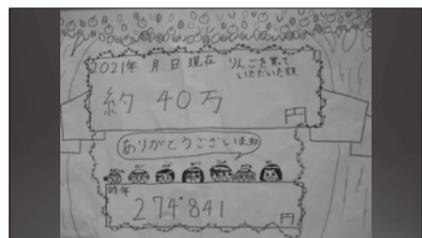
学校の中庭にホタルを飛ばしたいという思いを中心に、どうしたらいいのかを調べながら活動して良いなと思いました。また、○○のために□□するというように、理由に基づいた活動を行うことで、その活動の意味を考えながら行うことができるのではないかなと思いました。結果として8匹のホタルが飛んだということは、子どもたちの成功体験にもなると思うので、その経験を基にさらなる活動へ広げてほしいなと思いました。

いづな学園グリーン・ヒルズ小学校

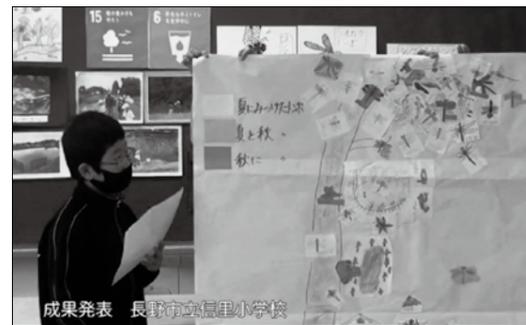
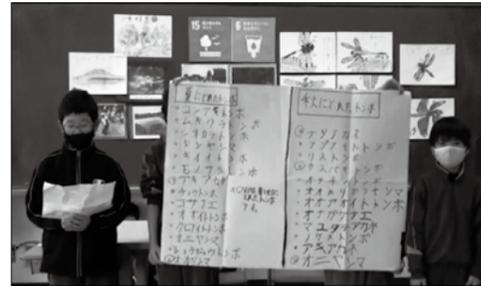


学校へのコメント①
 今年はコロナによってやりたいことができない状況が続いた中で、それでもできることを探し、そして頼んだりすることを通してりんごを販売したという取り組み、被災した人のためにできることを考えて行動したこと、すべて素晴らしいと思いました。寄付をすることの意味を知ること、ただお金を寄付するだけではなく、今後のボランティアへの参加意欲にも関わってくるのではないのでしょうか。

学校へのコメント②
 りんご園プロジェクトを通して、栽培や販売にそれぞれの子もたちが関わることで学校全体がひとつになったのではないかと思います。たくさんの方が力を貸してくれることを実感し、困っている人たちに何かできないかという思いへ繋げていくことは、ただ、してもらったから返すというだけでなく、次に繋げる循環の形と関わるのではないかと感じました。復興支援プロジェクトのところで、「関心を持ち続けることが大事」という言葉がありましたが、他人事ではなく、自分事にした、心を寄せて自分のできることを考えていくということが大切なことだと改めて思いました。



長野市立信里小学校



学校へのコメント①

ヤゴとの関わりが子どもたちの生活に密接に関わっていたのではないかと感じました。ヤゴが過ごしやすい環境をつくってあげるために普段どんな場所に生息しているのかということ調べたことや、どうすればヤゴが死ななかったのかと考え改善する姿が、自分たちの過ごしやすい環境を作るなど、これからの子どもたちの実生活の中に現れてくると素敵だなと思います。トンボのイラストもひとつひとつ丁寧で、はっきり違いが分かりすぎいなと思いました。

学校へのコメント②

とんぼを中心に学びを深めていく姿がとてもよかったです。発表の中でトンボの絵がたくさん出てきました。写真はボタンを押せば撮れますが、絵を描くのはその対象が好きでよく観察していて、思い入れがないとできないことではないと考えています。そして、トンボについてのマップを作り、自分が見てきたものを自分で地図に表す活動はとても素敵であると思いました。図鑑にもトンボは載っていますが、一般的なトンボではなく、私にとってのトンボができたのだと思います。またこれからの学びもとても楽しみです。

茅野市立永明小学校



学校へのコメント①

落ちていた木の枝を使って杖にしたという経験から、自分だけの杖を作るという新しい取り組みだなと思いました。しかし、落ちていた木をそのまま使うのではなく、自分にとって使いやすく安全にこだわりの機能を考えるを通して、自己理解にもつながっているのかなと思いました。これから机等に杖の技術が生かされていくことはとても楽しみです。

学校へのコメント②

木の枝から杖をとという実践の発想がとてもおもしろいなと思いました。私が今実習で入っている小学校でもりんごの切り落とした木の枝を集め、それで焚き火をしています。同じ材料でも広げ方は様々あるのだなあということを実感しています。そうしてSDGsの視点が入ると、誰かのことをおもって杖から杖をつくるということが始まり、とても素敵だなと思いました。相手意識があるのがいいなと感じています。

信州大学教育学部附属松本中学校

文化学園長野中学・高等学校

令和2年度 信州大学教育学部附属松本中学校 2021.2.6

信州ESDコンソーシアム



信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

本日の発表 2021.2.6

- 1 本校の歩み
- 2 1年D組の軌跡

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

1 本校の歩み 2021.2.6

平成23年6月21日認定

ユネスコ URBEDU

梅の収穫や地球市民集会、コレクトR 松本城清掃などを今も活動している。

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

2 1年D組の軌跡 2021.2.6



信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

2 1年D組の軌跡 2021.2.6

4 グループ：自然 歴史 食 文化

井戸26個、平成の名産、人物、国宝、縄文、テーマ：パンとスイカ

冷たさ、ぬるかさ、味、人物、上杉謙信と松、3つのパン屋さんのパンの作り方の違いがあるのは？ 国宝（旧開智学校）Eou、お母さんの味

井戸の構造や材質 → 純手通り、西社神社 SWEET、焼きたて、揚げたて

松本市民の生活の水、井戸までの地形 → 水の軟らかさ？、松本ぼんぼん、松本でまり

命水、人間性、愛情、松本ぼんぼん、歴史や経緯、参加、松本でまり、歴史、制作

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

2. 1年D組の軌跡 2021.2.6

自然グループ「水」を中心とした環境学習、歴史グループ「松本の文化財」を中心とした学習、文化グループ「伝統的文化」を中心とした学習

ESDの基本的な考え方

環境、経済、社会の統合的な発展

食グループ「食べ物での松本の名産品」を中心とした学習

僕たちが未来の担い手として、精一杯学び、今を生きる

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

2. 1年D組の軌跡 2021.2.6

1D...文化グループの「松本ぼんぼん」が最終目標につながる？

文化グループの松本ぼんぼん

自然グループ、歴史グループ、食グループ

それぞれのグループで最終的に松本ぼんぼんをPRの基盤として1Dの総合学習を進めていく。

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

2. 1年D組の軌跡 2021.2.6

たくましく心ゆたかを地球市民



信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

学校へのコメント①

私の地元も松本なので、挙げられたPRポイントについてはとてもうんうんと頷きながら聞かせていただきました。自然、歴史、食、文化のそれぞれについて考察したりインタビューしたりと、深く松本のことについて考え知る機会になったのではないかと思います。未来の担い手として今を生きることが大事という言葉もありましたが、次世代の子どもたちが地域について考えることはとても重要なことだと思います。これからの活動を通して更に広がってほしいと思いました。

学校へのコメント②

「松本をPRしたい。」という活動の目標がはっきりしているのがいいと思います。井戸のグループのように、実際に外に出て体感するのは大事だなと感じます。1年だけの活動に終わらず、次の学年につなげていっている活動になっているところがいいと思います。発表ありがとうございました。

2020年度「コロナ危機」!

文化学園長野中高生徒会

この試練をどう乗り越えるか

信州ESDコンソーシアム成果発表会 2021.2.6

ユネスコスクール4年目 文化学園長野中学・高等学校

ジェンダーレス制服プロジェクト!

～J C がジェンダー・ギャップを探究してみた～

2021.1.30

文化学園長野中学校 神田紗希・丸山詩乃

① 研究のきっかけ —ジェンダー・ギャップの例

明らかに男女の機会が違つもの格差

多岐派の価値観 イメージの押し付け

性別 男性ネクタイ スラックス 女性リボン・スカート

トイレットビクトラム 男性は青 女性は赤

結婚した時の名字 男性の名が94%以上 女性の名が5%以下

研究者の割合 男性 94.0% 女性 5.7% (平成30年度)

育児休暇取得率 男性 6.10% 女性 82.2%

信州大学 ©2021 shinshu-university junior high school

何が問題なのか

文化学園長野中学・高校の制服

男子用 ネクタイ スラックス ヲシャツ (白・青)

女子用 リボン スカート ヲシャツ (白・青・ピンク)

ピンクのヲシャツは選べない スカートは選べない リボンは選べない

ネクタイは選べない スラックスは冬用のみ

④ 色についての調査 ①文献調査

(1) これまでの研究論文から

日本では幼児期から色彩選考に男女差が見られる。

・女兒は暖色系や淡い色、男児は寒色系を好む。

・特に「ピンク色」に顕著な性差が見られた。

図：東京都の幼稚園児・保育園児110名の調査 (清水, 2003)

④ 色についての調査 ①文献調査

(2) 身の回りにある、色とジェンダーの刷り込み

・戦隊モノのピンク=女性戦闘員、子供向け商品の色使い → 「ピンクは女子、青は男子」を強調

・トイレのビクトラムは1964年東京オリンピックで生まれた → 万人に分かる表示が必要だったため、多数派が持っているイメージ (男=寒色系、女=暖色系) を採用した

でも...ヨーロッパの貴族の肖像画は、黒や青の服が多い。

新たな疑問 「ピンク(暖色系)は女性」というイメージはいつ、どこで生まれたものなのか?

④ 色についての調査 ③アンケート

(5) 制服のシャツとして着たい色は?

| 色 | 合計 | 合計 | 男(%) | 女(%) |
|-----|----|------|------|------|
| 白 | 29 | 63.0 | 52.9 | 69.0 |
| 水色 | 31 | 67.4 | 70.8 | 65.5 |
| ピンク | 11 | 23.7 | 0.0 | 95.6 |
| その他 | 9 | 19.3 | 11.4 | 3.4 |

・男女とも、白・水色を好む。
・男子は、ピンクを選ばなかった。

<色の好みの調査結果から>

・実際に着たい色の種類は好きな色より少ない。男女とも、黒・グレーなどのモノトーンを着る。 → 制服の色と一致している。

・ピンクを着たい男子はいなかった。 → 女子のみピンクを含めているのは妥当。

⑤ スタイルについての調査

(6) 制服の小物で使いたいものは?

| 小物 | 合計 | 合計 | 男(%) | 女(%) |
|-------|----|------|-------|------|
| ネクタイ | 44 | 95.7 | 100.0 | 89.7 |
| リボン | 19 | 41.3 | 0.0 | 58.6 |
| 黒いリボン | 4 | 8.7 | 5.9 | 10.3 |
| 縞ネクタイ | 1 | 2.2 | 5.9 | 0.0 |
| その他 | 1 | 2.2 | 5.9 | 0.0 |

・男女とも、ネクタイを好む。
・女子は6割がリボンを好んでいる。

<ネクタイについて>

女性もネクタイを好むのは、当世紀に女性の運動服が広がって、スポーツを楽しむとともに前向きな姿勢を取り入れたことがきっかけ。

ネクタイの活動的なイメージが、男女問わず現代の学生に合っている。

⑤ スタイルについての調査

(7) 男子はスカート、女子はスラックスを履かないことについて (1つ選択)

| 理由 | 計 | % |
|-------------------------|----|------|
| 1.男子はスカートを選ばないと思っていた | 5 | 10.9 |
| 2.女子はスカートを選ばないと思っていた | 5 | 10.9 |
| 3.履きたいけど周りにどう思われるか不安 | 3 | 6.5 |
| 4.自分の体でいてほしい人がいない | 0 | 0.0 |
| 5.履きたいと思いついたが買ってもらえなかった | 2 | 4.3 |
| 6.履きたくない | 29 | 63.0 |
| 7.その他 | 3 | 6.5 |

<スタイルについての考察>

履きたいのに履けない人のために、どのような規定があればいいか考えてみる。

⑥ 考察と新たな疑問

ジェンダーレス制服には、どんな要素が必要だろうか?

課題：色やスタイルのジェンダーイメージを排除した制服がふさわしいのではないかと?

・文化学園の制服は、男女ともに好まれる要素が豊富。
・ピンポイントでは男女で好みがある。男子は選んでも履かない人が多かった。
・女子はスラックスを履くことではあるが、多くは履いて履かないことを選択。
→ 文化学園の制服は、元々ジェンダーレス制服に近いのでは?

・男女とも、ネクタイを取り入れたいと思っている。
・スカートもしくはスラックスを着たいけどできない人がいる。
→ 全員が好きなスタイルを選べれば、よりジェンダーレスに。

新たな疑問 選択肢が増えたとしても、例えば「スカートを履きたい男子」が気軽に履けるようになるか? そうはならないのでは?

⑥ 考察と新たな疑問

国連本部には、男性・女性の色やビクトラムで区別する表現を用いた設備はない。

国連では大事にしている「3つの価値観」があり、そのうちの一つが「多様性の尊重」。

あらゆる差別を許さず、公平に扱うことを、全スタッフがトレーニングで習得することになる。反した場合は、厳しい罰則がある。

特別な配慮をするよりも、全ての人に多様性を認識してもらうことが大事なのかもしれない!

国連ニューヨーク本部 職員 木内麻実さん

⑦ 結論と今後の課題

結論 ジェンダーレス制服に必要な要素とは...?

- 男女同一のスタイルを採用・選択可能にすることで実現。
- 多様な価値を持った人がいることを当然と考える。「誰ひとり排除しない」学校全体の意識が最も大切な要素である。

今後の課題 どうしたら、多様性を重視した学校になるだろう?

2. 文中発「脱レジ袋」!

新聞紙エコバッグ大作戦(プロジェクト)

文化学園長野中学・高等学校 中学部執行部

⑧ きっかけ

先輩から引き継いだ想いと活動

文中生徒会として「持続可能な社会づくり」にどう関わるか

「Nagano SDGs プロジェクト」に今年も参加し 「SDG宣言」をしよう

⑧ みんなのSDGs宣言とは

長野の学校・企業それぞれがSDGsに向けた活動を行うことで、長野をそして世界を変える小さな一歩を踏み出す活動につながるための宣言。

NAGANO SDGS PROJECT

ワールドフェスティバル 2020

でも・・・

そもそもエコバックって本当にエコ？

批判的な視点

調査開始「モノ造り」環境への負荷

- コottonの原料である綿の栽培
 - ・ 広大な 農地と農業が必要
 - ・ 森林破壊や土壌の流出による環境への影響
 - ・ 農薬汚染による生物への影響
- ⇐ 専門家から様々な問題点が指摘されている。
- レジ袋1枚、生産し処分するまでの環境への負荷
 - ・ Cotton製エコバックの 20,000分の1 倍

Life Cycle Assessment of grocery carrier bags (調査報告書デンマーク2018年)

つまり

エコバックはエコじゃない！！

新しいモノを生産するのではなく

4つのR
で捉え直そう

完璧・・・？

【結果は】
◎この文化祭オンライン開催の経験は 最大の強みとなった。
○その後の生徒会開催行事(合唱コンクール・生徒会選挙・生徒総会)をオンライン開催でできた。
○2021.13月の三送会もオンライン開催の予定。

【考察】<新たな課題>
・オンラインは飽きやすい
・機材のトラブル多発
・密状態を完全に回避できない
⇒オンラインのメリット・デメリットの研究
⇒参加者との双方向通信の強化方法検討(人間の集中力の研究)
⇒引き続き、コロナ対策の徹底

予測がつかない未来に生きる

文化学園長野で学ぶ12歳-18歳の私たちの世界は、長野、日本、世界と、確実にそして密接に関係していると感じたコロナ禍の一年。

新型コロナウイルスにより、社会の弱点、隙間、矛盾が見えたと思う。

今まで当たり前だったことが、当たり前に行き行えない

社会、そして学校。

改めて宣言します

①これまでの価値観を疑ってみる
②でも、絶対に無くしてはいけないものを見極める

世界は様々な人で構成されています。だからこそ私たちがお互い理解、尊重、協力し合って豊かな地球の為に活動し続けることをここに宣言します！

4 Rのうちの1つ、リデュースを達成するため、ごみになってしまいう新聞でエコバックを製作・配布・作り方の紹介をしよう。

●学校だけでなく地域の人たちにも「レジ袋削減」の意味を理解してもらおう

●「ワールドフェスタ」へ参加し、「新聞エコバック」を配布

学校・地域に広めよう

7月～ 中全生徒会員で新聞バック製作開始
8/3 ワールドフェスタ会議(長野市主催)にてプレゼン

学校で全校に作り方を教える
中全生徒会役員

地域の方々の協力を得て、活動が「自分のモノ、みんなのモノ」になることを意識

結果

- ・ 中学全体で、「新聞エコバック」を作成し当日500枚程度を配布することができた。
- ・ 多くの来場者にそれを使ってもらい、快い賛同を得ることができた。
- ・ 来場者の方にも、今の現状(レジ袋削減の重要性)を理解してもらい、少しでも当事者意識をもってもらえた。

ワールドフェスタ活動当日の行事が非常に盛り上がり、地域に向けてさらに高まりました！！

学校へのコメント①

SDGsの視点として、男女平等というところはどこか見えていなかったように思います。選べる制服に男女差があることから、この問題を考えていくのは興味深かったです。研究自体もしっかりしていて、どうして男女にそれぞれ青やピンクなどのイメージがついたのかを論文をもとに調査されていたり、校内での詳細なアンケート調査があったりと、本格的でした。持続可能な開発、そしてさらに教育の現場での実践となると忘れがちな視点を思い出すことができました。

学校へのコメント②

ジェンダーレスというテーマで学生生活に身近な制服について考えたり、エコバックは本当にエコなのかという疑問を持ち「本当にそうなのか？」という視点で考え、自分たちできちんとしたデータを収集し調査したりすること。そして文化祭の開催について、中止する学校のある中、開催するためにどうしていくかを工夫して考えていくことはとても大切で、この状況だからできないではなく工夫して考えていく力はその後の未来に大きくつながっていくように感じます。身近なものも世界のものも「なぜ」から考えていくこと、大切に考えていってほしいと感じました。

今後の課題

Why!?

- ・ 来場者の何人かの方から「どうせ捨てるのにエコなの？」という声も聞いた。「なぜ捨ててしまう新聞エコバックが重要なのか」という質問に答えることができず困ってしまった生徒もいた。
- 【その後の話し合い】◎理解不足もある個人には気持ちの温度差がある⇒そこをどう埋めるか、今後もっと話し合いが必要だ！
- ・ 生徒の中から「新聞エコバックをもっと広めるにはどうしたらいいだろう？」という声が上がった。
- 【その後の話し合い】◎もっと地域の方たちを知って頂くため、学校近くのスーパーやコンビニに設置してもらおう ⇒どうやって？

Why? Why? Why? Why? Why? Why?

3. 緊急非常事態!2020 文高発「どう生きるか」

文化学園長野中学・高等学校
高校生徒会執行部

ボランティア活動って

- ・ 貧困をなくすだけ？
- ・ お金を集めればいい？
- ・ してあげる？
- ・ 他人様の様に感じていない？

きっかけ

ユニセフ活動

- 剪金
- ゆめボックス
- 一食を捨てる運動

私たちが目指す姿勢

- ・ させて頂くという気持ちに常に持つ
- ・ 相手の気持ちになり同じ痛み・苦しみを感ずること

今年もやっています！

ヘアドネーションとは、病気などで髪を失った子供へ髪の毛を寄付するボランティア活動

本校から8人の寄付者
⇒コロナウイルスには負けていけない！
⇒こんな時だからこそ！

当日の様子

わたしたちができること

小児がんなどで苦しむ子どもたちへ自分の髪を届ける。簡単な作業で人を救える素晴らしい活動である。

髪の毛の有無はその人の個性。でも・・・世の中にはそれを必要としている人もいます。ちょっと誰かの笑顔が生まれるのです。

誰か(これは自分かも)の人生に

文化祭

コロナウイルス感染対策を徹底させる！

- (1) オンライン開催
- (2) 各部屋の分散
- (3) 4つチャンネルを開設
 - 生徒会チャンネル
 - 文化部チャンネル
 - 運動部チャンネル
 - エネスコチャンネル

ユネスコスクール卒業生

高校生の頃の学び
今の私へのつながり

高崎経済大学 地域政策学部 地域づくり学科 2年
長野西高等学校 卒業生

佐藤友音

キーワード
Think Globally, Act Locally

長野西高校は
ユネスコスクールです!!

地域政策学部

- ・地域活性化
- ・地域づくり

地域政策学部を選んだ理由

Think Globally, Act Locally

↓

様々な分野の視点から地域の課題を考える

↓

山ノ内町の活性化に繋げられる

ご清聴ありがとうございました

MEDY... 中野西高等学校 卒業生

学校へのコメント①

中学校、高校のときにユネスコスクールで学んだ環境への意識を今でも心に留めて持ち続け、発信し続けていることが率直にすごいと思いました。私達も今後教員になっていくときにこのような意識を持ち続けられる子どもを育てていくことが、目指す教育の形だと思っています。そのためにもまずは私たちがこのような実践の学びの場に出続けること、そしてその子どもたちの学びを吸収し、自分も成長し続ける必要性を感じました。私が本当に姿から学ばせていただいた時間でした。ありがとうございました。

学校へのコメント②

ユネスコスクールにいたとしても、その場にいることと意識することでは違うように思います。大学での学びを山ノ内町のためにという思い、素敵だなと感じます。卒業後どういことができるか、そういう視点で話してもらえたことでより未来を見て活動できると感じました。

午後の部（東条小学校～ユネスコスクール卒業生） 講評

【北陸 ESD コンソーシアムコーディネーター／石川県ユネスコ協会理事 今井 和愛 先生】より

北信越のユネスコスクールの交流会に水谷先生などに来ていただいて、お話しをいただいています。他に講師の様々な方にも来ていただいて、いつもお世話になっており、ありがとうございます。

主に中高、及び卒業生、ユネスコスクールの、3つのグループのご発表でしたが、中身が非常に濃く、すぐにはまとめ切れていませんが、まずは2つ。

まずは信州大学の附属松本中学と文化学園長野中高、中学高校、この2つを中心に考えますと、身近なことにしっかり問いをつくるという、自分事にする力があつたと思っています。例えば松本中学では、SDGsのポスターを見てもすぐつなげないで、まずは自分たちがしたいことをとことんしようというところから始まっている。長野文化学園のほうは3つありましたが、いずれも身近なことである制服について、ジェンダーレスの制服、あるいはエコバッグは本当にエコなの？という疑問、あるいはコロナパンデミックの中でどんなふうに自分たちが生きていくかというようなことで、ボランティアや文化祭の中で学んでいる。つまり、いずれも身近なこと、自分事にして問いをつくる。そのことが素晴らしかったと思っています。

次にその事柄を広げていく。あるいは問いを作っていくという力もみなさん持っていらっしゃる。で、探求学習は次に展開していく。次々と新しい疑問を作っていく。例えば文化学園のほうのジェンダーレス制服については、「スカート、あるいはズボン、スカートが履きたい男子の子がいても、本当に気兼ねなく着られるのか」など新たな疑問が出てきた。そこから新しい発見なり、結論で、国連に聞いたり、多様性の尊重ということを考えていくわけです。そういうふうに関いを次から次へと作っていく。そういう力が2番目にあつたと思います。そして3つ目にはやはり安田先生がおっしゃるように、まとめてそれを今後に伝えていく、地域や或いは後輩に伝えていく、そういう力を感じました。で、身近な問題を自分事にする、それを新たな問題として回していくという探求的な学習と、それをまとめて発信していく力があつたと思います。いずれもすごく素晴らしかったと思います。

さて、3つ目のユネスコスクールの卒業生のことについて、3人、2グループ、佐藤さんと芋川さんと小林さんのいま大学生のご発表でしたが、いずれも簡単に申し上げますと、線的な発展ではなくて、やはり一度内側に、内面に引き込んだ形で展開しているという印象です。特に小林さんですか、しっかりと体験して実感していくことによって初めてわかることがある、だからどんどんやってみよう、あるいは楽しくなかったらやめようとか。あるいは最後に感謝する、つまりいろんな、みなさんそうですが、いろんな人のおかげでいろんなきっかけを得て、学んでいく姿勢から感謝していくという、この3つがすごく印象に残りました。ただ同じことをやっているのではなくて、一度自分の内側に内面化し、なぜやったのか、そこに何か意味があるかというようなことから、例えば佐藤さんはいかにもトレードオフという、AとB、AをうまくやろうとすればBがうまくいかない、そういう例をあげながら、SDGsの精神にあつた形で、地域政策部で勉強なさっているということで、いずれの方もしっかりと内側に自分を入れてそれを展開しているという点で非常にたくましく、ユネスコスクールの卒業生であることを感じました。以上、三方の発表についてコメントをいたしました。どうもありがとうございました。

【東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター 主幹研究員 及川 幸彦先生】より

一日本当に長丁場をご苦労様でした。皆さんだいぶお疲れかと思いますが、最後ですので、ちょっとお時間をいただき、なるべく簡潔にお話ししたいと思います。

全体を通してということですので、ひとつひとつコメントはできませんが、つなげて少し話をしていきたいと思っています。とはいえ、やはり発達段階があり、小学校は小学校の良さがありますし、中学校は中学校、そして卒業生というのですか？ユネスコの部分はユネスコの部分で、それぞれ特に感銘を受けた点を、皆さんと共有したいと思っています。

まず小学校の4校ですが、ほんとに個性的で素晴らしい。発表のしかたもそれぞれ個性的でしたが、共通するキーワードは、やはり「つくる」ということかなと。「つくる」は、作文の作じゃなくて「創造」の「創」ですよ。持続可能な社会のつくり手と学習書にもありましたけれど、つくるじゃなくて創造の創、すなわち単に知

るだけじゃない、あるいは体験で終わるのでもない、やはりそこから何か創っていく、例えば東条小学校はホタル、それから、信里小学校はヤゴと、昆虫の種類が違って共に昆虫たちを育てる活動を通して、ただ育てるだけじゃない、環境をつくっているんです。ホタルとかトンボが住みやすい環境をデザインしている。そういう意味でのつくる。デザインングですね、そういうことができるようになる。飯綱グリーンヒルズ小学校はリンゴを栽培する、作物ですね。そして永明小学校は杖ですね、間伐材で杖をつくる。同じつくるというこれらの活動が、そこで終わるのではなくて、やはりESDというつながり、学びというのにつながりです。アクティブラーニングはつながりですから、深い学びにするにはつなげていかなきゃいけない。そうするとつくることによって学習をどんどん深めていくという学びのプロセスが次に来ます。そしてもう一回自然にかえったり、水槽の中でいろいろ実験してみたり、様々な深まりがあります。そうするとやはりこれらはそう簡単に生きているものでもないし、そう簡単にできるものじゃないなというような価値とか大切に気づくわけです。その大切な価値に気づけば、どうにかしてこれを守りたい、受け継ぎたいというような思いは自然に出てきます。無理やり教員が引っ張る、引っ張らないという話がありましたけれども、そうした気づきを学びの中で子どもにきちっとつくるということが重要で、そのための体験であり、創造活動であり、デザインだったり、様々なしかけがあります。

そして「保護」という最後に大きな問題が2つ出てきます。保護するためには、そしてそれを「受け継ぐ」ためには、そのことだけを見つめていたら、多分保護とか受け継ぐことはできないと思います。そのものが支えられているつながり、例えば自然の生態系のつながりもあれば、人間とのつながり、人間が影響を与えるつながりもあります。ヤゴがいっぱい、おたまじゃくしがいっぴいのところは、無農薬の田んぼかもしれない。無農薬という環境は、人間がある程度手をつけないでいるというか、維持しているからできるのであって、そうした自然のつながり、それからバランスですね。これは中高生の発表にもつながるのですが、ひとつを選ぼうとすると、もうひとつが成り立たない、それはこれから考える部分でもあるかもしれません。ホタルの柵を中庭につくるということで、側溝を一生懸命石で作っていたのですが、一方でそれが側溝としての機能、防災としての機能として、どうなのだろうかとか、そういうふうな多面的な見方といいますか、小学校だからそこまではいいと思うのですが、それに気づけばまた別にそういう環境をつくらうとか、そういう話にもなってきます。ですからそのバランスが非常に大事な部分で、そういうことでさらに学習がどんどん深まっていくことを期待しています。

それから中高生では2つの学校と、1人の卒業生の発表がありましたけれども、共通するのは、皆さんもご存じのとおり、中学生、高校生といえ、かなり自分で学ぶ力もできてきます。そうすると自分で課題を選択したり、発表したり、そしてそれを踏まえての探求と、まさに高校も今、総合的な学習の時間をとっていますので、探求というのがキーワードになります。この探求がより深まっているかというのが検証評価になります。ただ子どもに任せればいいのか、テーマだけ設定すればいいのかという問題ではなく、それが子どもの中でどれだけ自分のこととして落ちて、学びとして深まれば、それがその後に発信という話になります。でも発信して終わりなのかということもあるわけです。

今までも、ESDの探求学習が固定化してプロセスができて発信すると、なんとなく満足できてしまうのですが、私はそのなかで、今日非常に素晴らしいなと思ったのは、文化学園の長野中高生の発信です。問題提起として打ち出されています。この問題提起をするときの重要さということで今日彼らを指名したのです。それは何かというと、予見を問う、これまでの常識、これまでのしきたり、これまでの風習、例えば、ピンクは女性なのか。あとはトイレのピクトグラムですか、私もオーストラリアにいた時、間違っって女性用トイレに入ったことがあります。それはなぜかということ、オーストラリアでは、どっちも表示が黒なんですね。日本だと赤と青だったのですけれど、私はその気持ちで黒だから男性だろうと思って入ったら女性だったという、非常に恥をかいた思い出をさっきの話で思い出し、「そうか、これは常識じゃないんだ」ということがその時にわかったのです。それと同じように、「エコバッグはほんとにエコなの？」みたいな話だったり、あとは新聞紙でエコバッグ作って、配っていたら、こんな捨てるものがエコなのかとゆさぶりをかけられました。そういうような様々な葛藤とか悩みのなかで、予見を問うていきながら、やはり既存の価値観を疑って、本質的なものは何なのか、まさしくそういう最後の発信があり、素晴らしい発信だと私は思っています。ひとつ注文するとすれば、生徒会のボランティアのところで、海外のユネスコやユニセフ、様々な事例がありましたけれども、あの事例というのは実は身近なところにもあるんじゃないかということ、もう少し掘り下げていただきたいと思えます。やはりSDGsって

うのはHow to localizeということていかに自分の身近な地域に落とし込むかということが重要です。足元から行動して世界的な貢献につなげていくと、Think control to gloveringみたいな感じで考えていかないと。これからは考えるだけではなくて、貢献ということの道筋をきちんと示していく必要があるかなと思います。その先に地域作りの貢献であるとか、変革の主体者と言われるところにつながっていく。思ったことは、変革の主体者というのは、ある意味地域作りというのは、もしかしたら価値観を変えることなのかなと、今日は思ったところです。本当にありがとうございました。

最後にユネスコスクール。本当にこの学びをつなげるというものとして、今日これをプログラムに入れた事務局のこれはファインプレーだなと思っています。けれどもひとつだけ思うのは、卒業生という言葉が私は気にくわなくて、という怒られますけれども、好きではありません。ユネスコスクールの卒業生ではあるけれども、ESDの卒業生ではないので。まさしく彼らは今でもESDを学び続けています。ESDとは、あるスパンだけでやるのではなくて、私もこの年になってもずっとESDで学び続けてますので、日々そういうことで、学ぶということは継続する。この芋川さん・小林さんのやってる活動も、高校から中学からつないで今学んでいるのでしょうし、それから佐藤さんの、ひとつの課題解決が他の課題を生むというジレンマの中で、まさしく解の見えない問いを今一生懸命頑張ってる勉強しているわけです。そのことこそがESDです。だからESDは現役ですから、ぜひその現役の部分をお忘れずに、卒業してもこの画面に映っている足立先生をはじめ、信州大学の先生方も現役なので、そういう形でぜひ頑張ってもらえればと。すみません、余計なことまで言いましたね。皆さんどうぞ頑張ってください。今日は大変勉強になりました。この学びをぜひ海の方まで広めてほしいなど。信州はどうしても真ん中辺なので、ちょっと全国に、海岸部にまで押し寄せてほしいなというふうに感じました。ありがとうございました。

【前 大牟田市 教育長 安田 昌則 先生】より

私はこのコロナ禍の中で、各学校が工夫し努力し、一生懸命学習しあったこと、とても嬉しく、また、頼もしく思いました。本当にありがとうございました。私はこの信州大学の発表会に毎年参加させていただいておりますけれども、本当に内容が充実し、例年発表のしかたがとても上手になっているなあというふうに感じております。4つの小学校のまとめとして、私は3つの素晴らしさがあったと思います。

まず1つ目は発見する素晴らしさ。地域の宝物に子どもたちが出会って、そして学びの中でその地域の宝の良さをどんどん発見していく、という姿があったと思います。東条小学校ではホタル、そしてグリーンヒルズではりんご、また信里小学校ではトンボ、そして永明小学校では間伐材を利用して自分の杖を作るというようにそれぞれの地域の自然の素晴らしさ。触れて、そして発見して具体的にそれをどんどん自慢していく姿を私は見ることができました。そういう発見する素晴らしさの姿があったのではないかと思います。

2つ目は行動する素晴らしさであります。具体的に自分たちで、また友達と協力して、体を動かしていく、そして一生懸命考えていく、そして心を働かせていく。このように体を動かし、頭を使って、心を動かしていく、そういう具体的に自分たちが行動する、学んでいく素晴らしさがあったというふうに思いました。

それから、3つ目は伝える素晴らしさということです。この伝える素晴らしさには2つあると思います。1つは発信するという事だろうと思います。自分たちが学んだことをしっかりと家庭の人や地域の人、またほかの学年、さらにはほかの学校にもきちんと発信していく。学びを発信していくということが、大事なことだろう、というふうに思います。またグリーンヒルズは発信するという中では、りんごを売るということになったと思います。これもきちんと私は発信するという事だろうと思いました。また、伝えることの2つ目は、自分たちの学んできたことを次の後輩たちに、次の学年に伝えていく、そしてだんだんとそれが充実していく。その学校の伝統となっていく。そして地域の誇りというものをみんなで共有していくことになっていく、というふうに思います。

このように今回は発見する素晴らしさ、行動する素晴らしさ、そして伝える素晴らしさの姿があった、というふうに思います。

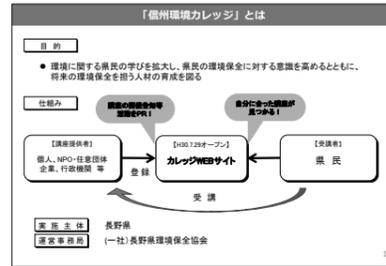
現在、信州大学の先生方にご協力をいただいて、大牟田の小学校とグリーンヒルズの小学校と交流をさせていただいております。今後も他の地域とぜひ交流をさせていただいて、学びを深めていきたい、というふうに思います。今日はありがとうございました。

環境カレッジ 学校講座

信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会

信州環境カレッジ
学校講座の利用状況等について

2021年2月6日
信州環境カレッジ運営事務局
中山 哲徳



信州環境カレッジの概要

参加したい講座がすぐ見つかる
講座情報を発信

環境活動を応援する
経費補助

講義、体験、ワークショップなど様々な講座を登録
ホームページやSNS等で講座情報を発信
県内各地で広く参加者を募って開催する講座

講座開催に係る経費を補助
登録した個人、NPO法人、任意団体を対象

1講座当たり
地域講座 25,000円
学校講座 20,000円
(地域講座の補助は1団体4講座まで)

地域 県内各地で広く参加者を募って開催する講座
学校 学校からの申込により開催する出席講座
WEB スマートフォンで気軽に申し込み

2020年度 講座の登録状況等 (1月末日現在)

| 地域講座 | | | | | 地域別内訳 | | | |
|----------|----------|---------|---------|--------|-------|----|----|----|
| 講座種別 | 任意団体 | NPO法人 | 行政 | その他 | 東信 | 南信 | 中信 | 北信 |
| 73 (229) | 41 (102) | 30 (27) | 12 (78) | 4 (22) | 15 | 7 | 40 | 39 |

※下段の「1」内の数字は、2019年度の登録数

| 学校講座 | | | | | 対象者 | | | |
|---------|---------|--------|-------|-------|-----|-----|-----|-----|
| 講座種別 | 任意団体 | NPO法人 | 行政 | その他 | 小学生 | 中学生 | 高校生 | その他 |
| 73 (45) | 50 (29) | 14 (8) | 7 (8) | 2 (1) | 37 | 33 | 19 | 8 |

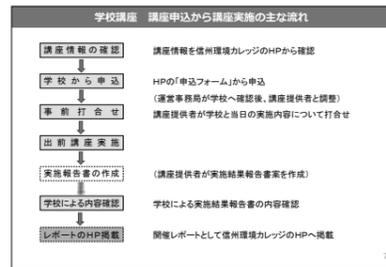
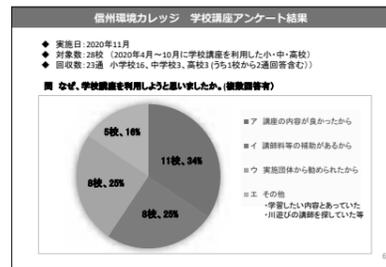
学校講座の登録例 (1月末日現在)

| 講座提供側 | 講座名 | 小 | 中 | 高 |
|---------------------|-----------------------------|---|---|---|
| NPO法人くまのこつたろワークショップ | ゲーム感覚で自然に触れよう！宝探し探検 | ○ | ○ | |
| 長野県環境教育推進センター | 川の奥まで行ってQ&Aしよう！ | ○ | ○ | |
| NPO法人信州フォレストワーク | 森林教室「森はワンダーランド」 | ○ | ○ | |
| 伊那県山自然観察隊 | トノボとその生息地の観察 | ○ | ○ | |
| 安曇野環境化協議会 | 中学生の地球温暖化防止 | | ○ | |
| 信州まつもと自然の会 | 学校登山事前学習・事後学習 | | | ○ |
| 長野県シニアボランティア協会 | 自然体験学習 | | ○ | ○ |
| フォレストデザイン | 里山の恵みを学ぶ | | ○ | ○ |
| NPO地域づくり工房 | つくてみよう！環境マップ | | ○ | ○ |
| 長野県資源循環推進課 | ごみの減量化・リサイクル・廃棄物処理 | | ○ | ○ |
| わたしたちの未来を調 | わたしたちの未来を調 | | ○ | ○ |
| NPO法人みよしの青果 | 地域の自然と暮らしを学ぶよう | | ○ | ○ |
| NPO法人長野県NPOセンター | SDGs de 地方創生カードゲームWORK SHOP | | ○ | ○ |

学校講座の実施状況等 (1月末日現在)

| 実施学校数(講座数) | | | | 【実施講座例】 | |
|------------|--------|------|------|---------|---|
| 区分 | 小学校 | 中学校 | 高校 | 計 | ＜小学校＞ |
| 全体 | 21(16) | 4(7) | 4(6) | 29(25) | ・川の生き物探検隊 ・森の遊び場づくり ・森のクイズ教室 ・自然素材で服製作 ・ゲーム感覚で自然に触れよう！宝探し探検 |
| 東信 | 2(1) | | | 2(1) | |
| 南信 | 3(2) | | 1(2) | 4(4) | |
| 中信 | 15(13) | 3(3) | | 18(13) | ・水辺の自然観察と生物多様性 ・学校登山事前学習・事後学習 ・寄付の教室×SDGs |
| 北信 | 1(1) | 1(4) | 3(5) | 5(7) | ＜高等学校＞ ・SDGs de 地方創生カードゲーム SHOP ・カードゲームSDGsdeで世界と自分のつながりを知ろう ・暮らしの自然と暮らしを学ぶ ・里山の恵みを学ぶ 実施団体の必要経費を確保 |

○ 延べ講座数 116回
○ 同じ講座が複数実施
○ 補助を活用し、学校教員が経費、実施団体の必要経費を確保



信州環境カレッジ 気候変動やゼロカーボンへ学べるWEB講座スタート

・気候変動の基礎知識「ワークショップ」
・小学生から大人まで世代ごとの講座
・信州ゼロカーボン検定

もっと詳しく知る

ご清聴ありがとうございました。

講座の確認、申込はWEBで！

「信州環境カレッジ」で検索
<https://shinshu-ecollege.pref.nagano.lg.jp>

お問合せは、信州環境カレッジ運営事務局
TEL:026-237-6620
Email:shinshu-ecollege@nace-portal.jp

IV

長野県内のユネスコスクール年次報告

信州大学教育学部附属幼稚園

加盟年:2018年

1 2020年度活動分野

環境

2 2020年度活動の概要

本園は、「自然環境を大切にすることを育む」を活動テーマとして、ESDを学びの場と捉え、ESDの実践を通して資源の再利用を通じた環境保全を主体的に進めようとする力の育成を目標とした。

具体的には、資源回収、資源の分別、資源の再利用を柱に①資源回収に係わる活動、②再生資源を使った遊びに係わる教育、③資源に係わる学習、④環境に係わる学習を行った。

①資源回収に係わる活動

本園では、家庭で捨てられてしまうトイレットペーパーの芯や牛乳パック、空き箱、ヨーグルトの容器等を集めていただき、幼稚園の回収箱に集めていただき、幼稚園の回収箱へ分別していただいている。幼稚園の回収箱は、中身が見える透明な箱に「ひらがな」で明記し、保護者だけでなく子どもたち自身も分別できるようにしている。最近では、隣接している小中学校でゴミとして捨てられているトイレットペーパー芯を集めていただいたり、卒園児の保護者や近隣の地域の住民の方にも資源を集めて届けていただいたりするようになってきた。

②再生資源を使った遊びに係わる教育

資源回収で集まった素材を物によって洗浄・消毒し、子どもたちの創作活動や遊びに自由に使える素材として提供している。子どもたちは、トイレットペーパーの芯やヨーグルトカップ、空き箱等を使って乗り物や動物をつくって遊ぶことを通して、物をゴミとして簡単に捨ててしまうのではなく、資源として生かす考えが自然と身に付いてきている。

③環境に係わる学習

子どもたちは、資源回収で集めた素材でつくった乗り物や、動物を家に持ち帰っている。子どもと保護者が話をして、使わなくなった乗り物や動物をもとの資源に戻し、もう一度遊びの素材として使えるように幼稚園の回収箱をもって帰ってくるような姿が見られた。子どもと保護者が話をする中で、いらなくなったからと言って簡単に捨ててしまうのではなく、資源としてもう一度生かす考え方が子どもたちの中に自然と身につけている。

④資源に係わる学習

年に3回、地域の本の読み聞かせ同好会の方をお呼びし、子どもたちに読み聞かせをしていただいている。その中で、それぞれの発達段階にあった「資源」「リサイクル」に係わる内容の絵本の読み聞かせをお願いしている。また、年に2回ある観劇会では、資源を利用した人形を使った人形劇を見せてもらっている。また、今年度は年長向けに市の環境課の方に、「リサイクル」についてのお話をしていただき、資源を大切にしようとする気持ちを育ててきた。

3 2021年度の活動計画

令和3年度はコロナの状況にもよるが、県内の国公立幼稚園に職員が出向き、家庭からでた資源を使った遊びをその園の子どもや職員に伝えていく。また、幼稚園を公開する際には、本園の回収ボックスや、素材置き場も公開し、他園の幼稚園の職員にも本園の回収方法やリサイクルの仕方を広め、環境問題について共に考える活動を展開していきたい。

また、PTAや地域住民に子どもたちと協力を願い、幼稚園だけでなく、地域にも広く資源の再利用を呼びかけ、幼稚園とPTA、地域住民で協働した資源再利用の取組をさらに進めていきたい。

加えて、絵本の読み聞かせ同好会によるお話や、観劇会、信州大学教育学部の先生のお話等、地域の方にもご協力いただき、地球環境に関する子どもたちの発達段階にあったお話を聞く機会をつくっていきたい。

茅野市立永明小学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

環境／世界遺産・地域の文化財等／国際理解／平和／貧困

2 2020年度活動の概要

本校は2017年度にユネスコスクールとなった。学校目標は『ともに拓く』～なかよく・かしく・たくましく～。今までの教育活動をESDの視点で捉え直し、「つむぎ合い」を中心にすえて取り組んできた。

具体的には、①書き損じはがき集めに係わる活動、②「縄文科」学習、③「全校つむぎ合い講座」の講演による「平和」学習、④地域の自然と関わる活動、⑤ベルマーク募金、⑥ユネスコスクールのロゴを使って各通信の発信を行った。

①書き損じはがき集めに係わる活動

回収ボックスを昇降口に置き、1月下旬まで回収する。世界には公的教育を受けられない小学生がいる事実を知り、自分ができることから行動に移そうとする姿を育むことができた。

②茅野市では二体の国宝土偶が出土していることから、市内全小中学校で「縄文科」学習に取り組んでいる。本校では3学年で、「縄文人は火を使っていた」ことから火起こしに取り組んだ。火を着けることは簡単ではないこと、協力や協働なくしては着けられないことを知り、縄文人も力を合わせて生活していたことを体感した。4学年では、縄文カルタの絵にあったイヤリングやペンダントに興味をもち、ろう石をけずってまが玉を作った。まが玉にどんな願いを込めていたのか、縄文人の生活の様子に思いを馳せながら制作した。

③「全校つむぎ合い講座」の講演から 平和を祈り千羽鶴を広島・長崎へ 昨年度長崎市出身の保護者から長崎に落とされた原爆の被害について、講演をしていただいた。長崎市の学校は8月9日は登校日で、平和について学習すること。夏休み帳には原爆や平和にかかわるページがあることなどの話から、長崎の子どもたちは小さい頃から「平和」について学んでいることを知った。そして、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさ、平和の尊さについて考える機会になった。この講演をきっかけに、「自分たちにできることはないか」と考え、千羽鶴を作って被爆地の広島と長崎に送ることにした。折り方がわからない1年生に姉妹学年の6年生が教えながら、平和を祈り鶴を折った。地域の方や学校職員、PTAの役員、コミュニティ・スクールの皆さんとともに作り上げた。

④地域の自然と関わる活動

3年3部は、地域にある「永明寺山」に散策に行き、登り下りをするには杖があると便利だと考えた。そこで、山に落ちている手頃なサイズの木を拾ってきて、のこぎりで切ったりカッターで皮をむいたりして、加工して杖作りをした。

4年2部は、市の運動公園に住むリスの観察をしてきた。かわいいうリスをこれからも守っていきたくらい、公園を訪れる人たちに守ってほしいことを伝える看板を設置した。

⑤ベルマーク募金

一人でも多くの子どもが学校に通って学べるようになってほしい。そして、世界の子どもたちが、私たちと同じように、自分の話す言葉の文字が読めるようになってほしいという願いから、昨年度末集まったベルマークの中から、2万円分を「アフガニスタン寺子屋プロジェクト」に友愛援助資金として寄付した。

⑥学校だよりや学年学級通信等にユネスコスクールのロゴを掲載し、児童や保護者、地域の方にユネスコスクールであることを広く発信した。

3 2021年度の活動計画

- ユネスコ協会の取り組みとして行っている書き損じはがき回収に引き続き協力していく。
- 全学年が縄文科の学習を通して、縄文土器や土偶に興味をもったり、どんな暮らしをしていたのか思いを馳せたりする。知恵を働かせ、協力して生活していた素晴らしさについて、体験を通して学ぶ。
- ESDの理念や「接続可能な開発目標(SDGs)」を職員に周知し、学習活動や行事のねらいを角度づけしていく。具体的には、学年別指導計画をSDGsの視点がねらいとなっているものを、シンボルマークで示す。また、生活科および総合的な学習の時間を学級の中核活動にすえ、各教科横断的なつながりを付け加え、ESDカレンダーを作成し、SDGsを意識して授業を展開する。
- 諸外国について学ぶ機会を、講演会や社会の授業、平和学習などを通して行っていきたい。
- ベルマーク募金について、継続していきたい。

高山村立高山小学校

加盟年:2015年

1 2020年度活動分野

生物多様性／滅災・防災／環境／文化多様性／世界遺産・地域の文化財等／人権／福祉／健康／食育／エコパーク

2 2020年度活動の概要

高山小学校のユネスコスクールの活動は、「日本でもっとも美しい村でのふるさと学習」を基本に学習を進めている。具体的な取り組みとしては、①学校・PTA・公民館が共催する親子体験ふれあい体験講座「わくわく村」②生活科・総合的な学習の時間を中心にした地域に学ぶふるさと学習③学校支援ボランティアこの①～③を3本の矢として考え取り組んでいる。また、その成果の発表として「しらかば学習発表会」を位置づけ、地域にも発信している。しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染症の流行により、それぞれの活動について感染拡大防止の対策を最優先に、活動内容について見直しをしてきた。実施できた活動、内容を変更して実施した活動、中止とした活動などあるが、手探り中、ユネスコスクールとしての責務を果たすために、できる活動に真摯に取り組んできた1年となった。

①学校・PTA・公民館が力を合わせた「わくわく村」講座の取組み

親子ふれあい体験講座である「わくわく村」だが、本年度は計11講座開設した。親子のふれあいだけでなく、地域の人々との交流・自然環境のすばらしさに触れたり、歴史や文化といった風土にも学んだりして、その魅力を肌で感じることができた。

＜今年度開設された講座＞

- ・親子木工教室「村の施設のベンチをみんなで作ろう」
- ・ホタル学習教室「高山村の古道を歩く」
- ・ハーバリウム教室「お好みの花を瓶に入れて 素敵な作品を作ろう」
- ・わら細工作り体験教室「荒なわで鍋敷を作ったり、和とじの手帳を作ったりしよう」 等11講座

②生活科・総合的な学習の時間を中心にした地域に学ぶ体験学習

生活科・総合的な学習の時間の活動では、地域に学ぶ学習を行った。11月の「しらかば学習発表会」は中止とし、2月の参観日に学年ごと発表会や掲示等で活動の成果を発信する。

各学年の主な取組み

1年生 「秋探しに行こう！」「来入見との交流」：高山村の観光施設であるYOU游ランドの公園施設でドングリ拾いや落ち葉拾いをして、生活科でドングリを使った学習を行った。新型コロナウイルス感染症予防ため、直接の交流はできなかったが、1日入学で小学校に来る来入見さんのために、プレゼントをつくったり、ビデオメッセージをつくったりした。

2年生 「前田牧場へ行こう」「給食センター見学」：毎日の給食にも出され、周辺地域からもおいしいと評判の「こだわり牛乳」。その牛乳を生産している前田牧場に行き、牛を見学したり牛乳になるまでの話を聞いたりして、生産者の方の思いに触れた。また、「給食センター見学」では、働く調理員さんの姿を見たり食事のマナーや大切さを学んだりする予定である。

3年生 「りんご栽培体験」「共同選果場見学」：高山村の特産品のりんごを栽培している農家へ行き、1年間を通して美味しいりんごを作るには、どうしたらよいかを学習してきた。児童たちは、農薬の問題や、色づきや味を良くするための工夫などについて体験を通して学んだ。

4年生 「障害者体験」「パラスポーツを楽しもう！」：実際に障害者体験をすることで、障害者の思いに寄り添うことができた。また、予定されていた東京パラリンピックに合わせて、パラスポーツに取り組んだことで、パラスポーツへの興味関心の高まりとともに、誰もが楽しめるスポーツのよさを味わうことができた。

5年生 「米作り体験」「交流活動(キッズわくわく村)」：地域の方に田んぼを借りて、実際に米作りを体験したり、日本の食料生産の問題について考えたりすることができた。「わくわく村」に習い、子どもたちが企画・運営した交流活動「キッズわくわく村」も行った。子どもたちの発想が生かされた、様々な学年の子どもたちが集い楽しめる講座となった。

6年生 「高山探検隊」：地域の農業・観光など様々な魅力を調べ、一人一人が探究テーマを決めて、パンフレットにまとめていく活動を行った。地域の特長や長く続いてきた文化に触れることができた。

③学校支援ボランティアの方の活用による活動

実施可能な範囲で、学校支援ボランティアの方にご協力いただきながら活動を行った。ボランティアの方々との絆を強めたり感謝の気持ちを高めたりすることが出来た。

＜今年行った主な活動＞

- ・りんごの学習(3年) ・書写指導(3,4,5,6年) ・米作り体験(5年) ・集団行動の指導(6年)

・英語の紙芝居(6年) ・読み聞かせ(全学年)

2月上旬 「信州大学コンソーシアム実践発表会」への参加

地域のコンソーシアムで自校の実践を発表するとともに、近隣の学校の取り組みを知ったり、交流をしたりする予定である。

3 2021年度の活動計画

令和3年度高山小学校のユネスコスクールの活動計画は、本年度同様、「日本でもっとも美しい村でのふるさと学習」を基本に学習を進めていく。具体的な取り組みとしては、①学校・PTA・公民館が共催する親子体験ふれあい体験講座「わくわく村」の内容を見直し、さらに充実させていく。②生活科・総合的な学習の時間を中心にした地域に学ぶふるさと学習を各学年のESDカレンダーを基に進めていく。子どもたちと共にとどのように学んでいくのか、子どもの思いを大切に学習活動にしていく。③学校支援ボランティアを充実させ、地域の素材と共に地域の人と関わりを深めていく。

山ノ内町立東小学校

加盟年:2014年

1 2020年度活動分野

生物多様性／環境／世界遺産・地域の文化財等／福祉／持続可能な生産と消費／その他の関連分野

2 2020年度活動の概要

本校は、「よく考えて行う子、なかよく力を合わせる子、気力にあふれやりぬく子」を学校目標とし、ESDを「自ら考え、自ら行い、自らを高める活動」と捉え、「E…いいと思うことを S…進んで D…できる子」の育成を目指している。具体的な取り組みとして、環境に係わる活動を柱に、故郷山ノ内町の自然や文化財に関わる活動、地域の人と関わる活動、生き物とのくらしをつくる活動などを行っている。

①環境に関わる活動(全校)

毎年志賀高原で行われている「ABMORI～いのちを守る森作り～」の環境保護活動に、全校児童が関わっている。1・2年生は、どんぐりをプランターに播き苗木を育て、3年生は、植樹の苗木になるコマツガを志賀高原の森林から採取した。6年生は、2年生の時から育ててきたミズナラの苗木をスキー場跡地が再生するように植樹作業を行った。4年生は、遠足で横手山に登り、ガイドの方から志賀高原の動植物について教えてもらい、志賀高原の自然の素晴らしさを知るきっかけとなった。志賀高原への愛着や今ある自然を未来につなげていきたいという気持ちが育まれてきた。「志賀高原新聞」を制作してPRし、山ノ内町の自然をいかした工作へと意識が広がった。地域の自然を守り続けるために自分ができることを考えていけた。

②生物多様性に関わる活動(1・2年)

7月から羊の飼育を始めた1年生。小屋作りからえさの確保、お世話などみるくちゃんとの生活の中で羊に心を寄せ、学級の一員として迎え入れ、運動会には校庭で一緒に楽しむ姿が見られた。羊との生活を歌にして音楽会で発表した。2年生は、昨年度育ててきた「モルモットのしろちゃんに会いに行きたい」という願いから、野菜作りを通して販売で得たお金で会いに行く願いを実現した。収穫した作物を地域の方や観光客に「道の駅」で販売するなど、様々な生産活動を体験できた。

③持続可能な生産と消費に関わる活動(3・5年)

保護者の協力を得て、学級でりんご栽培を行ったり、町内の3年生が集まり、そばの栽培を行ったりしてきた3年生。山ノ内町がりんご栽培に適した場所であることや、広い土地を利用しそばの栽培活動が行われていることを、一年間の作業を体験することで学んでいった。5年生は、山ノ内町のブランド米「雪白舞」を田植えから収穫まで体験した。作業を体験することで食料生産への関心が高まり、志賀高原の雪解け水や土壌、気候によって、おいしいお米が実るふるさとの恵みを実感することができた。

④地域の人やものに関わる学習(4年)

山ノ内町で生まれ、志賀高原の間伐材で作られている楽器「コカリナ」の学習に取り組んだ4年生。コカリナ誕生に大きくかわり現在コカリナを製作しているOさんと出会い、コカリナに込められた願いを知った。自分のコカリナに愛着をもち、志賀高原遠足や音楽会等で演奏し、コカリナの音色の美しさを観光客や地域の方に伝えることができた。

3 2021年度の活動計画

「ABMORI～いのちを守る森作り～」に関わる活動やふるさと志賀高原遠足(地獄谷野猿公苑、自然教育園、コメツガ採取、横手山登山)、高原学習(志賀山登山)、コカリナなど、志賀高原ユネスコエコパークに関わる活動を来年度も進めていく。地域の人やものと関わり合いながら、子どもたちの主体的な活動や課題に向かう姿を支えていきたい。来年度は、児童が自分たちの学習や活動とSDGsがどうつながっているのか活動を振り返れるよう情報交換し合える場を設け、自分たちは今何のためにどんな活動を進めているのか、意識したり学び合えたりできる工夫を考えていきたい。

山ノ内町立西小学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

生物多様性／エネルギー／環境／文化多様性／平和／人権／持続可能な生産と消費／食育

2 2020年度活動の概要

本校では、子どもと教師が共に身近な地域の自然や社会と関わり、本物に触れる体験を通して、自ら課題を見つけ、今ある知識・技能を生かしながら主体的・協働的に目の前の問題を解決しようと粘り強く取り組んでいる。その中で対象から教科の枠を超えた事柄を総合的に学び、友だちの大切さや自分自身のあり方を見つめ直していく活動を生活科や総合的な学習の時間に位置づけ、そこで表出された子どもの姿をESDの理念で意味づけている。

①動物との暮らしをつくる活動(1年、2年)

1年生は、毎年1年生が飼育することになっている烏骨鶏との活動を進めてきた。出会いの場面では、7羽いる烏骨鶏との触れ合いの時間を十分に確保するとともに、担任自らが執筆した教材本「うこっけい」の読み聞かせを行うことで、子どもたちは「ウコッケイさん」への思いを醸成していった。

6月には狭い小屋で暮らす烏骨鶏のための「遊び場作り」の活動を行った。のこぎりで切り出した木材をねじや釘でとめて枠を作り、その上に金網を又釘で取り付けていった。子どもたちが「ウコッケイさんの誕生日」と言う、7月21日(烏骨鶏の日)には、持ち寄った葉物野菜や果物をあげながら、枠を組んでようやく完成した遊び場の中で自由に動き回る烏骨鶏と一緒に遊ぶことができ、満足そうな子どもたちの姿が見られた。

秋に行われた音楽会では、担任と子どもたちとで作った『ウコッケイさん』という合唱奏を、思いを込めて演奏することができた。また、山ノ内の厳しい冬に備えて小屋の冬囲いの作業を仲間と協力して行った。

このような活動を通し、子どもたちは「命の大切さ」「友だち同士で協力する良さ」「思いを表現することの楽しさ」を味わい、学んでいった。

2年生は、1年生の秋から羊の「ゆき」との生活を営んできた。コロナでの休校明け、ゆきが自由に過ごせる遊び場を作りたいと願いを持った。「遊び場をどこにするか」の話合いの場面では、最初は「いつも近くで見たいから教室の前がいい」と言っていた子どもたちであったが、話し合っていく中で「ゆきにとって一番いい場所はどこだろう」という羊の視点で考え、場所を探し求めるようになった。朝、2時間目休み、昼休みでは日光の当たり方が違うこと、場所によって風の通り道があることに子どもたちは気づいた。そして「場所によってどのぐらい気温の差があるのか」と、温度計で調べたり、自分で実際にその場で過ごしたりする活動を通して、羊にとって最適な場所を見つけ、そこに遊び場を作ることができた。

秋、ゆきの出産を願う子どもたちは、生命誕生の仕組みや羊の出産について学び、種付けを行うことにした。そして、秋からの発情期に合わせて牧場から雄の羊を借り、交尾の瞬間を見ることができた。上手くいけば来春に生まれてくる子羊との生活に心を躍らせている。

また、5月の休校中に刈られたゆきの毛をきれいに洗いフェルトボール作りに取り組んだ。羊毛を丸めてボール状にし、デコレーションを施したり、ストラップを付けたりして、えさの牧草を買うための商品作りを行った。売上金で当分のえさ代を賄うことができることが分かり、子どもたちは満足そうであった。

羊との生活を通し、解決すべき課題や子どもたちの願いが生まれ、そのたびにどうしたらいいのかとクラスみんなて話しあい、解決方法を考え、力を合わせて解決してきた子どもたち。そして、命と向き合う毎日から、命の尊さ、責任感、喜びを体を通して感じとっていく子どもたちであった。

②米作りの活動(5年)

5年生は、毎年取り組んでいる米作りに取り組むことになった。しかし、毎年使っている学校脇の田んぼは小さく、長年使用した土の状態も決していいものではなかった。「せっかく作るならおいしい米を作りたい、食べ

たい！」という子どもの願いから、担任は、地域の方々の協力を得て、学区内にある須賀川地区の休耕地を新たに開墾し、田んぼを作って子どもたちと共に米作りに挑戦することにした。五月末、水が張られた田んぼにおそるおそる足を入れる子どもたち。「きゃー、冷たい!」「土の中って気持ちいい!」とあちこちから悲鳴と歓声があがる。最初は気持ちが悪かった泥も、そのやわらかさや温かさ、足を包み込む感覚など、しだいにその感触を楽しむようになっていった。

子どもたちを夢中にさせたのは、ゲンゴロウ、オタマジャクシ、アメンボなど水の中の生き物だった。これほどまでにこの田んぼに様々な生き物がいるのは、肥料も農薬も入っていない手つかずの自然であることが大きかった。生き物を教室に持ち帰り、生き物について調べていく中で、無肥料・無農薬が生き物たちの生活を豊かにし、稲が育つ環境もよくなっていくことがわかった。地域の方からこのまま無肥料・無農薬で育てられそうだと聞いた子どもたちは、「安全じゃん」「無農薬の方が絶対おいしいでしょ!」と、自分たちの米を無農薬・無肥料で育てたいと願うようになっていった。「絶対においしい米を作りたい。食べたい」という願いを強くしていった子どもたちであった。

そして、地域の方々に支えられながら子どもたちが育てた米は、全国食味鑑定コンクールで見事金賞を受賞した。「金賞ってすごい!」「どんな味なんだろう。早く食べてみたいな。」と全国に認められた米の味への興味関心が高まっていった。

須賀川地区で米作りをすることを通して、地域に残る豊かな自然を肌で感じ、その良さに気づいたり、地域に暮らす人々とのつながりの中で自分自身のあり方を考えたりする子どもたちであった。

3 2021年度の活動計画

令和3年度は、本校の目指す子ども像「自ら感じ 自ら考え 自ら動き出す子ども」を念頭に、児童と教師はもちろん、保護者、地域の方々と共にESDの推進を図っていきたい。それには、子どもと教師が暮らしを創る生活科や総合的な学習の時間をベースに、子どもたちの主体的な学びを日々の授業実践として積み重ねていく。

また、各学級の生活科や総合的な学習の時間において中核活動を中心にしたESDカレンダーを年度当初に作成し、一年間の活動の見通しが持てるようなストーリーマップを作成していくようにしていきたい。カレンダーの作成に当たっては、これまで作成してきたカレンダーの内容を参考にしながら、その年の担任と子どもとのやりとりの中で計画を練っていくようにしたい。

そして、ユネスコエコパーク内にある学校としての意味を全体計画に位置づけていきたい。

さらに、情報機器を活用しながら同じユネスコスクールとして活動する町内の小中学校との交流を広げ、深めていきたいと考えている。

山ノ内町立南小学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

生物多様性／海洋／環境／持続可能な生産と消費／健康／食育／エコパーク／その他の関連分野

2 2020年度活動の概要

テーマ～ESDの日常化～

1 日常化に向けての課題を見つめ直す

「地球規模の問題の解決に向けて取り組もう」と言っても、小学校という段階で何ができるのかという問題がある。そんなとき、大事に考えたいことが、「Think globally act locally」ということだ。これは、「身近なところから行動を起こす」ととらえることができる。その上で、これまでの状況をふり返り課題を見つめ直してみると、

①「ESDを進めなくちゃいけない」という義務感や、新しいことは始めるの?忙しいのに」という多望感・負担感があり、ESDが学校のほんの一部の場所では意識されていなかったかもしれない。

②ユネスコスクールに登録はされているものの、その意味やとりくみを学校内にとどめていたのかもしれない。

③子どもたちにとっては、決して身近なものではなく、別の世界のように感じていた部分があったのかもしれない。

これらの課題を少しずつクリアし、「ホールスクール」としてESD、SDGsに取り組むことが求められている。そのため、ESD、SDGsの意義を再確認しつつ、ESD、SDGsを身近なものとしてとらえることができるような体制と環境を作り出すことが必要であると考えて、全職員でのとりくみをスタートさせた。

(1) ESDを通して目指す子ども象の明確化と職員の意識の変化

これまでの5年間で、徐々にではあるが、ESDが学校の中に浸透はしてきたのは事実である。しかし、2(2)①に挙げたような、ネガティブな感情があったこともまた事実である。

それでもこれまでの南小学校の歩みを見返したときにESDの視点で継続的に取り組んだ次のような活動では子どもも教師も楽しく生き生きと学習を展開することができた。

- ・アマランサスを使ったおやきづくり 町への提案(5,6年)
- ・高齢者が元気に暮らす町づくり～楽ちんバス(コミュニティバス)の運行時刻と料金に着目して～(6年)
- ・大豆を育て加工して見つめる食事・農業・貿易 大豆の可能性(4年)
- ・地域の温泉を見つめ直して考える、山ノ内町(5年)
- ・地域の人が集まる夜間瀬川の実現に向けて(6年)

このような事実から、ESDを通して目指す子どもの姿を次のように描いた。

- ・自分を含めた「ひと」のよさを見る子ども
 - ・「本当か」と問い直す子ども
 - ・身の回りの「もの」「社会」のよさや課題を発見する子ども
 - ・身の回りの社会や世界の課題に対して、その解決に向けて主体的に学び、当事者としてかかわる子ども
- そして教職員がこれまで以上にESDを前向きにとらえ直し、ESDを、①これまでの教育・学習活動のとらえ直し、②教科・領域間のつながりや関係性の見つめ直し、③身の周りの社会のもつ魅力や課題の再発見をする学習と考え、これらを楽しんで行うことこそが、南小の教職員のミッションであると考えた。このようにして2020年度の歩みを始めた。

(2) 研究会の持ち方 ～実践の共有～

本校では月曜日の放課後に「グループ研究会」を行っている。これまでは公開授業について、チームで考えるという側面が強かったことが否めないのだが、今年度は、低学年、高学年の2つのグループに分かれ、グループ内で実践発表を順番に行うこととした。この日程は早めに示し、見直しをもてるようにした。

低学年のグループでは「低学年ではESDをどうとらえ、推進していくのか」のテーマのもと、「豊かな原体験」をグループのキーワードとして、日々の実践について語り合った。

高学年のグループでは原体験を積んだ子どもたちが、「社会や人とどうつながるのか」をテーマに実践について語り合った。どちらのグループも資料は日々の学級だよりなどとして、この研究会のために何か新しいものを作らないことや、勤務時間内で端的に考えを出し合うこと、記録用紙に簡単な記録をとり、PDF化して保存すること、信州大学の水谷瑞希先生にも可能な範囲で参加していただくことを継続した。そうすることで、互いの学級のよさや今悩んでいることを共通理解することができるようになった。さらに、互いの活動や考え方を知り合うことができ、職員室でそれぞれの学級について、気軽に相談したり、経験をもとにアドバイスしたりして話し合う雰囲気が作られていった。それは、ESDの大前提である、「持続可能」ということにつながる、「持続可能で苦しめない研究会」ができてきたということだと考えている。

(3) 職員研修と外部研修への参加

ここまで書いてきたことと同時に、ESDやSDGsについての理解をさらに深め、より身近なものへとしていくためにESDに関する職員研修も年間計画に位置付け定期的に開催してきた。研修で大事に考えたのは、「主体性を持ち、当事者としていられる研修」である。研修では次のようなことを実施してきた。

- ア 4月 ESDスタート研修:ユネスコアジア文化センター(ACCU)が2020年2月に発刊した、「変容につながる16のアプローチ」を全職員で読み、そこから本校で大事したいことや、学級で大事にしたいことを語り合う時間を設けた。そこで、3(2)で挙げた「豊かな原体験」という言葉と出会った。これまで低学年のESDの推進についてどのように考えたらよいか、悩んでいたのだが、「豊かな原体験」という視点を持つことができた。そして、「豊かさ」は五感を総動員して行う体験であり、「原体験」は本物に触れる体験であるということを通認識し、学習を展開する上でのベースとしてとらえるようになった。高学年においては、原体験を積み重ね、さらに社会とのつながり、課題解決に向けた行動変容を促していくような学習を大切にしていくことを学んだ。
- イ 4月 ESDカレンダー作成に関する研修: 信州大学教育学部特任教授の渡辺隆一先生を講師に、ESDカレンダーの作成についての研修を行った。本校でESDカレンダーを作成し、教科間のつながりやSDGsとの関連を見通すことでカリキュラムマネジメントを行っている。今年度の学習展開について構想する上で、グループで活動のイメージについて討議し、渡辺先生にもこれまでの知見から、先進校のとりくみなども紹介していただき研修を進めた。
- ウ 4月 自己課題の共有:2回の研修会を経て、今年度どのような課題をもって一人一人が取り組むのかを発表する時間をもった。画用紙に端的な言葉で書き、それをもって短時間で発表を行った。最後にその紙を職員室に掲示し常に見えるようにした。
- エ 6月 ESDカレンダー作成研修②: 休校があげて1か月が経過したところで、信州大学教育学部助教の水谷瑞希先生を講師に、ESDカレンダーの作成・見直しの研修を行った。子どもたちとの実際の生活やコロ

ナ禍での学習になることも踏まえて、教材に触れながらグループで意見交換を行った。

- オ 8月 ESD授業づくり研修:夏休みに北信教育事務所の指導主事を講師に、2学期のとりくみと実際の授業づくりについての研修を行った。ESDカレンダーをもとに、今後の学習展開について発表をし、甘利指導主事も入ってグループで意見交換を行った。甘利指導主事からは「気づき」を大切に学習の在り方などについてアドバイスをいただいた。
- カ 12月 ESD授業づくり研修②:夏休みの研修を受けて12月に再度指導主事に来校していただき、2年生と4年生を中心に全学年の授業を参観していただき、授業後に研究会をもった。生活科と総合的な学習の時間で目指すことについて端的に教えていただいた。生活科はスタートカリキュラムであり、幼稚園・保育園での学びをいかして行うものである一方、総合的な学習の時間は、小学校で学習したすべての見方、考え方をいかし、つなぎ合わせて展開するゴールの姿をイメージするということを学んだ。
- キ 12月 ESD実践報告会:講師に奈良教育大学准教授の中澤静男先生を迎え、放課後に2日間に分けて開催した。遠方の講師を迎えてのコロナ禍での開催だったので、講師の中澤先生にはオンラインで参加をしていただいた。

初日は、中澤先生の講演を聞き、ESDを推進するにあたって、学校と地域の関係について教えていただいた。これまで学校は地域に対して、「学校の活動に協力してくれる人材」を要望していたが、これからは、「学校が地域のためにできることを行い、それを共に行う人材」と共に活動をするという新たな視点を教えていただいた。

2日目は、本校の各学級の実践発表を行い、それを受けてのグループ討議を行った。中澤先生からは報告を受け、奈良県の実践を紹介していただき、本校の活動と関連付けて考えを深めることができた。この実践発表に向けて、実践報告と最新のESDカレンダーを全学年で作成した。実践報告書については水谷先生からの提案もあり、昨年から作成をスタートし、今年度は形式を新たにし次のような項目でA4で1枚を原則に作成した。

- ・実践校・対象
- ・テーマ・目標・課題
- ・ESDの視点
- ・育成する資質・能力
- ・関連するSDGs
- ・探究課題と活動実践の概要
- ・流れ(指導計画 他教科との関連を見える化)
- ・効果・反応・所感
- ・指導方法・体制の工夫: 昨年のもよりもSDGsとの関連などが明確になるとともに、昨年に引き続き、A4で1枚を原則とし、作り手にとっての負担感の軽減を図った。今後もこのような形式で実践を積み重ね、実践が見えるような形を探っていく。

- ク 外部研修への参加 ～発信と学習と交流～:新型コロナウイルスの影響で、本校では思いがけず、オンライン学習や研修を実施するための環境を整備することができた。また、様々な研修がオンラインで実施されるようになったため、職員が研修に参加することがこれまでよりも容易になった。

ESDダイアログ「白山から発信 ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践を考える」(11月15日実施)では、本校のとりくみとこれまでの歩みや悩みについて実践発表を行い、様々な参加者から意見をいただくことができた。また、その中でZoomのチャット機能を使って、屋久島の教育委員会をはじめ多くの方とやりとりをしながら交流できた。

ユネスコスクール全国大会では職員が指定討論者として討論に参加する機会をいただき、低学年のESDについてや、身近なことから世界をつなぐ視点、学校が地域包括的なESD推進のためのコンソーシアムを形成することなどについて意見を交わすことができた。

10月からは月に1回程度実施されるユネスコスクール意見交換会に放課後に学校から参加し、他県での実践を聞いたり、ユネスコスクールで学ぶ中学生、高校生とも意見交換をしたりして研修をすすめた。

このような研修を通してかわりあった人や組織とのつながりを今後も大切にしたい。

(4) 各学年の実践について

1学年 つくる～生き物のいる環境・ヨーグルト・アート作品

「豊かな原体験」この言葉をキーワードにしながら学習を進めた。春先、休校明けの学校はもう夏と言ってよいほどに暑さを感じる日々だった。散歩をしていると子どもたちは涼を求めて中庭の池で遊び始めた。何度も繰り返すうちに、池の中や周辺に思いのほか生き物がいないと感じた子どもたちは「生き物(トンボ)が集まる中庭にしたい」と考え始めた。そこで、8月に生き物が豊富な須賀川地区のビオトープを全員で訪問し、生き物の観察や遊びを行った。その際ビオトープの土を採集し、中庭に小さなビオトープを再現すれば生き物が集まるかもしれないと考え、土の採集もおこなった。日当たりや水の温度などの環境因子も子どもたちなりに考え始める姿が見られた。今年の段階では学校に設置したプラ船にはあまり生き物は集まっていないうが、その背景を1年生なりに考えている。生活科の「生き物と一緒」「いつもの場所」などの関連を図って実践をすすめた。

秋になると子どもたちの身の回りに木の実や落ち葉が増えてきた。その色の美しさや形のおもしろさ、感触のよさに惹かれた子どもたちは、自然とそれらを集め始めた。そんな姿を見て、これらを「使う」そして「生かす」学習を展開しようと考え、「秋とあそぼう」を実施した。教室前に落ち葉のお風呂を作ったり、木の実や枝を組み合わせた置物作品を創り出したりして、身の回りのものを使い、生かすことのおもしろさを味わった。

様子だった。この学習は図工の学習との関連性を特に念頭において進めた。

10月、11月に近所の牧場を訪問した。そこで子どもたちは、身近な場所に牛がいること、牛乳やヨーグルトやチーズはスーパーで売っているだけでなく、自分の手でも作ることができることを知り驚くと共に、やってみようという意欲を高めた。この学習では国語の「しらせたいな 見せたいな」生活科の「生き物といっしょ」図工の「動物さんの絵」、道徳の生命尊重の観点など様々な教科間の連携を図ることができた。

2学年 ～私たちとりんご～

「りんごを育てよう 春」花摘み、摘果(中止)「自分のりんご」という気持ちを高めるため個人のりんごを決め観察をした。

「りんごを育てよう 夏～秋」観察を継続しながら、11月下旬の販売に向けて活動を進めた。充実した販売となるよう、子どもたちと検討し、6年生から教えてもらった新聞紙エコバックに入れての販売を決定し、エコバック作りを6年生と行った。また、子どものつづやきから、「りんごの名産地」という歌詞をつくり、コーシャルソングとして活用した。

「りんごを育てよう 冬」販売後に学校にメールで感想が多数届いた。それに対して子どもたちがお礼の手紙を送る活学習をした。

3学年～私たちの町山ノ内 そば作りを中心に～

社会科の地域学習を広めて、自分たちの住んでいる佐野地区と「自分たちの町」山ノ内町について学ぶことを柱に考えた。また、1・2年の生活科から学級で取り組んできた「食」や「栽培」の活動も引き続き行うことにした。地域探検では、学区内のそれぞれの地区の地勢や産業など、社会科的な視点からの見学にあわせ、自然や公園の中で遊んだり、温泉の足湯につかったりという体験活動をする中で、自分たちの町のよさを肌で感じられるように考えた。子どもたちは自分の住んでいる地域をめぐるときにはガイド役となり、「ここでは、秋にこんなお祭りがあるよ」「このお風呂は、結構熱いんだよ」などと、友だちに楽しそうに語る姿があった。自分の住んでいる地区をクラスの友だちに紹介することを通して、そのよさを再認識できたようだ。

もう一つの柱のそば作りは、本学級では2年生から取り組んでいる。地域の少年警察ボランティアの皆さんに、須賀川地区の畑で、そばの種まきとそば打ちの体験をさせていただいた。オヤマボクチをつなぎにした、山ノ内地域独特のそば作りを楽しむことができた。ただ、自分たちの住んでいる佐野地区には、そば畑はほとんどない。農家の子も多いが、りんごやぶどう栽培が主で、そばを作っている家庭もない。山ノ内のそばが有名だということは、なんとなく知っていても、他の地区のことだと思っている。子どもたちは昨年度の経験から、「学校の畑でそばを作ってみよう」との願いを持った。そこで、そばの種まきからそば打ちまでの工程を、自分たちの力で行うこととした。刈り取り、脱穀、天日干し、製粉などの作業は、千歯扱き、唐箕、石臼などの昔からの道具を使って行った。社会科としてのねらいもあるが、全ての工程を自分たちで行うことで、そばへの思いがより深まると考えた。地道で根気のいる作業も多かったが、活動の中で「早く食べたいな」「そばクッキーにしたい」などの声が聞かれた。

4学年 ～大豆を食生活に活かそう～

子どもたちの「自分たちで作った野菜を具にしてみそ汁を作りたい」「大豆の他の料理もしてみたい」という意識を始まりとして学習を進めてきた。そのための野菜を学校の畑で栽培したり、昨年度仕込んだみその変化を観察したりした。じゃがいもが収穫できると、みそ汁作りに取り組んだ。具材の選定においては、昨年度健康教育で学習した食品の持つ栄養素のことを生かそうとする姿が見られた。

秋になり大豆が収穫の時期を迎えた。大豆の収穫と並行して、大豆についての調べ学習を進めた。こどもたちは、大豆の持つ栄養素に関心を向けて調べ、大豆の持つタンパク質が注目されていることが分かり、子どもたちは、「大豆をもっと食べた方がいい」と考えた。給食の献立の中にもいくつか大豆を使った料理があることに気づき、献立表を調べ始めた。調べたことをもとに休日の昼食を想定して大豆を使った料理を取り入れた献立を考えた。食生活と健康との深い関わりを意識し実生活に生かそうとする姿が見られた。

今後は、社会科「ゴミの処理とその利用」の学習から、「食品ロス」を無くしたいという意識の高まりが見られているので、大豆の調べ学習の中で子どもたちが見つけた大豆の生産量と輸入量から食品の生産と消費について意識の広がりを図っていききたい。

5学年 ～地域のブランド米 雪白舞～

4月 田おこし前の田んぼを見学に行く。「ここから始まるんだなあ」しかし、この後休校になってしまう。休校中に行われた籾まきを、担任が行ってお手伝いする。本当は子どもたちにここから関わらせたかったが、今年はできなかった。

5月 休校明けに田植えができるようにと、堀内さんが準備を整えてくださった。休校明け3日目(27日)に田植えを行う。「いよいよ始まるんだなあ。」田植えの様子が信濃毎日新聞の記事になる。

6月 協力していただいている方から余った苗をいただき、学校で一人ひとつずつバケツに稲を植えて観察を始める。

8月 夏休み中にバケツ稲の水が切れて、稲が枯れた後、復活する。19日(84日目)穂が垂れてくる。

9月 23日(119日目)稲刈り。終盤に近づくと「なんかちょっとさびしい」バケツ稲の稲刈り。

10月 12日(138日目)脱穀。現代のコンバインと昔の足踏み脱穀機で行う。「昔の方が力はあるし、大変だけど、なんか自分たちのお米って感じがする。」

11月 バケツ稲の脱穀、バケツの片付け(根の観察 日向と日陰で根の張り方が全然違うことへの気づき)米・食味分析鑑定コンクールの小学校部門で金賞を受賞。町への報告会への参加。金賞を受賞したことで、協力してくださる方の農家としての仕事の丁寧さと米作りと向き合う真剣さに改めて気づくと共に、子どもたちは「産業としての米作り」「どうこの米をいかしていいのか」などに目が向き始めた。

6学年 ～海なし県から考える海洋プラスチックごみ問題 エコアクション～

SDGsという世界の誰一人も取り残さずに2030年までに達成すべき17の目標を意識しながら、環境保全をテーマに学習をしている。どの学校でも地域学習が多く、とりわけ本校はユネスコエコパーク内にある学校であるため、身近な山を学習材にすることが多い。一方、世界に目を向けると、急激な人口増加、異常気象など様々な課題が生じている。この中で今年度は、地域だけでなく世界に目を向ける活動をしたいと考え、海洋プラスチックゴミの問題に対策を考える活動をした。

長野県という海無し県の陸域から排出されるゴミが、川に流され海にたどり着くことを学習することができた。その中で、問題の深刻さをとらえ、まずは身近な地域のゴミを拾う活動を行い、改めてプラスチックゴミが多いことを実感した。

11月にはレジ袋の有料化に伴い、本校2年生が毎年リンゴ販売の際に使用するレジ袋を新聞紙エコバッグに代替して販売する企画を実行した。自分たちにできることを児童自らが見付け、行動した活動であった。さらに、12月にはプラスチックゴミの問題について、Zoomを用いて静岡県内の小学校と交流を行い、陸域と海域の違いや取り組んでいることについて意見交換をすることができた。

(5) その他 ～日常化にむけての環境づくり～

ア 信州ESDコンソーシアムとの連携

職員研修の講師を務めていただいたり、講師を紹介していただいたり、月曜日の校内研究会に参加をしていただいたりして、日常的に学校に関わっていただいている。本校の実践について研究者の視点での価値づけや課題の整理を共に行うことで、職員室を中心に学校の中でESDが日常的なもので身近なものになってきている。

イ SDGsの見える化と意識づけ

ESD・SDGsについて、教職員だけでなく、児童、保護者、来校者などにも身近なものとして意識してもらえるように、全学級にSDGsのアイコンシールを配布した。そのシールを掲示物や教室の関係が深そうだと感じるところにどんどんはってみた。例えば、エアコンのスイッチ、教室のドアなどに、「エネルギー」「気候変動」のシール、水道の前に「安全な水」のシール、ごみ箱に「つくる責任 つかう責任」のシールなどをはった。子どもたちはそれを目にして、「そうかこれは〇〇番につながるのか」「ここは〇〇番につながるかもしれないからシールを貼ろう」など呟く姿があり、ほんの少しかもしれないが、SDGsが日常的なものに近づいたのではないかと感じる。

ウ 児童会活動

今年度から本校では児童会の委員会にESD環境美化委員会を設置した。児童が主体的に児童の視点でESDを推進する委員会である。今年度は以前から行っている登校時のごみ拾い(クリーン作戦)をESDの視点で改めて見直し、ゴミを集めるための袋の量を減少させた。また、SDGsに対し、児童会としてでできることを考え始めた。

3 2021年度の活動計画

令和3年度は、本校の目指す子ども像「自ら感じ 自ら考え 自ら動き出す子ども」を念頭に、児童と教師はもちろん、保護者、地域の方々と共にESDの推進を図っていききたい。それには、子どもと教師がくらしを創る生活科や総合的な学習の時間をベースに、子どもたちの主体的な学びを日々の授業実践として積み重ねていく。

また、各学級の生活科や総合的な学習の時間において中核活動を中心にしたESDカレンダーを年度当初に作成し、一年間の活動の見通しが持てるようなストーリーマップを作成していきようにしていきたい。カレンダーの作成に当たっては、これまで作成してきたカレンダーの内容を参考にしながら、その年の担任と子どもとのやりとりの中で計画を練っていくようにしたい。

そして、ユネスコエコパーク内にある学校としての意味を全体計画に位置づけていきたい。

さらに、情報機器を活用しながら同じユネスコスクールとして活動する町内の小中学校との交流を広げ、深めていきたいと考えている。

信州大学教育学部附属長野小学校

加盟年:2018年

1 2020年度活動分野

生物多様性／環境／人権／防災

2 2020年度活動の概要

本校は、人間愛と共生の心に基づき、教師と子どもが「共に在る」を教育理念として、ESDを「『ひと、もの、こと』とのつながりのなかにある、かけがえのない命・わたしとあなた」と捉え、ESDの実践を通して問題発見、課題解決、対話的で深い学びの力の育成を目標とした。具体的には生活科および総合的な学習の時間を柱に、①あさがお栽培・動物飼育に係わる学習(生物多様性) ②環境に係わる学習(林業) ③人権・福祉に係わる学習を行った。

①あさがおに係わる学習(生物多様性) 1年生

「あさがおの種をどうやって蒔いたら(植えたら)いいのか」近くのお花屋さんの方から教わり、わたしが育てたい鉢に、わたしが使いたい土を入れ、あさがおの栽培活動が始まりました。苗が顔を出してからは、「土の中がどうなっているのか」「どうやって花が開くのか」「何時に花がひらくのか」など、子どもたちの問いをきっかけに活動が生まれ、あさがおの根の広がり、あさがおの花が明け方に開き、その開き方は徐々に蕾が開きはじめ、最後はパカッと花びらが開くことを目の当たりにした子どもたちからは大きな歓声が上がりました。あさがおさんの歌も生まれ、種がつくころまで、様々な活動を展開していきました。種がつきあさがおさんの1年の役目が終わると、「あさがおさん、がんばったね」とあさがおに言葉をかける、そんな場面も生まれました。

②動物飼育に係わる学習(生物多様性) 2、3年生

3年生が飼育するヤギの赤ちゃんの誕生から1年の活動が始まりました。予定日を迎えた母ヤギに出産の兆候が見え始めた時、学校は休校中だったため、出産の様子をオンライン配信しました。誕生の瞬間は深夜だったため、その場면을視聴することはできませんでしたが、小屋に集まらなくとも、「無事に生まれてほしい」という子どもたちの思いを共有することができました。秋には、2年生が飼育するトカラヤギと羊に発情が見られ、雄を迎え入れ、交尾の瞬間に立ち会うことができました。と同時に、昨年度生まれたトカラヤギの雄の去勢、4月に生まれた雄ヤギとの別れなど、生まれてきた命をどう守り、どうつなぎ託すのかなど、飼育を通じた様々な活動から、子どもたちは考え、わたしたちなりの答えを導き出すことができました。

③環境に係わる学習(林業) 5年生

カブラという積み木遊びから活動が始まりました。積み木遊びに熱中する中で、積み木の材料が間伐材であることを知り、「木を切ることはよいことなのか」そんな素朴な問いから林業の学習が動き出しました。日本の林業が置かれた現状に子どもたちは驚き、また、間伐することは森を壊しているのではなく、森に生きる木を守り、またその森を守ることは人間の生活も守ることに繋がっていることに気づくことができました。また、長野県内で間伐材の有効活用に取り組む方ともつながり、かんなくずを使った造花づくりにも挑戦しました。遠い存在だった「森」が、身近なものとなりました。

④人権・福祉に係わる学習 6年生

昨年度行った特別支援学校(小学部)との交流を、今年度も継続して行いました。5月まで休校が続き、ようやく学級のみんが集えた6月から、「何としても去年つながった〇〇さんに会いたい、再会したい」という強い思いを抱き続け、コロナ禍の状況のため、直接の交流は実現しませんでした。オンラインによる交流会が実現しました。手作り遊具を紹介したり、場面越しにうつる友だちに、「元気だった。ぼくは元気だよ」と画面に近づき思いを届ける、そんな場面もありました。オンラインでの交流をきっかけに、お昼の時間に短時間での交流を定期的に行っています。直に会うことはできませんでしたが、同じ時を過ごす友だちと、画面を通じてであっても、しっかりとつながり合っていることを実感することができました。

3 2021年度の活動計画

①動物飼育(生物多様性)に係わる学習

昨年度に交尾を済ませた雌ヤギと雌羊が出産を迎える。新たな命の誕生から、命の尊さあるいは重みを感じる。と同時に、2年間過ごしたヤギ、羊たちとの別れも迎える。とことん命と向き合い、ふれあう中で、様々なことを学んでいく。

②環境に係わる学習

地域の特産野菜と出会い、その特産野菜が誕生した背景を知り、自分たちの手でその野菜を育てたい思いから活動が始まる。種まきから収穫までの営みの中で、さまざまな出来事に出くわし、特産野菜を栽培し続ける方から栽培方法を教わり、収穫後にはその特産野菜を加工する活動へと発展させたい。

③外国に暮らす小学生との交流学習

今年度始まった、スウェーデンとイギリスの小学校との交流を継続させ、外国の文化に触れると同時に、自分たちが暮らす日本を紹介することを通して、日本の文化のすばらしさにも気づき直していく。

信州大学教育学部附属松本小学校

加盟年:2018年

1 2020年度活動分野

海洋／環境／人権／食育

2 2020年度活動の概要

本校は、「心身ともにたくましく心豊かな真の地球市民の育成と、国際的・地球的視野から崇高な生命と地球を保全し、社会と人類の幸福に貢献することのできる児童の発達に寄与すること」をねらいとして、活動を行っている。

①地球規模の問題に対する国連システムに係わる学習

今年度継続してエコキャップの回収活動を継続して行った。日々の回収活動としては児童昇降口の近くに回収箱を設置し、日常的に集めたり、児童会の活動とリンクさせて行ったりした。児童会の活動としては、毎年児童会が主体として行っている「児童会まつり」というイベントで、各委員会が作ったブースのアトラクションを楽しむためのお金の代わりとして全校に持参を募り、全校でアトラクションを楽しみながらもエコキャップをたくさん集めることができた。エコキャップは430個で約10円となり、20円するポリオワクチンを作るのには860個必要となる。今回は約116100個のエコキャップが集まり、およそ135個のワクチンを送ることができた。このコロナ禍においても楽しみながらこれだけの量のエコキャップを集め、ワクチンを送ることができたことが一つの成果となった。

また、昨年度から行っているユネスコ委員会における「服のチカラプロジェクト」に今年度も参加した。服のチカラプロジェクトとは、子どもたちが主体となって、不要になった子ども服を回収して、難民の方々など世界中で服を本当に必要としている人々に届ける活動である。この活動を通じて、次世代を担う子どもたちが国際問題や環境問題に関心をもつだけでなく、服のチカラを知り、自分にもできる社会貢献があると気づくねらいがある。今年度はコロナ禍ということもあり、活動の初めにDVDによる授業を行った。子どもたちはDVDの説明を受け、全校や各家庭に放送や手紙を通じて服の収集を呼び掛けた。さらに校内に回収用のBOXを設置し、数少ない機会に保護者の方の協力をいただき、収集を行った。その結果、段ボールにして16箱の洋服、およそ320Kgの重量を集めることができた。

②「海と日本プロジェクト」への参加

今年度、6年生の代表23名が、信越放送企画事業部の推進する「海と日本プロジェクト」に参加し、森や川の命について考える貴重な体験をさせていただいた。まず、「どんねんな生き物事典」作者の今泉忠明さんをゲストとしてお招きし、森や川、海に住む生き物についてご講演をいただいた。森からつながっていく命について貴重な学びをさせていただいた。続いて、市内の高校の食物科の高校生8名と一緒に「森の大切さ」について学習した。高校生が作成したスライドをもとに森を大切にすることの大切さを6年生なりに感じていた。引き続き、高校生と信州サーモンをさばくという、命と直接向き合う機会をいただき、「命をいただく」ということがどういことなのかを改めて理解することができた。海のない長野県ではあるが、豊かな森からつながる自然への新たな気づきをいただいた。

3 2021年度の活動計画

- 児童は、自然や生き物、環境のことに興味を持ち、主体的に取り組むことができているので、次年度も各学級での取り組みは継続したい。
- 保護者や地域の方々にも理解・協力していただいている活動(エコキャップ集め、アルミ缶回収、リサイクルバザーなど)も子どもたちと相談しながら次年度も継続する。
- 新しい学習指導要領には、持続可能な社会の構築の観点が盛り込まれているので、ESDの考え方を念頭に置きながら教育を実施していきたい。(特に、社会科、理科、生活科、家庭科)
- 昨年から発足したユネスコ委員会での活動が学校でも定着しつつある。さらに子どもたちの課題意識、学習意欲に寄り添いながら積極的に活動を進めていきたい。

高山村立高山中学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

減災・防災／世界遺産・地域の文化財等／持続可能な生産と消費／防災／食育

2 2020年度活動の概要

本校は、『自ら学び高めゆく』を学校目標とし、高山村や近隣の地域の「もの・ひと・こと」に関わる学習を通して、問いをもち、自己あるいは協働して問題を見だし解決をするなかで、高山村の持続可能な未来や、自己の生き方を考えることができる資質・能力の育成を目指している。「ふるさと高山村とわたし」を活動テーマに、今年度は以下のような活動を行った。

- ①ふるさと高山を知り、よさを実感する活動
 - 観光資源として、特産のりんごの新たな利用価値を考えるりんごの食べ比べゼリー・りんご石けんづくり等
 - 高山の壮大な自然を切りとり味わう「苔玉」づくりと、「苔玉」の可能性
 - 地域の食文化の継承と、地域食材の新たな可能性を考える「ひんのべ」「地産地消ピザ」「そば打ち」「乾燥食材」
 - 「小串鉱山」の跡地や携わった方から話を聞く中で考える、昔と今をつなぐ文化遺産
- ②安全で住みやすい高山村を考える
 - 災害に備え、自分たちが地域のためにできることを考える「救急救命」「発電機づくり」「サバイバル飯」
 - 地形や地盤から考えるハザードマップづくり
- ③高山村とわたしの未来を考える
 - 高山村の「もの・ひと・こと」との関わりから考える、人と人とのつながりを大事にする地域づくり
 - 私たちが考える「豊かさ」と、私たちがめざす高山村の未来

3 2021年度の活動計画

- ①高山村の「もの・ひと・こと」から、高山村のよさを学ぶ活動
 - 高山村の魅力、特徴、よさに気付き、自らがそのよさを発信するためにできることを考える
 - 地域に根ざし地域のために働く方の姿から、高山村の魅力と、働くことのよさを学ぶ
- ②被災地から学ぶ、自然がもたらす災害の現実と恐ろしさ、安全で住みやすいまちづくりのために復興に携わってきた人々の生き方や思い
 - 被災地での学びを活かして考える、安全で住みやすい高山村にするために、自分たちがすべきこと
- ③よりよい高山村の未来について考え、発信する活動

山ノ内町立山ノ内中学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

生物多様性／海洋／気候変動／エネルギー／環境／文化多様性／世界遺産・地域の文化財等／国際理解／平和／人権／福祉／エコパーク

2 2020年度活動の概要

本校は、ESDのテーマを、「日常生活の中で、ESDやSDGsとどう関わっていったらよいか。」と設定し、本年度はコロナ禍の影響はあったものの以下の3点について活動を進めてきた。

- 実践1 「わたしの、ESD・SDGs宣言」
 実践2 「ESDノートの取り組み」
 実践3 「中学生が夢みる町づくり 提案発表会」

①「わたしの、ESD・SDGs宣言」に係わる活動

4月、5月の休校中の国語科の課題として、五井財団が主催する「国際ユース作文コンテスト」応募に取り組んだ。今年のテーマは「2030年の私からの手紙」であり、10年後の世界の状況を予測して、現在の自分への手紙で伝えるものであった。全校から156通の応募があった。ESDやSDGsに関するキーワードを集計した結果をESDオリエンテーションで生徒に示した。それを参考にし、「わたしの、ESD・SDGs宣言」として、自分がとり組めるゴール目標の具体的な活動を、「花びらシール」に書き込み、学年毎のリンゴの樹に貼り出した。(別途資料参照) 3学期には、それぞれの活動を振り返り、今度は「リンゴシール」で、SDGsの樹を貼り出す計画である。

②「ESDノート」に係わる活動

家庭学習のあり方を検討する中で、各教科からの課題の他に、思考力・判断力・表現力を高めるために、「ESDノート」(A3版、5mmグラフ罫)を生徒に提案した。「こうしなさい」といった使い方の制限や提出強制力はなく、生徒自身が教科学習に限らず興味関心を抱いたことを、生徒流のまとめ方で追究していくノートである。レポート様式や新聞様式でとりまとめられたものは、関連教科の教師がコメントを書き込み評価している。

③「中学生が夢みる町づくり 提案発表会」に係わる活動

201年のユネスコスクール加盟に伴って、本校の3学年では、3年間のESDのまとめとして、「中学生が夢みる町づくり討論会」として、町の理事者や議員、諸団体長に参加を要請し、グループ別に討論会を行い、持続可能な山ノ内町の推進のために、中学生が考案したことを提案し、諸評価を受けてきた。今年度は、コロナ禍のため三密をさけ体育館で町関係者13名に対して、プレゼンテーションを行い、関係部局の担当者から助言や提案の内容についての評価を得た。

3 2021年度の活動計画

コロナ禍が2021年3月までに終息すれば、従来のESD活動を復帰する予定。コロナ禍が継続する場合は、今年度の活動をベースに組み直し、日常生活の中でのSDGsに関する学習や活動を行う。

- 4月 ESD・SDGsオリエンテーション(全校) 「わたしのESD・SDGs宣言」
 5月 第11回国際ユース作文コンテストへの取り組み。
 6月 1学年志賀高原ユネスコエコパーク学習。
 7月 2学年:職場体験学習に変わる、地域の職場新聞の取り組み→学校祭で展示
 7月・8月 全学年:ESDノートの取り組み→学校祭で展示発表
 10～11月 1学年:地域探検の旅→2月信州ESDコンソーシアムで発表
 10～12月 3学年:町づくり提案の調査活動、調査書作成、提案発表会
 1～2月 全学年:「私のESD・SDGs宣言」振り返り

信州大学教育学部附属長野中学校

加盟年:2018年

1 2020年度活動分野

気候変動／環境／平和／人権／福祉／健康

2 2020年度活動の概要

本校は、「ともに学び 一人となる」を学校教育目標のもと、「本質に迫る教科学習の在り方～問題発見・解決の過程における生徒の姿に焦点をあてて～」と研究テーマを据えています。SDGsを通してつける力が、将来生徒が社会に出てはたらく資質・能力の育成と捉え、活動に取り組んでいます。具体的には、総合的な学習の時間での、学生会活動を中心に実践を積み重ねています。

総合的な学習の時間「ヒューマン・ウィーク」

本年度新型コロナウイルス感染症の影響もあり、10月中旬に3日間の総合的な学習の時間をまとめ取りし、社会体験学習、SDGsに係る探究活動を行いました。1年生は「10年後の未来」をテーマに据え、SDGs(持続可能な世界を実現するための17の国際目標)の課題を窓口とし、講座ごとにワークショップ(調べ学習や調査活動)を行い、個人で追究する課題を決め出しています。2年生では、働くことをテーマとして「14歳の問い」を設定し、地元の企業の協力を得て、ワークショップを行い、自分の生き方について追究しました。今の社会はどのような状況で、これから生きていく私たちはどのような社会を築いていけばよいか、どのように生きていけばよいかなど、問いを追究しました。

①地域の企業との交流と環境美化活動

学友会が企画し、地元企業であるF株式会社と合同で地域の環境美化活動を行っています。この活動は地域の美化活動を通して近隣地域の一員であるという自覚を高めることを目的にしています。これまで17年間継続して実施しております。(本年度中止)

②自分たちの活動をSDGsの視点で見つめ直す

附属長野中学校の令和2年度学友会では、現下の新型コロナウイルス感染症に対して、全学友でできることはないか、学校生活をより安全にするために取り組むことは何かを拡大委員長会で検討してきました。各委員会から出されたものから、最終的に10の目標を「FUZOKU CORONAVIRUS COUNTERMEASURES GOALS『FCGs』」として取りまとめました。そして、令和2年12月22日に行われた第2回学友総会において、提案したところ、全学友に承認されました。

3 2021年度の活動計画

ユネスコスクールの理念や持続可能な開発目標の視点で、現在行われている本校の教育活動の質を高めるようにしたい。

- ①総合的な学習の時間をSDGsを窓口にして「持続可能な社会の創造」について探究していく。社会の一員、国際社会の一員として、自分の生き方を追究していく。
- ②特別活動、学友会活動等で、中学生の地道な活動を大切に、みんなの幸せにつながる活動を展開していく。また、話し合い活動を重視し、多様な意見を認め合う集団づくりを進めていく。
- ③本校の教育活動を外に向かって発信することを大切にする。中学生であるから考えられること、実践できることを大切にしていきたい。

信州大学教育学部附属松本中学校

加盟年:2011年

1 2020年度活動分野

環境／文化多様性／持続可能な生産と消費／その他の関連分野

2 2020年度活動の概要

本校は、「たくましく心豊かな地球市民」を学校理念として、ESDの活動を据えることを具現のためのてがかりと捉え、ESDの実践を通してこどもに内在する自己表現力・課題探究力・社会参画力を視点におき、こどもの学びの姿を追った。

具体的には、教科の等の総合化を柱に、①環境に係わる活動、②文化多様性に係わる活動、③持続可能な生産と消費に係わる活動、④その他関連分野に係わる活動を行った。

①環境に係わる活動

地域の文化財を大切に、郷土を愛する生徒を育てるために、国内外からたくさんの観光客が訪れる松本の街のシンボル「国宝松本城」の本丸や外堀の落ち葉はきを目玉にしている。また、住みよい環境を持続できる生徒を育てるため、生徒会を中心に有志を募り、学校内の環境整備、各種活動を推進した。

②文化多様性に係わる活動

普段の生活が地球規模の問題を捉えるカギであることを実感できるように、コロナ禍で感じた「つながり」とは何か、学校目標の「地球市民」とはどのような人物のことをさすのかを、年間通して違学年の小グループで集会を実施した。一人一人の身近な行動がカギであることを自覚できるように、生徒会活動を通してどんな人物を想像するのか話し合ったり、「地球市民」という言葉に込められた当時の人の思いにふれたりする中で、これからの生き方について考える機会とした。

③持続可能な生産と消費に係わる活動

全校生徒がユネスコスクールの生徒であることをさらに自覚できるように、学校行事や生徒会活動において、SDGsの17の項目とのつながりを意識し、各委員会が主体となって、各種活動を企画・推進した。

④その他関連分野に係わる活動

地域への誇りと愛着や「持続可能な社会」づくりへの担い手を育んだり、自分の生き方を問い続けることができるようにしたりするために、学級単位で3年間を通して総合的な学習の時間を、実社会や実生活の中から問いを見だし、探究的な見方・考え方を働かせ、主体的・協働的に課題をよりよく解決していく時間としている。また、SDGsの17の項目とのつながりを意識し活動を推進している。

3 2021年度の活動計画

「たくましく心豊かな地球市民」の具現のために、自己表現力・課題探究力・社会参画力が発揮されるためのカリキュラムの開発の推進を継続していく。その際、幼小中一貫教育を展開していることを活かし、学校園としての12年間にわたる生徒の学びについての成果と課題をまとめていく。

次年度も、SDGsの17の項目の目標と生徒会活動や総合的な学習な時間がどのような関連性があるのかを考え、17の目標を意識して生活できるようにする。また、1～3年時の宿泊行事の目的の一つにESDの視点を盛り込み、持続可能な社会の実現のために系統立てて展開していくことを継続していく。

コロナ禍でも国内外のユネスコスクールとの交流を強化するために、オンラインでの交流など工夫していく。

長野県中野西高等学校

加盟年:2015年

1 2020年度活動分野

生物多様性／環境／文化多様性／国際理解／平和／人権／福祉／持続可能な生産と消費／防災／健康／食育／貧困／エコパーク

2 2020年度活動の概要

本校は「教育基本法」の精神に則り、平和的な国家・社会の有為な形成者を育成し、敬と愛と信とに満ちた学園を創る」を学校目標としている。ESDの実践を通して、生徒の人間性やコミュニケーション能力を磨き、「自ら問題意識を持ち、行動できる」生徒を育てること、地域社会や国際社会に目を向け、学校の中にとどまらない幅広い視点で活動することによって、生徒の社会性・国際性を養うことを教育目標としている。具体的には、ユネスコスクールとしての活動を「総合的な探究の時間」に位置付け、全校生徒が5つのグループ(A「環境・自然・科学」、B「イベント・暮らし」、C「健康・衛生・福祉」、D「国際・政治経済・異文化理解」、E「地方自治・防災・平和・地域史」)に分かれ、関連する課題を探究するとともに、特色ある「体験的学習」に取り組んでいる。この他にも全校参加のクリーン・オリエンテーリング(COL:中野市内をゴミ収集しながら、地域の歴史や文化を学ぶ活動)を創立以来継続して行い、地域の環境美化に貢献している。

Aグループ:学校近くを流れるホタル川|の環境整備と生息地を守る活動、山ノ内町志賀高原での植樹活動「ABMORI」と植樹後のモニタリング調査を継続して行っている。また「志賀高原学習プログラム」を企画し、信州大学関連施設の協力を得てユネスコエコパークについて学んでいる。

Bグループ:中野市一本木のバラ公園で行われる「バラ祭り」のイベント企画と運営の補助、バラの手入れや中野市を活性化するための新たなイベントの企画や魅力を調査し発信している。また、中野市の文化振興イベント「信州なかの音楽祭」にも参加した。幼稚園や福祉施設と連携し、幼児教育や子育て支援に関わる実践を計画していたが、感染症拡大のため実施できなかった。

Cグループ:市の機関や社会福祉協議会等と連携し地域の医療、福祉の課題(認知症や感染症予防、医療制度など)について探究し、校外に発信している。地域の総合病院と連携し、生徒が主体的に行う県内高校生対象の「医療人セミナー」実施を計画していたが、感染症拡大のため実施できなかった。

Dグループ:チョコレートやコーヒーを通して経済格差や児童労働、貧困の解消について探究している。コーヒーについては豆の「フェアトレード」について学び、その豆を使った本校オリジナルコーヒーを開発・販売し、児童労働や公平な貿易についての理解を深めた。また開発したコーヒーは地域の一員として「おごっそフェア」などの地域のイベントで販売することで、啓発活動としても意義あるものとなっている。

Eグループ:地元から満州に渡った開拓団について学び、平和について考えている。また水害や豪雪に関わるボランティア活動を行い、地域に貢献している。今年度から中野市政策研究所と連携し、「高校生研究員」として中

野市についての研究活動にも協力している。

3 2021年度の活動計画

環境保護教育においては例年行っている活動については定着してきており、引き続き環境保全の大切さへの理解を深めながら参加していく予定である。また地元関係者との地域協働活動においてもボランティアスタッフ・企画運営スタッフ・高校生研究員として継続して関わっていく予定である。フェアトレードコーヒーの活動については有志の輪を広げながら、生産国の情勢を学び、原産地への協力・支援ができる繋がりを持ちたいと考えている。

校内においては、全校発表会を行い、各グループの活動を校外に発信する予定である。また、年1回「ユネスコウィーク」を設定し、教科横断型のコラボ授業や特別講座を通してユネスコスクールとしての理念やSDGsに対する理解を深めたい。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大で、地域のイベントが中止になり、ボランティア活動全般にも支障をきたしたが、来年度は実際の活動を通して発見したことを土台にした「実のある」探究活動を展開していきたい。また、国内外のユネスコスクールとの連携を図り、相互交流による意見交換などを通して活動を発展させたい。

「総合的な探究の時間」を今年度以上に有効活用し、これまで蓄積してきたプログラムを継続しながら、全校にユネスコの精神やESDへの理解が一層充実できるよう実践していきたい。

年生が中心となり、ランドセルや洋服など各家庭から使わなくなったもの、譲れるものを集め、再利用できるかどうかを確認した上でワールドギフト主催団体に送った。また、その場で買ってもらい、お金に換えてワクチン購入費とすることで、途上国の子ども境遇を考えるきっかけになるとともに、身の回りがこんなにもいらぬものであふれていることを実感し、課題解決に向けて学びを深めていった。

②地域と連携した活動

○スポーツレストラン

スポーツレストランとは、3年生の選択体育の受講生徒が店員となり、様々なニュースポーツをメニューとして提供し、地域の皆様にスポーツを楽しんでいただけるように公開している授業である。今年度は感染症対策のため、校内に招くことが出来なかったが、一緒に取り組める日のためにニュースポーツやバラスポーツを中心にメニューを考え準備をした。

○地域の方々と一緒に行う防災訓練

全校で防災訓練を実施するとともに、避難所となっている本校周辺に住む方々にも避難訓練に参加していただく予定であったが、密を避けるために実施することが出来なかった。来年は実施する予定である。

○ボランティア活動

例年積極的に地域に出てボランティア活動を行っているが、今年度は新型コロナウイルス感染症のため地域に出られなかったため、書き損じはがきを集めたり、募金活動などの活動を行った。落葉や積雪の際には、生徒会や運動系クラブの生徒が中心となって、学校周辺の落ち葉履きや雪かきを行い、地域に貢献する活動を行っている。開かれた学校づくりを行うとともに、地域について学び、地域が必要としていることを考え、行動に移すことで、社会に奉仕する心の育成につながっている。

③国際交流・異文化理解に係わる学習

○ワールドフェスタ国際交流ブースボランティア

国際教養科1年生全員が、長野県観光部国際課のスタッフの皆さんとともに、ブース運営のボランティアに参加し、各国のゲームや作業体験の手伝いを行った。来場者の子ども達など、多くの方々と交流した。

○国際教養科1学年を対象に善光寺ガイド研修を実施した。長野県通訳ガイドネット会員の方2名を招き、実際に自分たちでガイドする時のことをイメージしながら、熱心に取り組んだ。身近な善光寺について新たな発見があったり、ガイドする際に気を付けるべきことを学んだりすることができた。また、新たな試みとして中国の天津外国語大学附属外国語学校で日本語を学んでいる生徒たちとの交流(リモート)を実施した。大人数での交流ではあったが、日本文化に興味を持つ生徒も多く、活発にやり取りが行われた。

④伝統文化に係わる学習

1学年の探求学習として、信州(長野県)の歴史、文化、伝統、地域のすがたや課題を再発見し、SDGsと関連させながら、さらに深く追及し、自らの知識で何ができるのか、地域とどう関わっていくのかを学ぶ活動として、信州学のレポート・動画を作成し、信州の魅力や課題についての理解を深めることに取り組んだ。その際「メンターリスト」を作成し、全職員が助言可能な分野を公表することで、生徒が質問しやすい環境となるようにした。

3 2021年度の活動計画

ユネスコスクール認定5年目となる2021年度は、生徒会のユネスコスクール特別委員会が中心となって全校生徒に働きかけ、これまでの取組みを発展させ、地域やNPO等と連携し、SDGsの実現に向けた具体的活動をユネスコスクールとして実践し、広い視野で主体的に課題に向かえる学びを実現したい。

国際教養科を中心とした国際交流事業や、校内ですでに実施している様々な活動が、SDGsの実現に向けたESDであることを認識し、校内の様々な活動を有機的に結び付け、地域や様々な組織と連携して学校全体として組織的にESDの活動を実践していくことを計画している。

文化学園長野中学・高等学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

生物多様性／気候変動／環境／文化多様性／国際理解／平和／人権／ジェンダー平等／健康

長野県長野西高等学校

加盟年:2017年

1 2020年度活動分野

環境／国際理解／平和／人権／ジェンダー平等

2 2020年度活動の概要

本校は、「社会に奉仕するための資質を養う」を教育目標の1つに掲げている。その目標に基づいた教育活動を行う上で、ESD(持続可能な開発のための教育)を重要な学びと考えている。

ESDを本校における課題解決型探究学習の核と捉え、地域や国際社会の課題を自分のこととして考え、ESDの実践を行う中で、自分で考え、周りと協働し、主体的に行動することを通して、課題を解決に導く力を育成し、広く社会に奉仕する担い手を育てることを目標としている。

2020年度は、2019年度に引き続き「地域や社会とのかかわり・人とのつながり」を柱に、①地域の課題解決に係わる活動、②国際交流・異文化理解に係わる学習、③伝統文化に係わる学習を行う計画であったが、新年度間もなく休校が続き、その後も感染症対策のため特に交流面で制約があったため、リモートや校内での学習が中心になってしまったが、可能な範囲で工夫を凝らし、「天の河プロジェクト」でフードドライブ、ワールドギフト、ライトアップ等の取り組みを行うことができた。

地域やNPO等と連携し、SDGsの実現に向けた具体的行動を「キャンパスSDGs」の取り組みとして広げていこうとしている。生徒会の「ユネスコスクール特別委員会」が発足し、SDGsへの理解を深めながら、全校の意識を高めるべく啓発活動にも取り組んでいる。

①地域の課題解決に係わる活動

○地域を知る活動の実施

地域の歴史・伝統・状況等を調べ、地域の課題を知り、自分たちができることを探るために、1年生全員が「SDGsde地方創生」カードゲームに取り組んだ。今後地域を歩き、関係者へのインタビュー等を行って、地域や社会に貢献するために提案ができるよう、考え実践する活動を行っていくところである。

○文化祭代替行事「天の河プロジェクト」

地域や社会に対して発信する企画として、「校舎のライトアップ」「フードドライブ」「ワールドギフト」を企画した。「校舎のライトアップ」は、昨年記録的な豪雨災害に見舞われた被災者や、新型コロナウイルス感染症拡大防止の最前線で奮闘している医療従事者にエールを送りたいとの思いから、高台に位置する本校の校舎をライトアップし、「結」の文字を浮かび上げらせぬましの気持ちを表明した。「フードドライブ」はユネスコスクール特別委員会が中心となり、生徒、保護者、近隣の住民などから食品を寄贈していただき、フードバンク信州へ届ける活動を行った。まだ安全に食べられるにもかかわらず、捨てられてしまう食料を集め、支援を必要としている方に提供するフードバンク活動に参加することで、「持続可能な生産と消費」、「貧困」、「人権・平和」等を考えるとともに、共生社会の必要性についても認識することができた。「ワールドギフト」は2

2 2020年度活動の概要

コロナ禍で4年目を迎え、本校におけるESDへの取り組み方を抜本的に見直す1年となった。様々な活動が制限を受け、中止・延期される中、教師自身が「学びを止めない」という課題に向かって探究した。「やりたいこと」をどう実現し、子ども達のモチベーションにどうつなげていくかを考え、下記の活動を行った。

- ①ESD活動の見直しと方針の共有：BGNユネスコニュースの改訂
本年度からESD実践の専門職員を配置し、ESDやSDGsなどの理解の促進と、様々な活動成果の共有に向け、隔月で新聞を発行した。これまで単発的に行われていた活動をESDの文脈でまとめ、どのような学びの位置づけとなるのかを校内で共有することによって、ESDに対する共通認識を高めた。
- ②地域連携：「Nagano SDGs Project」への参加
長野県主催の表記活動において、SDGs14、12に係る『文中発「脱レジ袋」！新聞紙エコバッグ大作戦(プロジェクト)』を行った。生徒会が中心となり、レジ袋の環境への影響、コットン製エコバッグの環境負荷や綿花栽培の児童労働問題、4Rの視点などを中学全体で共有し、新聞紙を使ったエコバッグを作成した。地域団体へのプレゼンを行い、活動への理解と外国語新聞の提供を呼びかけ、多文化共生への視点を加えた。長野市「ワールド・フェスタ」にブース出展し、来場者へバッグを配布しながらプラスチック削減を呼びかけ、制作体験コーナーで地域住民への啓発活動を行った。
- ③キャリア教育：ニューヨーク国連本部の職員とSkype対話
キャリア教育の一環として、国連本部職員の講演と交流を行い、世界へ目を向け活動する過程や手段などを学んだ。
- ④主体的な学び：中学生学びのフォーラムへの参加
中2の3名が、課題探究の成果を報告するフォーラムに参加し、「ジェンダー」「環境」分野の成果を発表した。
- ⑤SDGsの学習：JICAエッセイコンテスト応募、SDGs講座開催
児童労働問題、原発問題など題材に、当事者意識を持つとはどういうことなのかを考える講座を行った。それを踏まえ、JICAエッセイコンテスト(テーマ「世界とつながる自分-私たちが考えること、できること-」)へ中学全員、高校1年全員が応募して学校賞を受賞した。
- ⑥信州ESDコンソーシアム：成果発表&交流会参加
中高生徒会執行部を中心に、県内ユネスコスクールの生徒たちと、ESDの学びの成果を発表し、また交流を通じてその学びを深めた。
- ⑦国際交流
コロナ禍で例年のような海外研修はできなかったが、中3生全員がカナダ語学学校とzoomで結び、オンライン交流を行った。

3 2021年度の活動計画

2021年度も、国内外の研修旅行や各種団体との交流が制限を受けることが予想され、その中で何ができるかを模索することになる。そこで、これまで課題として感じられている「内なる改革とパートナーシップ構築」を目指し、ESDの取り組みのホールスクール体制強化に向け、教員・生徒・保護者・地域への発信と理解促進に努めたい。

- ①ESD推進室の設置
ホールスクール事業の推進に向けた中心部署を設置し、教科横断、総合学習の充実、地域連携を図る。BGNユネスコニュース発行も引き続き本部署で行う。
- ②地域連携を目指すポータルサイトの制作
フォーラム、活動参加者募集、コンテスト、地域活動などの情報を掲載したポータルサイトを開設し、意欲ある生徒の主体性をサポートする。よきロールモデルの育成を図り、活動成果を年度末の報告会で全校に共有する。
- ③PBL、問題解決型学習の充実
Nagano SDGs Project 参加、総合的な学習の時間を軸とした教科横断学習の実践など。

信州大学教育学部附属特別支援学校

加盟年：2018年

1 2020年度活動分野

環境／人権／福祉

2 2020年度活動の概要

本校中学部では重点目標の一つとして、「身近な人と一緒に活動しようとする態度を育てる」を設定し、目標達成のための手だてとして、「花づくりの活動で、自分の役割を意識した活動を行い、生活環境を豊かにする」「ひととともに活動するよさを感じることができるように、地域の方や隣接する附属中学校生徒との交流活動や太鼓の演奏活動を計画的に行う」を位置付けている。

高等部では重点目標として、「ともに活動する人と一緒に生活をしようとする心情を育てる」「今と将来の生活を見据え、社会の一員として自らかわりを持つようとする意欲や態度を育てる」を設定し、目標達成の手だてとして、「ひとに思いを寄せながら製品の製作や販売、広報活動などを行い、願い(目標)の実現に向けてやり遂げる作業単元学習を行う」を位置付けている。

- ①花づくりの活動を通じた地域との交流(中学部)
地域の花壇での花づくり・花の手入れの活動では、地域の方々から声を掛けていただいたり、公園に来ている方々と触れ合ったりし、自然な交流を継続して行った。
- ②行事や生活単元学習を通じた地域との交流(中学部)
コロナ禍になる前は、クリスマス会、新年会といった行事にお越しいただき、地域の方々や附属中学校生徒とともに楽しめるゲームを工夫し、準備を行い、当日も活動を楽しむことができた。コロナ禍に入ってから、一学期の生活単元学習「中学部みんなであさひのテラスをつくろう」や二学期の生活単元学習「みんなで『あさひの運動広場』をつくって楽しもう」では、地域の方々や附属中学校生徒との交流が生徒たちの意識の中に位置付き、コロナ禍がおさまったら一緒に楽しめることを願って活動した。また、「朝陽野通信」を生徒たちが作成し地域の方々や附属中学校に届け、自分たちの活動の様子を紹介した。
- ③太鼓の活動を通じた地域との交流(中学部)
コロナ禍の前は、毎週木曜日の音楽の時間に位置付けている太鼓の演奏を通しての交流に取り組んだ。継続して参加する方もおり、生徒たちも喜んでた。

3 2021年度の活動計画

- ①花づくりの活動を通じた地域との交流・行事や生活単元学習を通じた地域との交流(中学部)
コロナ禍ではあるが、今年度実施した交流をできる範囲で継続していきたい。また、地域の方々との交流に活用できるスペースも設けることができたので、地域の方々とのより日常的な交流が実現できるような工夫もしていきたい。
- ②作業単元学習を通じた地域との交流(高等部)
今年度はコロナ禍でできなかったが、地域の公民館活動との連携を継続していきたい。具体的には陶芸班での陶芸作品作りのほか、その他の作業班での実施なども公民館のニーズも踏まえ、検討していきたい。



ESD 通信



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. 34

2020.5.20

信州ESD
コンソーシアム
事務局

目次：山ノ内町南小学校ESD研修/信里小学校ESD研修/高山小学校ESD研修

新型肺炎が流行し、休校が継続する中でも、より良い教育を求めてESD学習が進んでいます。

4月8日 山ノ内町南小学校で第1回ESD研修をおこないました

新学期で着任の教員もあり、早々にESD研修がおこなわれましたので参加させていただきました。「今年度の見通しを持ち、どのような資質の力を高めるのか、教科領域間のつながりを見通しながら考える」をテーマに連学年ごとに、ESDカレンダー作成につながる意見交換、検討をおこなった。校長、教頭さんも加わり、総合での学習を中心に地域での学習をどのように始めるか、教科とどのように関連させるかなどが、コマヤリngo、大豆の栽培や地域の遺跡や歴史遺産など、学年ごとの教材の目当てをめぐって、地域の人々とのかわりや多様な児童の疑問をどう取り上げ、発展させるかなど教育論も併せて率直な検討がおこなわれた。討論後、全員が研修の成果を述べ、最後に感想を求められ以下のように話した。「新型肺炎の流行で大変な時にESDに取り組む意義を考えると、SDGsの4番目「質の高い教育」とは何なのかが改めて問われていると思う。英文での目標をみると「質の高い教育を受けることは持続可能な社会の基盤である」とあり、さらにその下の具体的な10のターゲットも考えると、教科書を学ぶことはもちろん、高等教育への道筋も考えて授業のできる「質の高い教員」がキーワードになるでしょう。休校要請など多難な時代ですが、長い目で教育観をもってESDに取り組むことが大事ではないかと。今後もESD校内研修をおこない、実践をESDカレンダーに入れていくとのことで、学校全体での取り組みが大きく進んでいるなと思いました。(渡辺隆一)

5月1日 長野市立信里小学校でESD研修をおこないました

ユネスコスクールを目指している信里小学校から校内研修への依頼があり、遠隔授業でも活用されているZoomを使って実施することになりました。事前に小学校側での運用を長野市教委の許可をえて準備してもらい、前日に講師の自宅からZoomを立ち上げ、学校に参加を送信して、運用についての練習をおこないました。電話とZoomを使ってビデオやマイクのオンオフやタイミング、資料の共有や見え具合などを双方で確認し、研修の日程などを打ち合わせた。当日は、体育館に各自距離をとって3台のパソコンを準備し、講師とつないで研修をおこなった。お互いに遠隔での研修は初めてのことであり、順次パソコンの前に顔をだしての自己紹介から始め、次いで昨年の実践報告を、2年生では大豆の栽培から納豆づくり、3年生ではリンゴ作りから販売まで、5年生では米作りにより農家を知ることができたなど、校長からは「信里を支える人」をテーマに各学年の総合で実践し、地域の人々とは合同運動会、防災教育で地域と一緒に歩くなどのSDGs実践とその成果の報告があった。コメントを求められ、地域につながる貴重な実践がおこなわれているが、それを少し広げて、例えばスーパーでの大豆製品の大豆はどこからの輸入だろうかなど世界の視点も入れることができるのではないかと述べた。その後、PPを使ってESDとユネスコスクールの解説をおこない、質疑応答をおこなった。新任の教員からもユネスコスクールの意味がわかった、これから児童も減少するが地域とも協力して持続可能な社会のための教育を発展させたいとのあいさつがあり、遠隔での研修を終えた。(渡辺隆一)

5月19日 高山村立高山小学校でESD研修会を実施しました

新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、会議の多くが中止もしくは延期されている状況下ですので、今回の研修会はZoomを使ってオンラインで開催することになりました。せっかくのオンライン開催なのでそのメリットを活かし、学校外からの参加も呼びかけたところ、ご自宅から接続される先生や高山村役場職員の方の参加もあり、受講者数は計23名となりました。新たに異動してこられた先生もいらっしゃるから、今回の研修会では、ユネスコスクールやESD、SDGsについての基本的な知識から始まり、ESDやSDGsを学びに取り入れる方法、学習資源としてのユネスコエコパークについてまで幅広くお話をさせていただきました。

信州ESDコンソーシアムではご要望に応じて、このような各学校でのESD出前研修会にも対応しております。ご希望があればお気軽に信州ESDコンソーシアム事務局までご連絡ください。(水谷瑞樹)



信州ESD通信
No.34 2020.5.20

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544 長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：清水・高橋 TEL026-238-4034 kyoed@shinshu-u.ac.jp



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. 35

2020.7.30

信州ESD
コンソーシアム
事務局



2019年度の「信州ESDコンソーシアム成果報告書」を作成しています

2016年2月の信州ESDコンソーシアム設立から4年が経過しました。長野県内でのESD推進を目的に活動してきた成果が毎年記録されています。報告書に先駆けて、この4年間のコンソーシアムの活動概況を紹介します。

長野県内の参加ユネスコスクールは2016年には5校でしたが、2017年には17校と急増し、2018年、19年には18校とやや増加しました。現在、ユネスコスクールのチャレンジ期間中の学校や申請を考えている学校もあり、今後とも増加が期待されます。こうしたユネスコスクールを支援する地域組織や教育委員会などの学校関連組織のコンソーシアムへの参加も2016年には12、2017年には19、2018、19年には21、と着実に増加しています。こうしたユネスコスクールや支援組織の増加によってESD研修やセミナー、ワークショップなどの主催・共催・協力などの事業も増加してきており、2016年2月の発足時には2事業だったものが、2017年には14、2018、19年には23事業と着実に増加しています。また、毎年ユネスコスクール全国大会に県内教員を研修派遣しており、2017年には10名、2018年には14名、2019年には10名を派遣し、県内外の教員の交歓、交流を図ってきました。その他、コンソーシアムのコーディネーターによるユネスコスクールや申請を考えている学校への個別支援なども年々増加しており、県内での信州ESDコンソーシアムによるESD活動は着実に進展していると考えられます。

ただ、2020年度は世界的な新型肺炎の流行などにより、ユネスコスクール申請やチャレンジ校の認定などの事務手続きがやや停滞していますが、コロナ後の新しい教育においてもESDはその重要な基盤を提供しうるでしょう。今後とも、関係者、関係諸機関のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

なお、4年間の報告書の表紙を掲載しましたので、比較してご覧ください。信州の四季の風景を配し、その中に子どもたちの活動を表しました。お楽しみいただければ幸いです。



信州ESD通信
No.35 2020.7.30

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544 長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：清水・高橋 TEL026-238-4034 kyoed@shinshu-u.ac.jp



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. **36**

2020.10.30

信州ESD
コンソーシアム
事務局

目次：エコパークシンポ／中野西高／ユ協青年部／ユース会議／附属松本中学／ESD講義／通常総会

11月15日 ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践を考えるシンポジウムが開催されます。ぜひご参加ください

中部地方ESD活動支援センター主催、当コンソーシアム共催で、「ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践」をテーマとしたESDダイアログが開催されます。3回目となる今年は、白山ユネスコエコパークにフォーカスしますが、オンラインでの開催となります。各学校の事例報告では、白山ユネスコエコパークの高山市立荘川中学校のほか、山ノ内町立南小学校(志賀高原ユネスコエコパーク)、飯田市立上村小学校(南アルプスユネスコエコパーク)の先生にも発表いただきます。オンラインですので、遠路出向くことなく気軽に参加できます。ぜひご参加ください。



9月3日 中野西高でユネスコエコパークについての出前講座をおこないました



中野西高等学校で、1、2年生100名を対象に、「志賀高原ユネスコエコパーク 人と自然の調和を目指して」をテーマに出前講座をおこないました。中野西高は、長野県内の高等学校で最初にユネスコスクールに加盟した学校で、地元中野市の行政や青年会議所との協働、国際交流のほか、ABMORIなど志賀高原ユネスコエコパークでの活動にも以前から取り組んでいます。今年は総合的な探究

の時間で「環境・自然」のグループを選択した生徒の皆さんに、ユネスコエコパークとは何か?というところから、現在ユネスコエコパークが抱える課題について、「生物多様性の4つの危機」をベースにお話させていただきました。今後、これらの課題に生徒の皆さんがどのような解決策を考えるのか、楽しみにしています。(水谷瑞希)

9月26日 長野ユネスコ協会青年部主催「りもっぷる」でユネスコスクールの卒業生を招いた学習会が開催されました

長野ユネスコ協会青年部つながるは、隔週土曜日にミーティングアプリZoomを利用して学習会「りもっぷる」を開催しています。これまでに「ユネスコ憲章を読んでみよう」、「社会教育とCLC」、「世界遺産について学ぼう」等、ユネスコに関わる様々なテーマで行われてきました。そして、9月26日には、「ユネスコスクールってどんなところ?」と題して、長野西高校、中野西高校、文化学園高校出身の4人の大学生をゲストとして招き、県内のユネスコスクール卒業生のこれまでとこれからについて学びました。ゲストの4人からは、ユネスコスクールでの思い出と、それが現在の活動にどのように繋がっているのかが語られました。長野ユネスコ協会青年部からは、「ユネスコスクールで様々な経験をした若者たちの卒業後の受け皿となれるような活動をしていかなければならないことを痛感した」との意見も出され、長野県でESDを推進する青年同士の充実した学び合いの時間となりました。(安達仁美)



10月3日～4日 第9回国際ユース環境会議が開催されました

長野の中高大学生を主体としたミーティングも今年はオンラインを活用することで環境活動をしている全国のユースにも呼びかけることで視野が大きく広がった。3日は市内の会場と他県からのユースとzoomを使って今年のテーマである「ゴミって何?」を事前作成の資料を各自英語で発表した。古着をダサくなくリサイクルするなどユースらしい発表があった。「ポイ捨てを減らすには」をグループ毎に討論し、発表の後、フィリピンのゴミ山で暮らす子ども達の写真紹介があり、ゴミは見方によって有用にもなることがわかった。4日は小田切の錬成センターに集まり、端材を活



用した竹細工など昔の遊びを体験したり、海外ユースとゴミについて話したりして学習した。最後に1年後に送られる世界と自分宛への「未来への手紙」を書いてまとめをおこなった。ユース参加者は14名(県外4名)でした。(渡辺隆一)

志賀高原で信州大学附属松本中学校の高原学習がおこなわれました

10月12日に信州大学附属松本中学校の志賀高原体験学習が、信州大学志賀自然教育園などを会場に開催されました。毎年、恒例となっている附属松本中学校の志賀高原での高原学習ですが、今年はコロナ禍の影響で夏の宿泊を伴う実施が中止に。日程を日帰りに変更し、さらに「密」を避けるために全体を2グループに分けて実施するなどの工夫をして、秋の再チャレンジとなりました。この実施にあたって当コンソーシアムでも、志賀高原観光協会・ガイド組合の環境学習プログラム作成のほか、オンラインでの事前打ち合わせの設定などの協力をおこなっています。当日は晴天に恵まれ、生徒の皆さんは紅葉真っ盛りの秋の志賀高原を満喫しながら、自然と人間との共生について考えることができました。(水谷瑞希)



10月20日 長野県生涯学習推進センターの講座でESD講義と事例発表がおこなわれました



10月20日に長野県生涯学習推進センター講堂で開催された、地域と学校の連携推進研修「持続可能な社会づくりに向けた教育の新しい在り方」において、「ESD/SDGsが育むつながりと持続可能な社会」と題した講義を行いました。また、地域と連携したESD実践の事例発表として高山村立高山小学校と塩尻市宗賀公民館が実践報告をしました。生涯学習推進センターでのESDをテーマとした講座は、今年で3回目となりましたが、毎年参加者が増え今年にはコロナ禍にありながらも97名の参加者が集まりました。講座の中では、Mentimeterというプレゼンテーションアプリを使用して、SDGsとESDの認知度と「持続可能な社会づくりに必要なもの」について受講者の意見を収集しました。ESDよりもSDGsの方が認知度が高いことが分かり、また、持続可能な社会づくりに必要なものとして「人とのつながり」を挙げる人が多くいることがわかりました。信州ESDコンソーシアムも今年で5年目をむかえ、つながりの輪が広がっていることを実感しています。つながりを大切にしながら豊かな実践を育んでいきたいと改めて感じました。(安達仁美)

10月24日 信州ESDコンソーシアム通常総会が開催されました

今年の総会はコロナのため、オンラインで開催されました。開催の1時までには18団体が画面上にそろい、宮崎会長の「コンソの活動は年々広がり、ポストコロナへの夢としてSDGs2030年を目指して世界との交流も期待される」との挨拶で開会しました。議長として西教授が選任され、役員選出以下が協議され承認された。19年度事業報告は事前に配布された「成果報告書2019」にもとづいて紹介され、特に19年度の推進事業であるエコパークについてはESDやSDGsとの関連をパワーポイントで解説した。20年度の事業計画については、ユネスコスクール支援をはじめ、志賀高原エコパークでのESD実践をモデル校として全国のESD組織との交流をおこなっていることが報告された。その後、各団体の活動報告が行われた。まず支援組織のユネスコ協会・ユネスコアジア文化センター・EPO中部からは今年のユネスコスクールの地方大会や全国大会がオンラインで開催される、SDGsチェックリストが公開されているなど、地域団体の長野ユネスコ協会青年部では隔週に高校大学生とのリモート会議を開催している、長野県NPOセンターではコースリーチで高校生の自主活動を促進しているなどが、各ユネスコスクールからは独自の環境活動や国際交流など多彩な活動が紹介された。プラスチック削減ではエコバッグよりもより進んだ対策として新聞紙によるバッグ作成と提供が考案され実行されていることは新しい活動として注目される。最後に、11月15日の「白山からエコパークを活かしたESD/SDGs」のシンポジウムと2月6日の「成果発表&交流会」がいずれもオンラインで開催されるのでぜひご参加をと紹介され、宮島副会長の閉会挨拶で終了した。初めてのオンライン開催であったが皆様の協力で無事に終わることができました。(渡辺隆一)



お知らせ

第12回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会が令和2年12月6日(日)に開催されます。今大会では、「ESDを取り巻く国内外の最新の知見」「SDGsとESDの関連」「ユネスコスクールにおけるESD活動の諸課題の解決」「未来を担う人材づくりのための学校教育の在り方」などを展望します。YouTube Liveでの配信予定です。希望者はHPを確認ください。



信州ESD通信
No.36 2020.10.30

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：清水・高橋 TEL026-238-4034 kyoed@shinshu-u.ac.jp



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. **37**
2020.12.25

信州 ESD
コンソーシアム
事務局

目次：白山エコパークシンポ／ユネスコスクール全国大会／お知らせ

11月15日 「ユネスコエコパークを活かしたESD/SDGsの実践を考える」が開催されました

第1部では「①エコパークとESD/SDGs」として当コンソーシアムの水谷よりエコパークの3つの機能のうち学術支援がESDに相当し、ESDは当該地域活動のキーともなっていると、志賀高原エコパークでの事例を紹介した。「②白山エコパークについて」は地元白山ユネスコエコパーク協議会事務局の和田氏より、白山の特徴とそこでの4県7市村による協議会の組織と活動の紹介があった。多県多自治体にまたがるエコパークの運営のご苦労と国内外との盛んな連携、ネットワーク活動は長野県でも参考になるものでした。「③白山国立公園について」を白山自然保護官の迫氏が国立公園の制度や白山の紹介とともに、エコパークもジオパークも国立公園も国民のためであり協働できるという言葉が頼もしかった。



第2部では「エコパークを活用したESDの実践」として①白山、②志賀高原、③南アルプスの各エコパークでの学校でのESD活動の紹介があった。地元白山の荘川中学校の奥原氏からは小中一貫の義務学校として中学3年生が小学3年生に郷土教育を教えたり地域の方々や大学生や大学教員との連携授業などユネスコスクールとしての多彩な活動が紹介された。志賀高原の地元の南小学校の菅原氏からはESDは当初は負担感や多忙感、抵抗感があったが、これまでやってきたことをとらえなおし楽しむ、と見直すことで「いいこと進んでできるかな：ESD」として取り組むようになったと紹介した。今年「水」をテーマに全学年で実施し、毎週学内研究会もおこなっており、5年目でかなり先進的な実践であると感じた。南アルプス遠山郷の上村小学校の松崎氏からは、「地域と協同するESD」として地元の伝統の霜月祭りなど「小さな村の世界につながる大きな挑戦」としてエコパークでの学習をWEBで発信しようとするなかで、村のためにできることはとて考えごみ拾いや地域交流会などを自主的におこなうようになってきたという。

その後の討論会では水谷氏の司会で、エコパークでのESD実践で子どもたちがどのように変わったかとの問いかけに、荘川中では郷土学習に意欲化がみられた、南小ではゴミなど身近な環境への関心が高まった、上村小ではSDGsが意識化してきた、などそれぞれに顕著な効果が報告された。それらを受けてコメントの北陸ESDコンソーシアムの加藤氏からは、いずれも活動が自分ごととして学び多面的な見方が発信されているのが素晴らしい、東北コンソーシアムの小金沢氏からは、郷土教育は即ESDであり、エコパークとのかかわりを生活圏を意識して実践している、奈良教育大学の松井氏からは、ESDが定着してきたのを感じる、過疎地から街への視点も大事だが豊かな自然の学習も進めたい、など感想やコメントがあった。今回のシンポジウムはオンラインで行われ30名ほどが参加した。発表の資料は本シンポのHPに掲載されているのでぜひご覧ください。(渡辺隆一)

12月6日 第12回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会が開催されました

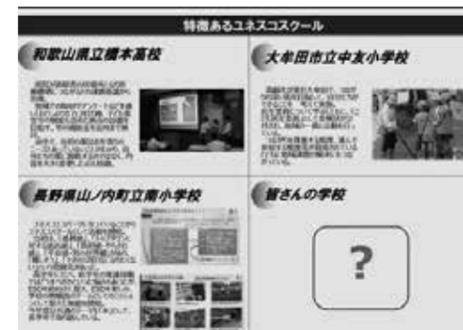
10時よりオンラインで開会し、最初は萩生田文部大臣が登壇し「文科省としてESDとユネスコスクールに期待している」との挨拶ではじまった。次いで俳優で文科省こどもの教育応援大使の香川照之氏が「自然体験は人間形成に必要で、ユネスコスクールやエコパークはESD実践の場だ」と簡潔に述べた。

午前は「ユネスコスクール地方ブロック大会からの報告」で北海道・東北、近畿、中国・四国から各大会の様子が報告された。それぞれオンライン主体による実践報告と討論で、ホールスクールによる各自の生活の見直しから地域を見直すことへ、こども宣言作りによるつながりの形成と誰も取り残さない決意、持続可能なユネスコスクールのために卒業生の学びにつな



がるコースの連携など、長野県にも参考になる多彩な実践例が報告された。

次いで、パネル討論「2030年-学校教育のグランドデザイン-持続可能な社会を構築するためのESD、SDGs、ユネスコスクールの役割」が加藤久雄(奈良教育大学学長)、杉村美紀(日本ユネスコ国内委員会教育小委員会委員長)、浅田和伸(文部科学省総合教育政策局長)の3氏によりおこなわれた。加藤氏は、奈良教育大学は初のユネスコ大学としてESDは教育を大きく変えるものでありユネスコスクールはその拠点として支援している、これからは教育も社会も大きく変わらねばならない、そのために学び続けることが必要であり、それが新しい学びであるESDだ、と。杉村氏は、国際的には「ESD for 2030」と「教育の未来プロジェクト」がありすでにコロナ後の学びとして9提案がなされている、SDGsはコロナ後ではより重要であり特にESD、国内ではその拠点であるユネスコスクールの活性化が求められる、課題として



としては認定後のフォローや学校間の交流が少なく国際・国内の連携強化を委員会としても検討している、と。浅田氏は、まずユネスコスクールの模範3校を示したが、その1校が山ノ内町南小学校であり名誉なことでした。ESDは日本の教育の力が発揮でき、ソサエティ5.0の学びに向かう生きた知識と表現力を養う深い学びであり、校長と学校は何のための教育かを問い直そう、とかなり踏み込んだ提案をされていた。指定期論者からは、ESDで学力が向上する、学校はだれも取り残さない力を地域に開こう、ESDは内向きになるが学校は子どもの姿を通して地域全体をホールコミュニティとしてのモデルになろう、など前向きな補足意見が続いた。

午後は、岡山宣言のコミットメント・提言13項目を分析する3つの観点【観点①】解決方法を探る、行動につなげる、【観点②】各学校の成果等を学校間、地域、国内外へつなげる、【観点③】学校の実践、取り組みを評価し、成果を広める、から以下の3つの実践研究と6つの分科会で課題と展望を探りました。

- 実践研究①は、課題解決のための行動化を促進する、【観点①】、
- 実践研究②は、ESDを深化・発展させるための仕組みと仕掛け【観点②】、
- 実践研究③は、SDGsに基づいた課題研究・探究活動とその評価方法の考察【観点③】、
- 第1分科会は、課題解決に取り組み、行動する児童生徒の育成【観点①】、
- 第2分科会は、ESDを踏まえた学習指導要領の趣旨の実現-2030を目指して【観点①】、
- 第3分科会は、ESDの本質を理解し、魅力を広く社会に伝える【観点①②】、
- 第4分科会は、ESDの実践をどう評価し、活かしていくか【観点③】、
- 第5分科会は、アジアにおけるユネスコスクールを中心としたネットワークの展開【観点②】、
- 第6分科会は、学校・地域社会・行政の有機連携によるESDの実践【観点②】、

がそれぞれのファシリテーターにより報告者との討論がおこなわれました。参加した実践研究②は岡山大学の藤井浩樹氏による進行で、「岡山県ユネスコスクール高等学校ネットワーク」の紹介が参加の高校生と大学生、その卒業生による動画で発表された。後の高木教員による解説で、このネットには高校生だけではなく、岡山大生や社会人卒業生も参加することで大きな成果があることがわかった。このネットは2014年の岡山でのユネスコスクール世界会議を契機としてスタートし、発展して、今では県内10校が連携して、生徒と教員それぞれが主体的に通年の活動を実施している。とたく自校のみになりがちなESD活動が大学生、卒業生も参加、連携することで大きく開かれ協奏的に発展してきたという。さらに、その高校の教員が現在は岡山大学のESD推進部のスタッフとしてユネスコスクールと大学をつなぎ、小中高を支援をしているという。長野県でもぜひ見習いたい事例報告でした。

最後に、全6分科会の発表があり、第11回ESD大賞の発表があり閉会となった。信州ESDコンソーシアムにも大いに参考になる大会でした。各報告の概要は大会のHPから見るができますので参照ください。(報告者：渡辺隆一)

SDGs ニュース 11月27日の信濃毎日新聞に、コンソーシアムの会員であるミールケアの取り組みが掲載されました。長野の高校生が会社を訪問し、SDGsの取り組みを取材した様子が記事になっています。ミールケアは各施設での給食業務をする上で、SDGsを柱として環境や人権への高い配慮や対応を実施していることを紹介しています。ユネスコスクールとの関係はまだ少ないですが今後とも連携を模索していきたい。



お知らせ 2月6日に信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会が開催されます。次号で参加、発表校などをお知らせします。

信州ESD通信
No.37 2020.12.25

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：清水・高橋 TEL026-238-4034 kyoed@shinshu-u.ac.jp



信州の環境と知に根ざしたESDコンソーシアムの形成

信州ESD通信

No. 38

2021. 2.22

信州ESD
コンソーシアム
事務局

目次：信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会／信州高大生応援フェス

2月6日 信州ESDコンソーシアム成果発表&交流会が開催されました

<午前の部 10:00～12:40>

宮崎会長より挨拶、コロナ下ですがオンラインで遠路の交流もできるようになりました、リラックスして発表交流をしましょう、手始めに手指の運動をしてみましょう、と実演し参加者を和ませました。以下順次発表の概要です。



●山ノ内町立西小学校2年生18名 ひつじの「ゆきといっしょに」をテーマに児童全員で活動しました。夜にケモノが来ていることに驚いたり、こどもが欲しいので種付けなど全員で考え活動した様子を元気に発表しました。



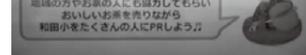
●山ノ内町立東小学校4年生20名 ビデオで故郷学習をテーマに、コカリナを練習して全校に発表、志賀の新聞をつくり広報など、町のすばらしさを知りできることを考えアートにしました。これからもふるさと学習に取り組んでいきます、と宣言しました。



●飯田市立上村小学校3名 ビデオで地域の自然体験と霜月祭りについて発表。ジオパーク・エコパークの豊かな自然を知る見学やガイドから学習し、中央構造線や下栗地区での芋ほりなど地域での生活も体験、できることを考えごみ拾いや挨拶などをおこないました。歴史学習で、霜月まつりは新しく生まれ変わりを願う祭りで、愛知県にもあることなど学び、祭りの面(おもて)づくり、舞の練習、笛も体験しました。



●飯田市和田小学校5年生6名 少人数ですがお茶と米づくりの取り組みをビデオで発表しました。5月に茶つみ、袋詰めして販売、楽しくできました。田植えから稲刈り、脱穀、たくさん採れ、収穫祭して食べました。販売したお金はSDGsのための寄付を考えています。



●宮崎県綾町立綾中学校1,2年生8名 MOVE～綾中からつなぐ持続可能な世界へ～をテーマに、1年は豊かな自然を知るで、自然と生活がつながっていることを学び、2年は人と町への探求で、宮崎の海岸と大学視察し、綾の課題と対策を考え、3年は自分への探求、ふるさとへの貢献を考え、私のSDGs宣言を实践しました。委員会活動ではSDGsの新聞づくり、給食調査、ペットやレンズケース、ハガキを回収しました。



●岐阜県高山市立庄川中学校1,2年生22名 「庄川を守っていく郷土教育」をテーマに、1年でバイカモ、2年うちわ作り、伝統の獅子舞などの学習し、一斉清掃などできることからSDGs、ESDを考え直しています。作文で入賞し地域の発展にもつながると知り他のユネスコスクールの活動も参考にしたい、と。



<講評>

○池端弘久(北陸ESDコンソーシアム、金沢市) 東小のアート制作などの表現活動、上村小のウェブづくりなどはすばらしい、和田小は小規模校の良さが生きていた、綾中はデータにもとづく活動で、庄川中は足元をしっかり学んでの活動でした。今後とも各校の実践が生きていくことを願っています。

○阿部治(立教大学ESD研究所長) 皆さんのユネスコスクールは地域の自然と人、人と人をつなぐ活動で、持続可能な地域づくりにつながっていて、それはさらに世界やSDGsにもつながっています、ESDは真の「地域創生力」なのです、と。

●山ノ内町立南小学校6年生12名 町の魅力は1野猿公苑、2リンゴ、3温泉で、挨拶運動や海を守るためプラごみが多き川を清掃し、修学旅行でも海岸でゴミ拾いなどクリーン作戦をしました。6年中心で南小五輪を開催して楽しみな

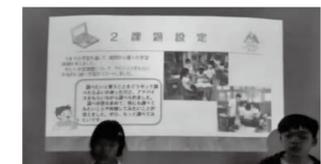
からSDGsを進めています。静岡との交流学习や役場との意見交換、ポイ捨て禁止も進めています。



●高山村立高山小学校5年生4名 扇状地では大変な米づくりに挑戦、田植え、稲刈りもし、地元と交流しました。コロナでわくわく村ができないので学級ごとに校内でキッズわくわく村を計画し実施しました。

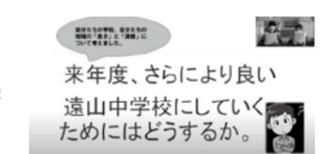


●群馬県みなかみ町立新治小学校5年生5名 エコパーク赤谷の森学習でイヌワシもいる!と自然を知りたくなった、自然は暮らしにも大切、共生社会であり皆で守り活かし、ひろめるため各自で課題研究をし、竹細工を体験、活動が新聞にも紹介され、豊かな自然を誇りに思う学習で、地域の良さをこれからも発信したいです。



●群馬県みなかみ町立藤原小学校2年生 愛鳥校なので鳥を調べビデオで発表しました。イヌワシ、キビタキ、ホオジロ、キジバトなど、鳴き声や食べ物などのクイズも作り実演、観察は大変でしたがたくさん知れて良かったです、と。

●飯田市遠山中学校2年生4名 主に生徒会活動を報告し、名物の遠山レンジャーが登場、ゴミ拾いや地域フォーラムを実施し、地域、学校を良くするために考え、1新しい、2世界につながる、3自然を守る、ために各委員会地域や行政と交流し、学級討論会などを楽しんでおこなう、持続可能な遠山郷をつくり、と宣言しました。



●山ノ内町立山ノ内中学校1年生10名 地域の魅力を探る活動で、ロマン美術館と温泉に入るサル野猿公苑、道の駅の食堂は地元食材使用です、千歳桜や世界平和観音、佐野遺跡(縄文時代)、民話も豊富で、調べたことをたくさん紹介してくれました。

<講評>



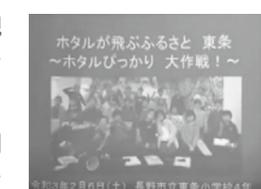
○市瀬智則(宮城教育大学) 南小は海を考えていますね、高山小はわくわく村の地域活動がすばらしい、新治小は自然のつながりを学習していた、藤原小は鳥学習から地域に広げてみると良いですね、遠山中の生徒会活動は地域に広がりがあります、山中のスノーモンキはなんで有名になったのかな、課題解決の提案にも取り組んでほしい、と。



○中澤静男(奈良教育大学) それぞれ地域の魅力発見から課題解決の提案につながるでしょう、身の回りを改めて気づくことが大事、今後とも楽しくESD活動をしてください。

<午後の部 13:50～16:00>

●長野市立東条小学校4年生 ビデオで「ホテル飛ぶふるさと、ピッカリ大作戦」を、ホテル視察会を地域の人とおこない、川調査、川清掃、飼育、校内に水路づくりしてザリガニ退治などしてホテルを守り、地域にも紹介しています。



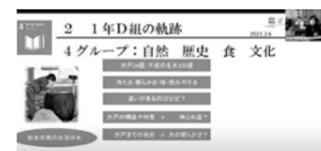
●いづな学園グリーンヒルズ小学校 ビデオで「リンゴ園プロジェクト」、8本のリンゴを育てる過程を1年から全員で発表してくれました。コロナで交流ができなくて残念でしたが、地域の支援でリンゴは完売でき、水害の長沼へ募金しました。人の気持ちのわかる人になりたいとの感想に感心しました。

●長野市立信里小学校4年生8名 ビデオでトンボ学習の紹介。ため池のシナイモツゴや貴重なトンボもいます、ヤゴを教室で飼育しトンボが羽化したときは感激しました、トンボの種類や生活の学習成果を発表し、これからもこの自然を守りたいと宣言しました。

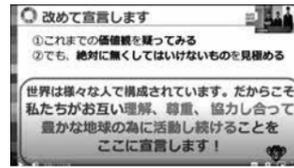


●茅野市立永明小学校3年生 ビデオで地元の山をもっと活用したいと考え「永明寺山プロジェクト」をつくり、つえを置くことにより頑張って作りました。山登りで実際に丈夫さを確かめ、次にはベンチを作りたいと考えています。

●信州大学教育学部附属松本中学校1年生 ビデオで「松本PR」をテーマに、自然、歴史、食、文化の4グループの取組を紹介。井戸が名水100選に、謙信と松本城、開智学校、縄手通りをインタビュー、パンとスイカが名物、てまりと祭り、などをそれぞれ調べて、松本の未来を考えました。



課題に向けてチャレンジを全員で宣言してくれました。



●文化学園長野中学・高等学校10名 中学生はジェンダーレス制服のために色のピンクを中心に調べて発表、改めて多様性の尊重が大事とわかった。生徒会執行部は、みんなのSDGs宣言、地球はゴミだらけなのでエコバッグを、それもエコではないので新聞紙エコバッグ作りにも、でもまだまだ課題が、なぜなぜとさらに考えていきたい。高校生生徒会は、「ボランティアって」をテーマに、ヘッドネーションなどで相手の気持ちを感じて、誰かのためにの活動をしました。文化祭をオンラインでやってみて、予想のつかない未来のために宣言しました。

●ユネスコスクール卒業生



○佐藤友音(高崎経済大学) ユネスコスクールの高校のESD交流でインドネシアに、ESD/SDGsなどに目覚めて、地元の活性化につながる地域政策の学習できる大学に進学し学んでいます。

○芋川史貴(長野大学)・小林憂生斗(長野県立大学) 中高で生徒会活動して、清掃+えびもり+フェアトレード活動などして、駅前カフェで中野をときめきの町にしたいと。



大学でも、大学祭委員や学外9時間ゴミ拾いなどでの活動し、自宅でも薪ストーブなどエコな暮らしをするようになりました。皆さんへ、わくわく楽しく、どんどんやろう、感謝も忘れずにね、との先輩からの提案でした。

●信州環境カレッジ 講師派遣などで支援する学校講座の実施状況を紹介し、ぜひホームページからご利用ください、と。

●中部地方ESD支援 ESD行事やSDGsWSシートの開発を提供している、また今年はエコツアーの開発もおこない提供を予定している、と。

<講評>

○安田昌則(大牟田市教育委員会) いずれも良い点は、1地域の宝物を発見する力、2体と心を使って行動する力、3発信し、後輩にも伝える力をもっていることです、と。



○今井和愛(北陸ESDコンソーシアム、石川県) いずれも1自分ごとになっている、2身近なことを、3問いにしているなど、課題を広げ発信していく力を感じました。

○及川幸彦(東京大学教育学研究科) 小では「創る」として、ホテルやヤゴなどの環境を造ることで学習が深まってきている、体験することで課題解決につながり、自然と地域のつながりを知ることで新たなつながりができてくる。中高では、探求がどれほど深まっているか、



発信して終わりではなく、常識を疑うなど問題提起すればより発展する、ユネスコスクールはESDを学び続ける仕組みでもある、と。

* Zoomでの意見や感想は後ほど集約して各発表校に送られました。

2月7日 信州高大生応援フェス/ユースリーチが開催されました

「長野を少しずつもっと良くする」を合言葉に、長野に住む高校生や大学生が学校の枠を超えて、まちの課題を学生自らが発見し、アクションプランを作成、それを実践していきます。その成果発表会が長野県NPOセンター主催であり、以下の発表とそれへの評価とコメントがありました。

- ACT Goods bankリサイクルを学生に呼びかけています。
- DressUP 長沼の桜を震災の東北に&街角ピアノを長野に置きたい。
- Gomitomo ゴミ拾いは愛だ!をかかげ行動から社会を変える!
- 身近な危険、水害 長野の経験から学び備える必要を。
- ShainPro 通信制高校生のネットワークを呼び掛けている。
- 飢餓ゼロの世界を作る 日本の食品ロスをなくすキャンペーンを小中学生にしたい。
- 川中島でフードドライブ 地元にはなかったのを始めた、継続したい。
- 気候危機アクション服(全エネルギーの10%)のリメイクでCO₂を減らしたい!

など、多くの高大生が身近な課題から解決法を考え、実際に取り組んでいます、新しい時代の幕開けを感じます。



信州ESD通信
No.38 2021.2.22

発行：信州ESDコンソーシアム事務局 編集：渡辺隆一
〒380-8544 長野市西長野6 信州大学教育学部
事務局：清水・高橋 TEL026-238-4034 kyoed@shinshu-u.ac.jp

信州ESDコンソーシアム
成果報告書2020

令和3年8月

編集・発行 信州大学教育学部
信州ESDコンソーシアム事務局
〒380-8544 長野市西長野6-口
TEL:026-238-4034
E-mail:kyoesd@shinshu-u.ac.jp